

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和63年度

1989年

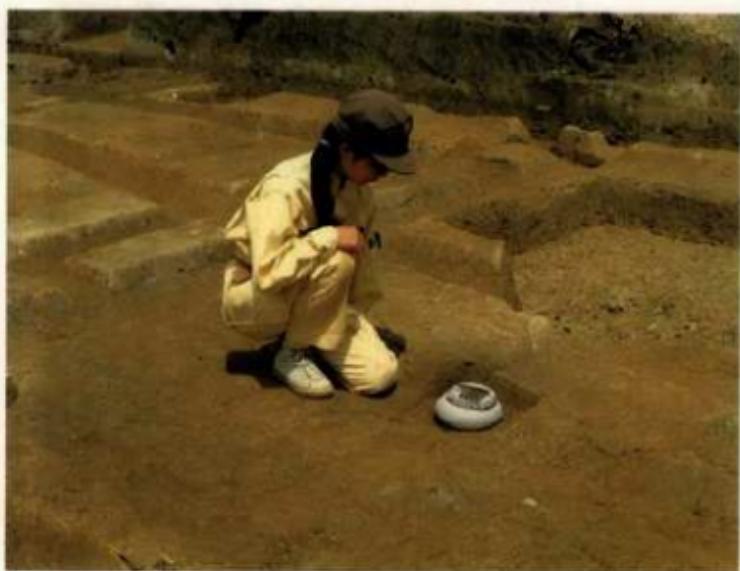
奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

昭和63年度

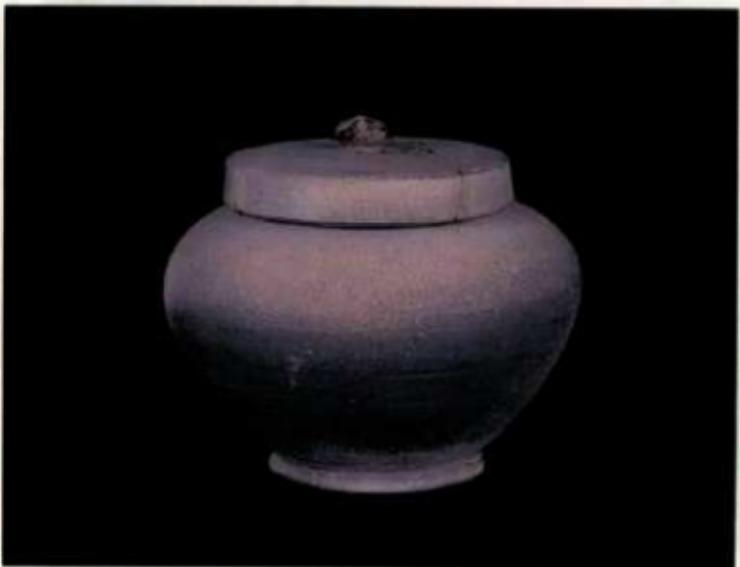
1989年

奈良市教育委員会



土器埋納場 S X 17

左京五条五坊十坪（第148次）



S X 17 出土須磨器

左京五条五坊十坪（第148次）



発掘区全景（航空写真） 左京二条四坊二坪（第 157 次）



発掘区全景（航空写真） 左京二条四坊二坪（第 157 次）



井戸 S E 41 出土馬具（轡）

左京二条四坊二坪（第 157 次）



井戸 S E 06 出土壺形銅製品

左京九条一坊二坪（第 167 次）

序

奈良市は、いうまでもなく古代日本の都平城京のおかれた地で、その地下には奈良の歴史、日本の歴史が凝縮されて残されています。奈良市民は、まさに歴史の堆積の上に日常、暮らしているといって過言ではありません。常に地下の歴史遺産と地上の現代生活が境を接しているのが本市の特徴であり、このことは、保護、保存すべき埋蔵文化財が、常に現代都市の活動の前に破壊、消滅の危機に直面していることにはかなりません。こうした現状に対応するには、可能な限り、これらの歴史遺産を破壊、消滅からまもり、その意味する歴史の事実を解明し、その教訓を奈良市の将来に役立てることと、先人の貴重な遺産として後世に引継ぐことが、奈良市の奈良らしい発展の上で重要であり、それが現代の奈良に生きる私たちに課せられた責務であるといえます。

このため、奈良市ではこの十年来、埋蔵文化財の発掘調査を中心に微力ながら、その保護、保存に努めてまいりましたが、その間、平城京をはじめ奈良の歴史をひもとく多くの新事実を得ることができました。本報告も、その一部として、昭和63年度に実施した発掘調査で得られた成果をまとめたものです。後世に伝える資料として、また学術研究の資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査と本書の作成にあたって、御指導、御協力いただきました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々、調査に御協力いただいた多数の市民の方々に厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一

例　　言

1. 本書は、昭年63年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。本年度実施した発掘調査は、調査地一覧に示した43件であるが、平城京東市推定地の調査については、別に概要報告書を刊行するため本書には、集録していない。また、平城京169次、173次調査については、調査が継続中であるため次年度に報告する。
2. 発掘調査は、下記の調査体制で実施した。

奈良市教育委員会文化課 課長：館野和己
埋蔵文化財調査センター 所長：大原和雄 主任：川崎尚彦
森下恵介 西崎卓哉 中井 公 篠原豊一
三好美穂 立石堅志 森下浩行 鎌方正樹

各調査の調査担当者は、調査地一覧に示すとおりである。
3. 本書の執筆は、それぞれの調査担当者が分担しておこない、文末にその文責を明らかにした。また、第148次調査出土胞衣壺の残存脂質分析については、帯広畜産大学中野益男教授および北海道測量図工社総合科学研究所に依頼し、その成果を付論として掲載した。
4. 各調査地の調査次数は、平城京および各遺跡ごとに奈良市教育委員会がおこなった調査を通算したものである。発掘構造図に付した座標値は、国土方眼第VI座標系による座標値である。高さはすべて海拔高で示した。遺構分類記号、遺物分類記号は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠した。遺構番号は、調査ごとの仮番号である。
5. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係機関の指導、協力があった。記して感謝したい。
6. 発掘調査と出土遺物の整理には下記の方々の御助力を得た。

相原嘉之、大垣栄美、大西誠、加藤健毅、角谷和美、篠永尚美、清水福子、芹川順子、玉林尚子、鳥羽泰子、仲井光代、中島満寿江、原田憲二郎、福田明美、古川成美、保坂香恵、松山徑子、三上牧子、三木隆、村松京子、山村光子
7. 本書の編集は、森下恵介がおこなった。

目 次

I 平城京の調査

1. 平城京左京五条五坊十坪の調査 第148次	1
付論 平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した 胞衣壺の残存脂質について 帯広畜産大学 中野益男他	5
2. 平城京東四坊大路の調査 第149次	15
3. 平城京朱雀大路の調査 第150次	16
4. 平城京左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査 第151次	17
5. 平城京左京七条四坊十五坪の調査 第152次	23
6. 平城京左京二条五坊十五坪の調査 第153次	24
7. 平城京左京五条四坊十四坪の調査 第154次	25
8. 平城京左京三条二坊十坪の調査 第155次	26
9. 平城京左京二条二坊五坪の調査 第156次	27
10. 平城京左京二条四坊二坪の調査 第157次	29
11. 平城京右京四条二坊二坪の調査 第158次	38
12. 平城京二条大路の調査 第159次	39
13. 平城京右京一条二坊十二坪の調査 第160次	40
14. 平城京右京三条四坊八坪の調査 第161次	40
15. 平城京左京六条二坊七坪の調査 第162次	41
16. 平城京左京六条二坊二坪の調査 第163次	43
17. 平城京左京二条六坊北郊の調査 第165次	45
18. 平城京左京九条三坊九・十坪境小路、九条条間路の調査 第166次	47
19. 平城京左京九条一坊二・七坪境小路の調査 第167次	48
20. 平城京東四坊大路、左京四条四坊十四坪の調査 第164・168次	50
21. 平城京左京二条三坊三・六坪境小路の調査 第170次	54
22. 平城京左京二条五坊北郊の調査 第171次	55
23. 平城京左京二条四坊七坪の調査 第172次	57

II 寺院の調査

1. 大安寺旧境内の調査 第32～37次	61
2. 元興寺旧境内の調査 第14～17次	66
3. 西大寺旧境内の調査 第2～3次	77
4. 薬師寺旧境内の調査 第4次	80
5. 新薬師寺旧境内の調査 第2次	81

III 平城京及びその周辺その他の調査

1. 史跡櫛革山古墳群接地の調査 第1～2次	87
2. 平城京城、周辺のその他の調査	88

図版目次

卷首図版 1 土器埋納場 SX17	左京五条五坊十坪 (第148次)
S X17出土須恵器窓	左京五条五坊十坪 (第148次)
卷首図版 2 兼振区全景 (航空写真)	左京二条四坊二坪 (第157次)
卷首図版 3 井戸 S E41出土馬具 (櫛)	左京二条四坊二坪 (第157次)
卷首図版 4 井戸 S E06出土豊形縄製品	左京九条一坊二坪 (第167次)
図版 1 第148次 調査地遺景・兼振区全景	図版29 第167次 兼振区全景
図版 2 第148次 満 SD18・堀 SA16	井戸 S E06
建物 S B09	図版30 第167次 満 SD05, SD03
図版 3 第148次 土器埋納場 SX17	満 SD02, SD04
S X17出土土器内部	図版31 第164・168次 兼振区全景
図版 4 第149次 兼振区全景	(航空写真)
図版 5 第150次 兼振区全景	図版32 第164次 兼振区全景
図版 6 第151次 兼振区全景	十四坪内建物群
図版 7 第151次 満 SD03・満 SD02	第2 兼振区全景
横 S X11	図版33 第165次 東西坊大路
図版 8 第152次 兼振区全景	十四坪建物群
建物 S B01, S B02	図版34 第170次 兼振区全景
図版 9 第153次 兼振区全景	図版35 第171次 兼振区全景
第159次 兼振区全景	図版36 第172次 兼振区全景
図版10 第154次 兼振区全景	図版37 大安寺32次 兼振区全景
図版11 第155次 兼振区全景	図版38 大安寺33次 兼振区全景
図版12 第156次 兼振区全景・拡張区全景	大安寺34次 兼振区全景
土器埋納場 SX10	図版39 大安寺35次 兼振区全景
図版13 第157次 兼振区全景	出土形象埴輪
兼振区西半部	図版40 大安寺36次 兼振区全景
図版14 第157次 兼振区東半部	図版41 大安寺37次 第1 兼振区全景
堀域小路 S F01	第2 兼振区全景
図版15 第157次 堀 SA04, 05	図版42 元興寺14次 兼振区全景
堀 SA05	図版43 元興寺14次 兼振区全景
図版16 第157次 建物 S B12	兼振区西半部
建物 S B20	図版44 元興寺14次 満 SD09, 石列 S X10
建物 S B21	満 SD14, 流路 S D02
図版17 第157次 井戸 S E30	図版45 元興寺14次 流路 S D02・満 SD09
井戸 S E36	木堀 S X16
井戸 S E41	図版46 元興寺14次 井戸 S E08・奈良塩園
図版18 第158次 兼振区全景	図版47 元興寺15次 兼振区全景
図版19 第158次 井戸 S E03	図版48 元興寺16次 兼振区全景
井戸 S E02検出状況	図版49 元興寺17次 兼振区全景
図版20 第160次 兼振区全景	石垣全景
図版21 第161次 兼振区全景	図版50 西大寺 2次 兼振区全景
図版22 第162次 北兼振区全景	図版51 西大寺 3次 兼振区全景
図版23 第162次 南兼振区全景	井戸 S E01
図版24 第163次 C兼振区全景	図版52 新秦寺 4次 兼振区全景, 標立柱建物
図版25 第163次 B兼振区全景・A兼振区全 景, 満 SD02, 建物 S B04	図版53 新秦寺 2次 兼振区全景
図版26 第165次 南北兼振区全景	兼振区東半部
図版27 第165次 東西兼振区全景	図版54 史跡瓢箪山古墳隣接地
図版28 第166次 北兼振区全景	第1次 兼振区全景
南兼振区全景	第2次 兼振区全景

昭和 63 年度 地調査一覧



昭和63年度平城京内発掘調査位置

I. 平城京の調査

1. 平城京左京五条五坊十坪の調査 第148次

I はじめに

本調査は、奈良マツダオート株式会社届出の店舗改築に伴なう事前の発掘調査である。調査地は、奈良市西木辻町45で、平城京条坊復元では平城京左京（外京）五条五坊十坪の西側部分にあたる。調査期間は昭和63年4月4日から5月26日までである。

II 検出遺構

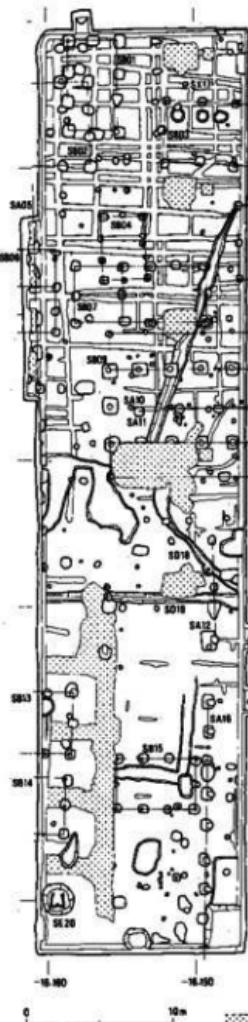
発掘区の土堆堆積は、造成盛土の下に耕土、床土、灰褐色土、整地土（灰褐色土）と続き、黄褐色粘土の地山となる。地山上面の標高は約67.0m、現地表面からの深さは80cmである。奈良時代の遺構のほとんどが整地土を掘込んで構築されていた。また、発掘区北半分の整地土中には多くの古墳時代の遺物が含まれていた。

主な検出遺構は、掘立柱建物11棟、掘立柱列5条、井戸1基、土器埋納壙1基、奈良時代、古墳時代の溝それぞれ1条で、その他に中世の土壤、素掘り溝がある。以下に各遺構の概略を記す。

SB01 桁行3間(6.3m)、梁間2間(3.6m)の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行2.1m等間、梁間1.8m等間である。柱穴の重複関係からSB02よりも古いことがわかる。

SB02 桁行3間(6.0m)、梁間1間(1.8m)以上の掘立柱南北棟建物と考えられる。柱間は、桁行2.0m等間である。

SB03 桁行2間(4.8m)以上、梁間2間(4.2m)の掘立柱東西棟建物である。柱間は、桁行2.4m等間、梁間2.1m等間。桁行北側柱列の内側にそって3基の円形土壤が並ぶ。円形土壤の規模は、径80cm~1.0m、深さ25~30cmで、3基ともほぼ同規模である。大甕等の



第148次調査検出遺構 (1/400)

据付け痕跡ではないかと思われる。

SB04 柱行3間(4.5m)、梁間2間(3.0m)の掘立柱南北棟建物。柱間は柱行1.5m等間、梁間1.5m等間である。

SA05 南北8間(19.2m)以上の掘立柱列。柱間は2.4m等間である。建物になる可能性もある。

SB06 柱行3間(5.7m)の掘立柱南北棟建物かと思われる。柱間は北から2.7m、1.5m、1.5mである。

SB07 柱行4間(8.6m)、梁間2間(3.8m)の掘立柱東西棟建物。柱間は、柱行が西から3.0m、1.8m、1.8m、2.0m、梁間が1.9m等間。西から1間目の柱筋に間仕切の柱穴がある。

SB08 梁間2間(5.0m)の掘立柱東西棟建物と考えられる。柱間は2.5m等間。

SB09 柱行4間(8.4m)以上、梁間2間(5.0m)の掘立柱東西棟建物で、南北2面に廂をもつ。身舎の柱穴に比べて廂の柱穴はかなり小さい。柱間は、身舎が柱行2.1m等間、梁間2.5m等間、廂の柱行は北から2.4m、不明、不明、2.1m。梁間は2.5m。

SA10 東西2間(5.4m)以上の掘立柱列。柱間は2.7m等間。

SA11 東西2間(5.4m)以上の掘立柱列。柱間は2.7m等間。

SA12 南北2間(6.9m)の掘立柱列。柱間は北から3.3m、3.6mである。

SB13 柱行1間(1.8m)以上、梁間2間(4.2m)の掘立柱東西棟建物。柱間は、梁間2.1m等間である。

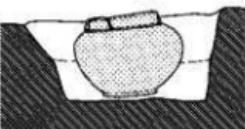
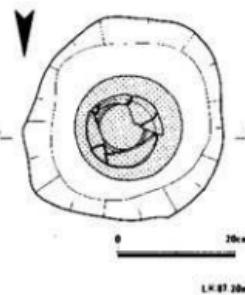
SB14 梁間2間(3.8m)の掘立柱東西棟建物になるとを考えられる。柱間は北から1.8m、2.0mである。

SB15 柱行3間(5.4m)、梁間2間(3.4m)の掘立柱東西棟建物。柱間は、柱行1.8m等間、梁間1.7m等間。

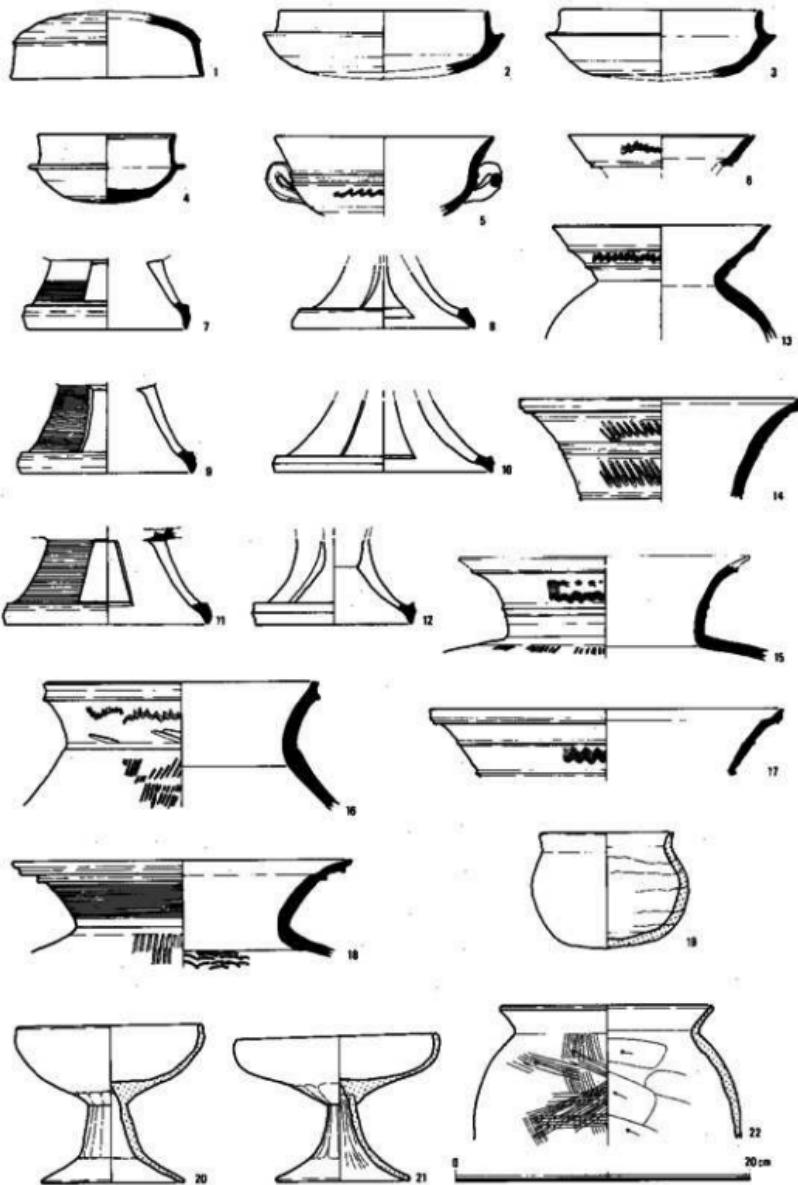
SA16 南北7間(14.7m)以上の掘立柱列。柱間は、2.1m等間である。

SX17 一辺34cmの平面隅丸方形を呈し、深さ15cmの土壇。その中央から壺Aが蓋をして据えられた状態で出土した。蓋は後世の素掘り溝により一部破壊されている。壺内には和同開珎5枚が納められていた。壺内土壤の脂質を分析した結果、胞衣の脂肪酸が検出され、これが胞衣壺であることが判明した。

SD18 最大幅1.0m、深さ20cmの流路。北で東に振れ、東へ屈曲して発掘区外へ続く。埋土からの出土遺物により、古墳時代中期のものと考えられる。



土器埋納壺 SX17 (1/10)



第148次調査出土土器 (1/4)

SD19 幅60~80cm、深さ30cmをはかる素掘りの東西溝。埋土から奈良時代の須恵器・土師器が少量出土した。

SE20 径4.3m、深さ3.0mの円形掘形をもつ井戸。井戸枠は一辺1.9mの正方形で、縦板組横棟留の構造である。最下段と2段目の横棟が残存していた。枠内から8世紀中~後半の土器が出土している。

III 出土遺物

出土遺物のほとんどが土器類で、丸瓦・平瓦片が少量出土している。遺物には、古墳時代・奈良時代・中世のものがあり、ここでは古墳時代の遺物および奈良時代の胞衣壺について述べる。

古墳時代の遺物 須恵器(1~18)、土師器(19~22)、埴輪がある。

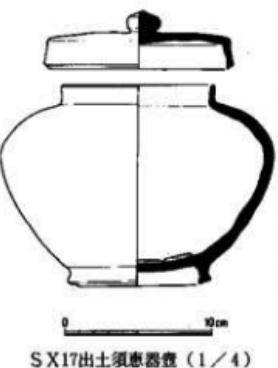
須恵器には蓋杯(1~4)、高杯(5~7~12)、甕(6)、壺(14)、甌(15~18)がある。1~4の復元口径は、順に13.2cm、14.5cm、13.6cm、9.2cm。5は把手つきの無蓋高杯。高杯脚部には外面をカキ目調整するもの(7・9・11)とナデ調整のもの(8・10・12)がある。透孔は7・9・12が3方向、8・10・11が4方向に復元できる。

土師器には壺(19)、高杯(20~21)、甌(22)、瓶などがある。19は粗製で外面に二次焼成を受けた痕跡がある。20~21は脚部を杯部底面に挿入して接合部に粘土を補充し成形する。杯部底面に挿入時の棒状圧痕が残る。脚柱部内面のシボリ目を20はナデ消すが、21は無調整。22は口縁端部が外傾する凹面をなす。瓶には把手が角状のものと棒状のものとがあり、その中には上面にヘラによる深い切り込みを有するものもみられる。5~13・19~22はSD18から出土したもので、19~22は一地点から、一括で出土した。

埴輪は小片数点のみであるが、蓋形埴輪の立飾部分と思われる破片がある。

胞衣壺 SX17に埋納されていた須恵器壺Aは、胞衣壺として使われており、壺A蓋を伴なった状態で検出した。壺は、口径10.2cm、器高13.6cm、最大径は肩よりやや下がった位置にあり18.4cmを測る。調整は、口縁部内外面ともにロクロナデ調整。肩部から体部下半までを、ロクロナデした後にロクロ削りで仕上げている。蓋は、口径12.0cm、器高3.95cmを測る。縁部内外面、頂部内外面ともにロクロナデ調整を施している。焼成は、壺・蓋とともに良好である。

壺・蓋の形態からみて、奈良時代中頃~後半にかけてのものと考えられる。



(鐘方正樹・中井 公・三好美穂)

<付論>

平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した 胞衣壺の残存脂質について

帯広畜産大学畜産環境学科

中野益男、中岡利泰

北海道測量図工社総合科学研究所

福島道広、中野寛子、長田正宏

動植物の生体を構成している主要な生体成分に蛋白質、糖質、脂質がある。これらの有機質は、一般に長期間地下に埋蔵されたり、空気にさらされている間に、微生物の作用を受け、分解・消滅すると考えられてきた。⁽¹⁾現に、有機質の遺物は、低湿地や貝塚、泥炭層土壌あるいはかなりの還元状態の環境下において発見されている。しかし、一般土壤中では、大部分の有機質の遺物の形状は崩れ、消滅てしまっている。最近、遺物を構成している主要な成分の1つである脂質は、消滅せずに、ごく微量ながらも、比較的安定した状態で残存していることが判明した。^(2,3)

すべての動植物は脂質をもっており、その主成分である脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なっている。この脂肪酸およびステロール組成の違いを利用して、考古学資料に残存する脂肪酸の化学組成と現生動植物のそれを比較すれば目に見えない遺物の同定が可能となる。しかし、脂肪酸およびステロールだけでは動物種を正確に判定することが困難な場合がある。このような場合の動物種判定には、動物ごとに特有な糖鎖をもつ糖脂質、とくにガングリオシド系糖脂質が重要な情報を提供してくれる。しかし、糖脂質は微量しか存在しないため、従来の化学分析では分離同定が困難である。そこで、微量であっても分析可能な免疫学的手法の利用が期待される。免疫反応、すなわち抗原抗体反応をつかさどる糖脂質は、糖と脂質を1つの分子中に含む生体成分である。これは脂肪、蛋白質、炭水化物の三大要素とは異なり、生細胞の本質的な営みの場である生体膜を形成する重要な成分である。脂肪がごく微量ながら消滅せずに残存している事実から考えると、脂肪に包み込まれて糖脂質が数千年数万年を経て残存する可能性はある。この古代糖脂質、とくに古代ガングリオシドは、近年開発された酵素免疫測定法(Enzyme-Linked immuno sorbent assay, 以後ELISA法)^(4,5)を用いて分析可能と考えられる。今回、平城京胞衣壺に残存する脂質の性格を化学的および免疫学的手法を用いて解明し、胞衣壺に埋納されたものを特定しようとした。

1. 胞衣壺試料

胞衣壺は、蓋の一部が破れ、壺の中が土で覆われている状態で出土した(図版3)。底部には和同開珎5枚が認められていた。残存脂質分析試料採取地点を図1に示す。壺内土壤は、壺上部から5.5~8.0cmを試料No.1、8.0~11.0cmを試料No.2、11.0cm~底部を試料No.3、底部を試料No.4の4層に分けて採取した。壺内壁面は試料No.5として別に抽出した。

2. 残存脂質の抽出

試料を適当なガラス容器に入れ、試料が浸るくらいの量、約3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混合溶液を加え、10分間3回超音波処理を行い残存脂質を抽出した。得られた抽出液は吸引ろ過によって夾雑物を除去する。以上の操作を3回行った。得られ

た全抽出溶液を減圧濃縮したのち、100~300mlのクロロホルム-メタノール混合液を加え、分液ロートに移した。次いで Folch 法により、濃縮量の4分の1量の1%塩化バリウム水溶液を加え、攪拌後、一夜静止させクロロホルム層と水層に分画した。このクロロホルム層を減圧濃縮して残存脂質を得た。残存脂質は、クロロホルム-メタノール(2:1)混合液を加え、-20°Cで冷凍保存した。

遺跡遺物から残存脂質を抽出して Folch 分配から得られた水層は、減圧濃縮後、透析膜(VISKOSE SALES CORP 社製)を用い超純水中で透析し、塩化バリウムを除去した。透析内容物は、減圧濃縮して水可溶の古代糖脂質を得た。

壺内土壤試料No.1~No.4の残存脂質抽出量は、0.0037~0.0492%平均0.0199%であった。その残存脂質抽出量は、秋田県大湯環状列石周辺遺跡から出土した壺棺土器の平均0.036⁽⁶⁾%の0.55倍低かったが、高山市寺東遺跡から出土した埋設土器の平均0.0079%と比べて2.5倍高かった。胎衣壺底部および側壁部内土器からも9.5mgの残存脂質が抽出された。いずれの試料の残存脂肪抽出量とも分析には十分量であった。

残存脂質の脂質種は高性能ケイ酸薄層クロマトグラフィー(HPTLC)で分析した。主要な脂質種は単純脂質の遊離脂肪酸、グリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリドで、次いでステロール、ステロールエステルの順に多く、これらで残存脂質の約82%以上を占めていた。その他に、単純脂質分析用展開浴媒によるHPTLCで原点に留まるリン脂質や糖脂質を含む複合脂質が8~16%近く分布していた。とくに試料No.3およびNo.4壺下層土底部土および試料No.5の壺底部内壁で高い含量を示した。

3. 残存脂質の脂肪酸組成

埋設土器および土壤の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°Cで2時間封管中で反応させて脂肪酸メチルエステルを生成した。この脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーに供して脂肪を構成する脂肪酸を検索した⁽⁸⁾。

試料の残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、バルミチン酸(C16:0)、バルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)など10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。脂肪酸の組成は壺上層土・中層土と下層土で異なっていた。試料No.1上層土ではバルミチン酸、試料No.2中層土ではステアリン酸という飽和脂肪酸が主成分で、全脂肪酸の約80%を占めるという単純な脂肪酸組成を示した(図2)。この脂肪酸パターンは、一般土壤によく見られる植物腐植由来するそれとは少し違っていた。これに対して、下層土、底部土および壺底部内壁では脂肪酸の種類も多

く、高等動物の脳、血液、臓器等に多く分布するアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸等の高級飽和脂肪酸が比較的高い割合で分布していた。とくに、試料No.3下層土では、リグノセリン酸約17%、アラキジン酸約13%、ベヘン酸約11%とこれらで全脂肪酸の約40%近くを占めていた。これらの脂肪酸パターンは高等動物の臓器に類する遺存体の存在を示すものである。

4. 残存脂質のステロール組成

埋設土器および土壤の残存脂肪からステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂質の主なステロール組成を図3に示す。残存脂質から7~11種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。試料No.1上層土では、動物に固有に存在するコレステロールを検出しなかった。しかし、動物性コレステロールは試料No.2中層土で約36%、試料No.3下層土で約60%と底部へ行くに従って増加していた。試料No.4底部および試料No.5壺底部内壁ではステロールの約80%は動物性コレステロールで占められていた。これは、植物腐植土中に動物脂肪が存在していたことを示唆している。胞衣壺および壺内土壤のステロールのうち、動物由来のコレステロールと植物由来のシトステロールの分布比から、動物性遺存体の存在を確認したのが表2である。コレステロール分布比は試料No.2中層土およびNo.3下層土で7前後、試料No.4底部土で19、試料No.5壺底部内壁で17となり、底部でコレステロール比の高いことを示している。一般に動物性遺存体の存在を示唆する指標値は0.6前後である。従って、動物性遺存体は胞衣壺底部の位置に存在していたといえる。^(9,10)

これらの成績と先の脂肪酸組成から、胞衣壺には、動物性遺存体の存在が示唆された。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂質の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に現生各種動物および遺跡出土獸骨脂肪酸との類似度とも比較して、動物種の特定を試みた。^(6,11,12,13)

胞衣壺および壺内土の脂肪酸組成の類似度を相関行列距離にして表した樹状構造図を図4に示す。試料No.4底部土およびNo.5壺底部内壁は、ヒト人骨等の脂質と同じB群を形成し、ヒト体脂肪・胎盤および平安時代前期の郷楽遺跡の胞衣埋納の可能性のある埋設土器群のC群とは類似距離0.14以下で同じ系統樹に属していた。動物臓器に由来する脂肪酸を多く分布する試料No.3下層土はA群に属していたが、類似距離0.2以下ではB群とC群に

近かった。試料No.1上層土および試料No.2中層土は、B群およびC群とは少し離れた系統樹に属していた。

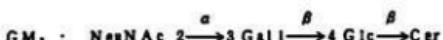
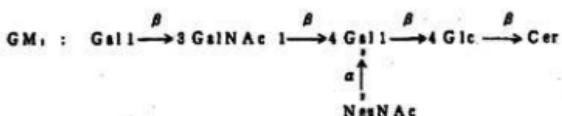
これらの成績と脂肪酸およびステロール分析の結果を総合すると胞衣殻には、胎盤に類する動物体が納められていたと推測される。

6. 酵素抗体法 (ELISA法)による糖脂質群の認定

哺乳動物赤血球膜は特異な糖脂質群で構成されている。表3に見られるように、主要な糖脂質の化学構造とくに糖鎖構造は動物種ごとに異なる。この糖鎖の違いを抗原抗体反応によって読み取り、動物種を認定する。反応には特異な酵素を標識した酵素抗体法 (ELISA法)⁽¹⁵⁾を用いた。

クロロホルム-メタノール混合溶媒で抽出・分離したクロロホルム層と Folch 水層を0.4Nメタノール性苛性ソーダを用いてアルカリ処理し、グリセロリン脂質などのエステル化合物を除去する。得られたアルカリ安定脂質の糖脂質からケイ酸カラムクロマトグラフィーおよび陰イオン交換体のDEAE-セファデックスA-25カラムクロマトグラフィーにより、古代ガンギリオシドを分画・精製した。このものを抗原としてポリプロピレン製のマイクロプレートに固着させ、ウサギ由来のポリクロナール抗体の抗GM₁、抗アシアロGM₁、抗アシアロGM₂、抗GM₃、抗GM₅ (ヘマトシド)、抗フォルスマンと反応させる。未結合抗体を除去後、二次抗体としてペルオキシダーゼ標識抗免疫グロブリン抗体 (抗ウサギIgG) と反応させる。未結合標識抗体を除去後、発色基質の5-アミノサリチル酸と過酸化水素で発色させてからマイクロプレート光度計で490nmの吸光度を測定した。

ELISA法による抗GM₁に対する反応吸光曲線を図5に示す。胞衣殻上層土 (試料No.1およびNo.2) は強い吸光度を示さなかったが、胞衣殻底部側面 (試料No.5) および底部土 (試料No.3、No.4およびNo.5) からは、高い吸光度が認められた。この反応から、胞衣殻底部には古代ガンギリオシドGM₁が広く分布していることがわかった。抗GM₃に対しても同様の反応結果を得た。GM₁およびGM₃は、次に示すような糖鎖構造からなる。



いずれも末端にN-アセチルノイタミン酸（シアル酸、NeuNAc-）を持っている。ポリクロナール抗体の抗GM₁および抗GM₃は、このシアル酸を認識する。ヒト胎盤には、4つの主要なガングリオシド（G-1、G-2、G-3、G-4）があり、その末端にはシアル酸を持っている。従って、抗GM₁および抗GM₃はこのシアル酸を認識していることになる。この抗体反応から、胞衣壺底部には、胎盤に由来する古代ガングリオシドが分布していたと判定された。

この他、抗アシアロGM₁、抗アシアロGM₂に対しても、吸光度を認めたが、活性は低かった。しかし、抗フォルスマンに対しては、反応を示す吸光度を観察しなかった。このことから、胎盤以外の他の臓器の可能性は少ないと推測される。

7. 総括

胞衣壺上層土からは、動物遺存体の残存脂肪酸とコレステロールは検出されなかった。しかし、胞衣壺底部からはヒト由来の脂肪酸とコレステロールを検出した。

胞衣壺底部に分布する糖脂質を酵素抗体法により分析したところ、ヒト胎盤に由来する古代ガングリオシドが認定された。胎盤以外の臓器に由来する古代ガングリオシドの分布は微弱であった。

この結果は文献史料に記載されている事実と完全に一致していた。胞衣壺に納められている動物遺存体がヒト胎盤であることが精密に科学的に認定された最初の事例である。⁽¹⁷⁾

＜参考文献＞

- (1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6), 1984, pp124.
- (2) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傳, 畠 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (3) 中野益男：「残存脂肪酸による古代復原」, 『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか—予稿集』, 「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会, 1989, pp55.
- (4) 中野益男, 福島道広, 中野寛子：「玉津田中遺跡第4号木棺から出土した青銅器に残存する脂質について」, 『玉津田中遺跡』, 兵庫県教育委員会, 印刷中.
- (5) M. Nakano: 「Lipids Analysis and Archaeology」, 「International Congress Development and Isolation in the Pacific」, Indo-Pacific Prehistory Association, The Japanese Society for Oceanic Studies, 1987, pp34.
- (6) 中野益男, 中岡利泰：「配石遺構の土壤および甕棺土器に残存する脂質の分析」, 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』, 鹿児島市教育委員会, 1986, pp113.

- (7) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「寺東遺跡遺構の埋設土器に残存する脂肪の分析」, 『寺東遺跡, 西保木(対岸)遺跡発掘調査報告書』, 高山市教育委員会, 1988, pp186.
- (8) M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei D SM 20021」, 『Hoppe-Seylers Z. Physiol. Chem. J.』, 358巻, 1977, pp1439.
- (9) 中野益男, 有賀裕子, 根岸 孝, 安本教傳, 佐原 真, 田中 琢: 「脂質分析と考古学 - その活用と問題点について」, 『脂質生化学研究』, 第27巻, 1985, pp41.
- (10) 中野益男, 伊賀 啓, 和氣清彦, 根岸 孝, 安本教傳, 西本豊弘, 佐原 真, 田中 琢: 「古代遺跡から出土した獸骨, 骨角器に残存する脂質について」, 『脂質生化学研究』, 第25巻, 1983, pp236.
- (11) 中野益男: 「能取町成合寺遺跡の土壤群に残存する脂肪の分析」, 『成合寺』, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター, 1985, pp78.
- (12) 中野益男, 福島道広, 中野寛子: 「陣箱遺跡の2号竪穴南壁中央の不定形土壤に残存する脂肪の分析」, 『陣箱遺跡』, 大分県大野郡三重町教育委員会, 1987, pp14.
- (13) 中野益男: 「動物考古学の基礎的研究 - 動物遺存体に残存する脂肪 - 」, 『国立歴史民族博物館研究報告』, 『未発表』.
- (14) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」, 『郷楽遺跡』, 宮城県教育委員会, 『未発表』.
- (15) 内貴正治, 佐内 豊, 岩森正男, 滝 孝雄, 鈴木明身, 楠 進: 「免疫科学的手法」, 『統生化学実験講座, 複合糖質研究法』, 第4巻, 東京化学同人, 1986, pp95.
- (16) Takao Taki, Kenichi Matsuo, Kaname Yamamoto, Toshiko Matsubara, Akira Hayashi, Tadayuki Abe and Makoto Matsumoto: 「Human placenta Gangliosides」, 『Lipids』, 23巻, 1988, pp192.
- (17) 『大記』1072~1104, 『玉藻』1209~1229, 『御産所日記』1434等.

資料No	試料部位	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
No 1	上側(5.5 ~ 8.0 cm) 土	842.03	31.4	0.0037
No 2	中側(8.0 ~ 11.0 cm) 土	825.33	49.7	0.0062
No 3	下側(11.0 ~ 地面) 土	126.81	25.9	0.0204
No 4	底 部 土	47.96	23.6	0.0492
No 5	胎衣叢底部剥離標本 5枚	—	9.5	—

表1 胎衣叢および胎衣叢内土壤の残存脂質抽出量

試料No	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレス テロール/シトス テロール
No 1	—	—	—
No 2	35.74	4.86	7.354
No 3	59.57	8.95	6.656
No 4	80.87	4.24	19.073
No 5	78.68	4.62	17.080

表2 胎衣叢および胎衣叢内土壤に分布するコレステロールとシトステロールの割合

GalNAc 1 $\beta \rightarrow$ 3 Gal 1 $\alpha \rightarrow$ 4 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	ヒト, ブタ
GalNAc 1 $\beta \rightarrow$ 4 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	モルモット
GalNAc 1 $\alpha \rightarrow$ 3 GalNAc 1 $\beta \rightarrow$ 3 Gal 1 $\alpha \rightarrow$ 4 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	ヤギ, ヒツジ
Gal 1 $\alpha \rightarrow$ 3 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 3 GlcNAc 1 $\beta \rightarrow$ 3 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	ウサギ
NeuNGc 2 $\alpha \rightarrow$ 3 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	ウマ
NeuNAc 2 $\alpha \rightarrow$ 3 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	イヌ
NeuNGc 2 $\alpha \rightarrow$ 8 NeuNGc 2 $\alpha \rightarrow$ 3 Gal 1 $\beta \rightarrow$ 4 Glc $\beta \rightarrow$ Cer	ネコ

Gal : ガラクトース、Glc : グルコース、GalNAc : N-アセチルガラクトサミン

GlcNAc : N-アセチルグルコサミン、NeuNAc : N-アセチルノイロミン酸

NeuNGc : N-グリコリルノイロミン酸、Cer : セラミド(スフィンゴ脂質)

表3 哺乳動物赤血球の主要糖脂質の化学構造

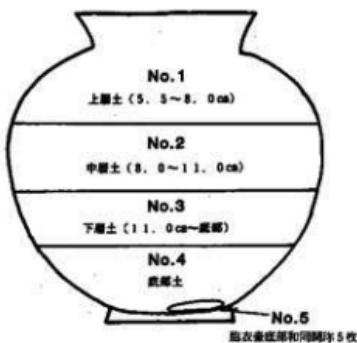


図1 胞衣壺および胞衣壺内土壤試料の採取地点

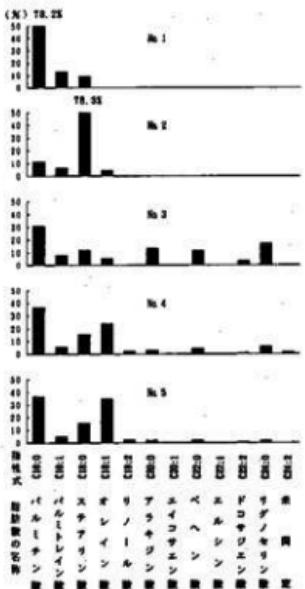


図2 胞衣壺および胞衣壺内土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

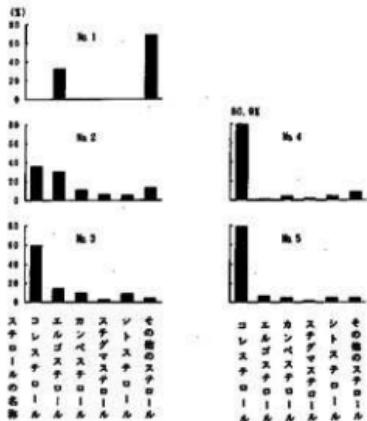


図3 胞衣壺および胞衣壺内土壤に残存する脂肪のステロール組成

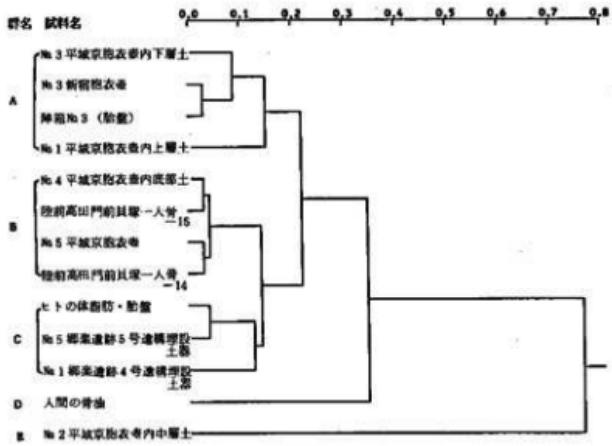


図4 胞衣塗、遺跡遺物および現生資料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

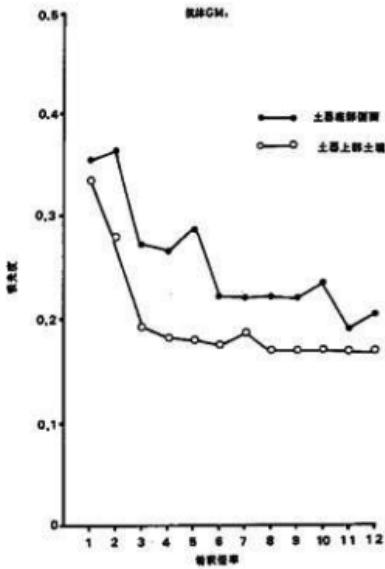


図5 胞衣塗に残存する糖脂質の酵素抗体反応

2. 平城京東四坊大路の調査 第149次

本調査は、奈良市大安寺町755-1において実施した、中島信男氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京の条坊復元では、左京六条四坊十五坪の東半部にあたり、東四坊大路西側溝が想定されているところである。昭和62年度には、本調査地の北300mの所で同西側溝が検出されている。このため、今回の調査においても、当初から条坊遺構の検出が予想された。調査は、南北10m、東西10m（面積100m²）の発掘区を設定し、昭和63年4月19日から5月9日までおこなった。

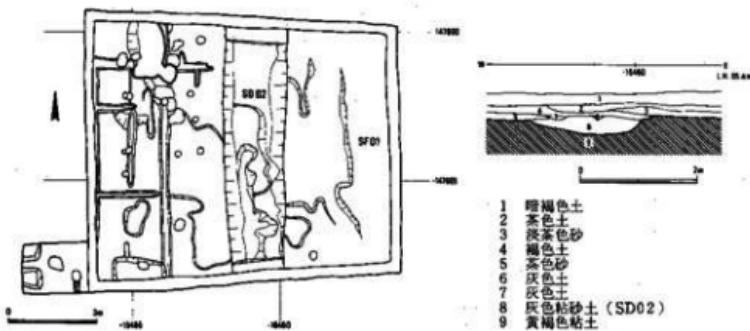
発掘区内の基本的な土層は、耕土・床土（25~40cm）の下、灰色粗砂（5cm）、奈良時代の土器を包含する淡茶灰色砂質土（20cm）が続き、表面から50~65cmで黄褐色粘土の地山に至る。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した遺構には、東四坊大路西側溝（SD02）、柱穴、土壤がある。発掘区北東部では自然流路を確認した。遺構面の標高は、概ね64.5mである。

SF01 発掘区東端で検出した南北道路で、東四坊大路に相当する。SD02溝心から東へ4.8m分を確認した。

SD02 発掘区中央部で検出した南北方向の素掘り溝で、東四坊大路西側溝に相当する。東西幅2m、深さは20~30cmと浅い。おそらく、上部は削平され溝底だけが残存したものと思われる。溝内埋土は灰色粘土で、奈良時代後半の土師器、須恵器片、瓦片が遺物収納箱で1箱分出土した。溝心の国土座標値は、X = -147,695.000、Y = -16,460.820mである。

柱穴は、発掘区が狭小だったため、建物としてまとまるものはない。 (三好美穂)



第149次調査検出遺構 (1/200) 発掘区北壁堆積土層 (1/100)

3. 平城京朱雀大路の調査 第150次

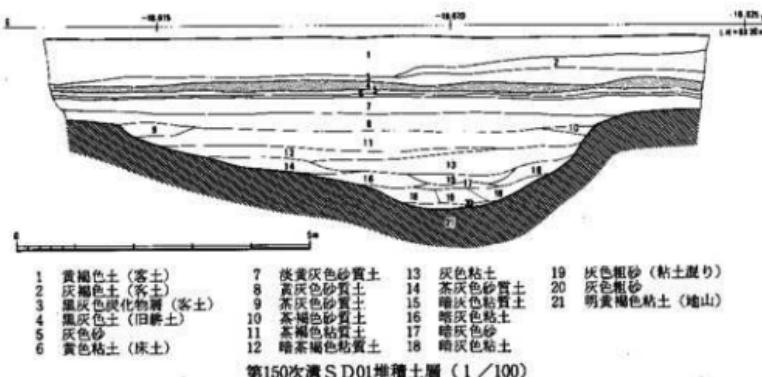
本調査は、奈良市四条大路三丁目98-1において行った共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の坊復元では、右京四条一坊一坪の東側に位置し、朱雀大路の西側溝の存在が推定された。発掘区は、東西11m、南北4mの規模で設定し、昭和63年4月18日から4月30日にかけて調査を実施した。

調査地は、全体に厚さ約1mの造成土があり、その下の層序は、旧耕土、灰色砂、黄色粘土、淡黄灰色砂質土、黃灰色砂質土で、現地表から約1mで明黄褐色粘土層の地山となる。遺構は、この明黄褐色粘土層上面で検出した。遺構検出面の標高は、概ね61.8mである。検出した遺構は、朱雀大路の西側溝と考えられる南北溝1条である。

SD01 発掘区中央で検出した素掘りの南北溝。幅9.3m、深さ1.3mで南北の長さ4m分を検出した。これまでの調査成果との位置関係やその規模から朱雀大路西側溝と考えられる。溝の埋土は大きく上下二層に分けられ、上層は茶褐色と灰色の粘土の堆積で、下層は灰色の粘土と砂が互層となって堆積する。いずれも奈良時代の土器類が出土したが、その量は少ない。また、最下層の灰色粗砂層からは、土器類とともに瓦類、木製品が出土したが、これらもまた小片である。

なお、検出した溝SD01の溝心の座標値は、次のとおりである。

第150次調査 SD01溝心 X = -146,608.00 Y = -18,618.58 (篠原豊一)



4. 平城京左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査 第151次

I はじめに

この調査は岡本年郎氏届出の共同住宅建設に伴なう発掘調査である。調査地は奈良市法華寺町288-1、平城京の条坊復元では左京二条二坊十一坪と十四坪の坪境小路に相当すると思われた。また、隣接地の調査では旧石器時代の石器が多量に出土しており、本調査区での状況が注目された。調査は建物予定位置に東西15m、南北20mの発掘区を設定し、昭和63年5月9日から6月21日まで実施した。

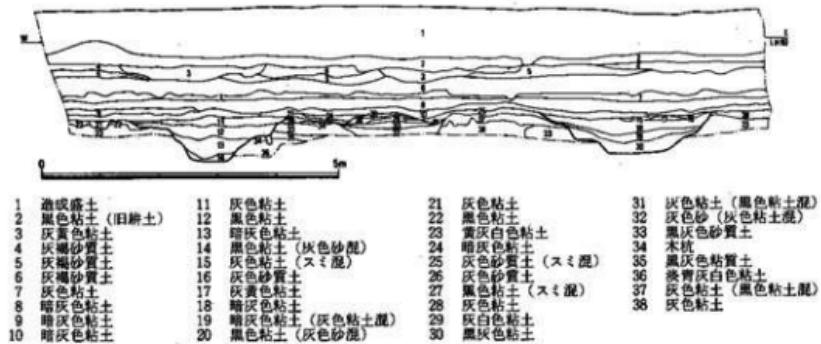
II 検出遺構

層序 調査地はすでに造成されており約80~90cmの盛土がある。以下、黒色粘土(旧水田耕土)、灰褐色砂質土、灰色が強い灰褐色砂質土、灰色粘土、暗灰色粘土、遺物・炭化物を多く含む暗灰色粘土と続き、現地表面下1.8~1.9mで奈良時代の遺構面である黒色粘土・灰色粘土あるいは黄灰白色粘土層に達する。黒色粘土・灰色粘土は古墳時代以降、奈良時代以前の自然流路内の堆積土かと思われる。黄灰白色粘土層に下は砂まじりの黄褐色粘土、青黄褐色粘土、砂まじりの青黄褐色粘土層と続く。このうち砂まじりの黄褐色粘土層が旧石器時代の遺物包含層に相当すると思われた。

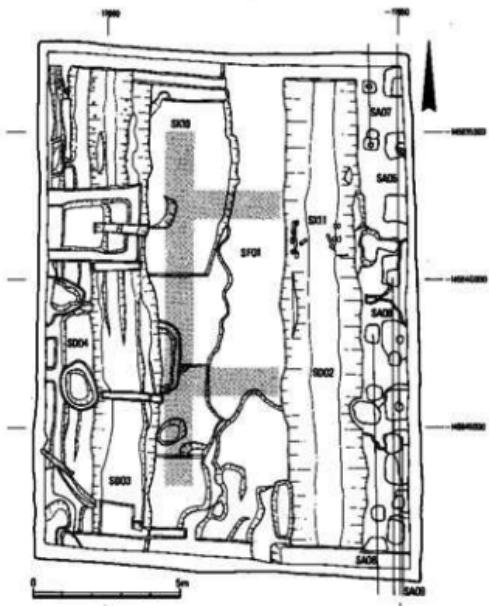
検出した遺構は奈良時代の道路1条、溝3条、掘立柱列4条、土壌である。

SF01 発掘区中央で検出した南北道路。十一坪と十四坪との坪境小路である。道路の東、西に側溝が掘られている。側溝中心間の距離は7.17mほど、路面幅は4.65m内外である。路面の状態は一様ではなく、部分的に灰色系の粘土で整地されている。

(註) 奈良国立文化財研究所『昭和62年度平城宮跡発掘調査概報』 1988



第151次調査発掘区北壁堆積土層 (1/100)



第151次調査検出遺構 (1/200)

SD02 幅2.5~2.9m、深さ70cmの南北方向の素掘り溝。道路SF01の東側溝である。溝内の堆積土は大きく3層に分かれ、最下層黒色粘土層からは他の木質遺物とともに木簡が出土した。後述する木橋SX11が架けられていた。

SD03 幅2.1~2.75m、深さ60~70cmの南北方向の素掘り溝。発掘区の北端近くでは東、西両岸とも南北方向の杭列が残っている。しがらみを設けて護岸していたものと思われるが、しがらみは残存していない。杭は径3~4cmの丸木で、西岸は30~40cm間隔で、東岸は15~40cm間隔で打ち込まれており、東西の杭列の間隔は1.1mほどである。溝内の堆積土は4層に分かれ、最下層黒色粘土層からは木簡が出土した。

SD04 SD03の西側の西1.0mほどで検出した南北方向の素掘り溝。幅25~50cm、深さ15cm。南端が東へ曲りSD03に接続している。溝の屈曲部分にかぶさるように幅20cm、長さ135cmの板材があったことから、SD03への取り付き部は暗渠になっていたと思われる。SD03との間を犬走、SD04を南北築地の東雨落ち溝と考えておく。

SA05 発掘区東端で検出した掘立柱南北塀。SD02東肩の東1.45mにある。7間15m分を検出し、南北はさらに発掘区外へのびる。柱掘形は一辺0.8~1.05m、柱間寸法は2.1m(7尺)等間であるが、北から4間目のみ2.4m(8尺)とわずかに広い。十四坪の西

辺を画する塀であろう。

S A06 発掘区東端で検出した掘立柱南北塀。3間8.85m分を検出し、南はさらに発掘区外へ続くと思われる。柱間寸法は2.95m(10尺)等間である。重複関係からS A05より新しく、S A09より古いことがわかる。

S A07・08 発掘区東端で検出した掘立柱南北塀。中央で一旦途切れており、北半は1間1.95m以上、南半は3間7.3m以上ある。柱間寸法は1.95m(6.5尺)等間かと思われ、途切れ部は6.5m(22尺)ある。後述の木橋S X11に面した部分で塀が途切れていることから、途切れ部は小路に向って開く出入口かと思われる。門の遺構はなかった。

S A09 発掘区東南隅で検出した掘立柱柱列。1間2.7m分を検出し、さらに南へ続くと思われる。位置からみて塀かと思われるが、建物となる可能性もある。

S X10 道路S F01の路面上にある溝状の遺構。発掘区の北端では幅1.8m、深さ30cmの浅い溝状で底には植物遺体が一面に残存していたが、他の部分は西肩が溝S D03に破壊されており、南端では幅1.3m以上、深さ10cmほどの浅い窪み状の遺構になる。埋土は灰色系の軟弱な砂質土である。

S X11 溝S D02に架けられた小規模な木橋。径11cmほどの丸太材を岸に打ち込み橋脚とし、架橋していたものと思われ、西岸の橋脚2本と、若干の部材が残存していた。橋脚は南北に1.2mの間隔で打ち込まれている。部材の遺存状態が悪く、詳細な構造は不明。

奈良時代遺構の検出後、発掘区内の一部(遺構平面図中アミ点部分)で下層遺構を追求したところ溝S D12を検出した。溝は幅85cm、深さ35cm、断面逆台形で、底がさらに幅0.18m、深さ0.15mほど垂直に掘り込まれている。埋土から出土した土器

は細片で時期は決定し難いが、遺構の重複関係と、溝が斜行していることか

らS D12は奈良時代以前のものである

可能性が高い。なお、発掘区内からは

旧石器時代の遺物は出土しなかった。

以上の結果、次の点が明らかになった。(1)十一坪と十四坪境の小路の位置が確定した。

(2)小路の幅員は側溝心々で7.17m(20大尺)である。(3)十四坪西辺は掘立柱塀で閉塞され

ており、十四坪東辺は築地で閉塞されている可能性が高い。(4)十四坪から木橋を介して西側の小路へ出ていた時期がある。(5)この地点では旧石器時代の遺物は出土しない。

以下に各点の国土座標値を記しておく。S F01心 X=-145,833.50 Y=-17,656.315

S D02心 X=-145,833.50 Y=-17,652.73

S D03心 X=-145,833.50 Y=-17,659.90

III 出土遺物

木簡 SD02から22点、SD03から9点出土した。以下、主要な木簡の訳文を掲げる。

1	般十斤「般十斤」	95×(19)×4	033	2	□□□	壹六十八口	(80)×13×4	081
3	・日置□	(71)×12×6	019	4	・天平三年		(97)×(18)×3	081
3	・□			4	・□□			
	〔東方〕							
5	・近江国□□郡必佐郷□□□			6	大録		(66)×(24)×2	065
	〔東方〕							
	・大伴部大山一□	(135)×22×5	051					
	〔東方〕							

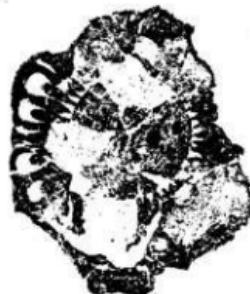
1～5はSD02出土。6は一側辺が割れて半円型となった薄板に墨書、SD03出土。

瓦類 遺物包含層と溝SD02・03から瓦が出土した。

ここでは軒丸瓦と軒平瓦について記しておく。

軒丸瓦 10型式19種37点ある。うち6点は型式が認定できない。出土型式は平城宮6130A、6225A、6272B、6282D b・E・F・Fa・G・I・種別不明、6285A、6301新、6304種別不明、6308A又はB・I、6311A・B・F、6313C型式である。このうち6301新型式は複弁八弁になると思われる蓮華文瓦。中房の蓮子は三重、外区は不明。從来、類例が知られていない大型品である。

軒平瓦 6型式9種16点ある。うち1点は型式が認定できない。出土型式は、重弧文、6644A、6663B・C、6667A、6721C・G・Ga・Gb、6760Aである。平城宮6760A型式のものは縦輪瓦である。（西崎卓哉）

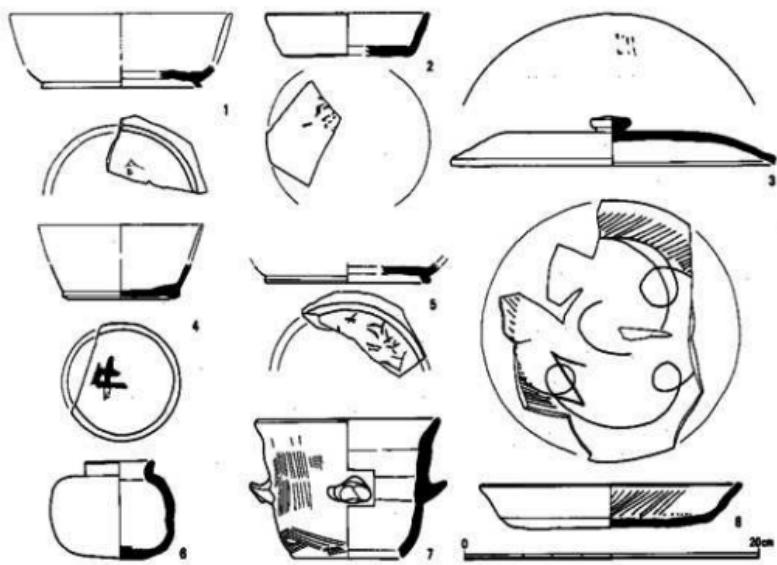


第151次調査出土軒丸瓦（1／4）

土器類 古墳時代の須恵器、円筒埴輪、奈良時代の土師器、須恵器、線刻・墨書き土器、ミニチュア土器、土馬、土鈴がある。遺物整理箱で24箱分あり、ほとんどがSD02・03から出土した。以下、線刻・墨書き土器、ミニチュア土器について記しておく。

線刻・墨書き土器（1～5・8） 1・4・5は須恵器杯Bの底部外面に墨書きがある。1は「合」、4は「牛」、5は「人六十人口十」と読める。調整は1・5は底部内外面ともロクロナデ調整、4は内面がロクロナデ、底部外面はヘラ切りのままである。2は須恵器杯Aの底部外面に、3は須恵器皿B蓋の頂部外面に墨痕があるが判読できない。8は土師器杯Aの底部内面に「丁」と線刻されている。調整は口縁部は内外面とも横なで、底部外面は未調整である。内面にラセン状暗文と一段斜放射状暗文が施されている。他に同様の線刻がある土師器杯Aが3点ある。1は遺物包含層から、他はSD03から出土した。

ミニチュア土器（6・7） 6は土師器の小壺。口縁部内外面を横なでし、他は未調整である。7は土師器の瓶。胴部に把手が一对ある。口縁部内外面を横なで、胴部上半は縦



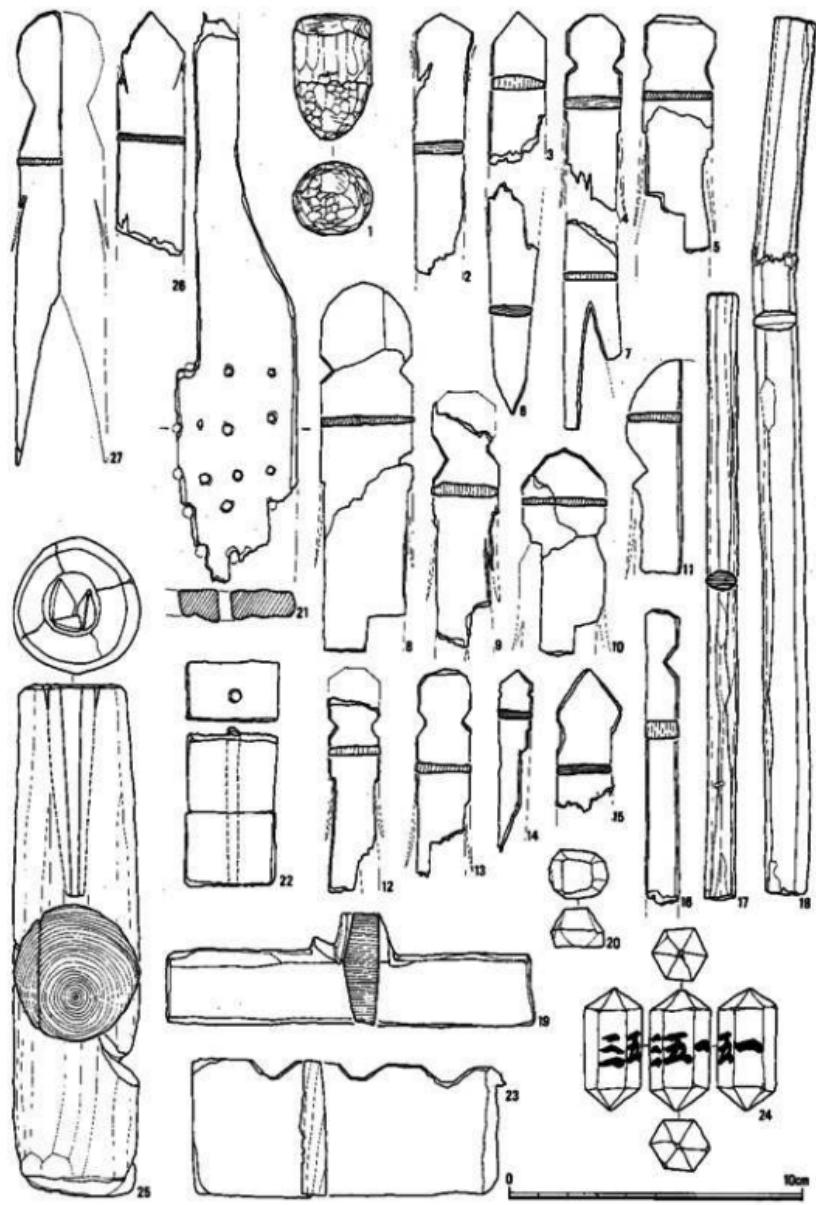
第151次調査出土土器 (1/4)

方向の、下半は横方向のハケ目調整。6はSD02、7はSD03から出土した。(三好美鶴)

木製品 SD02・03から柄、留針、櫛、漆椀、独楽、簾串、人形、不明品が出土した。

SD02出土木製品 (1~24) 1は独楽。先端がわずかにつぶれているので、本来突出していた先端部が欠落したのかもしれない。2・3は簾串。4~13は人形。人形に墨痕はない。14~16はどちらとも判別がつかないもの。17・18は棒状木製品。材の西端を断ち切り、断面レンズ状に割りととのえる。19は厚手の板材の一側辺を山形に作り出し、さらに山形の一部を切り欠く。馬形の一種かとも思われるが断定はできない。20は材の一端を平坦に、他端をおおむね台形状に削った小型の整品。用途は不明。21は杓子のように一端を細く削った板材の身に相当する部分に、1列3~4個で5列以上の中孔をあける。一部を欠損する。22は2個の材の中心に小孔をあけ、細棒を通し連結したもの。整形はあらく、木口は鋸で挽き放し、側面の一部には割り面が残る。23は板材の一側辺3か所を切り欠いたもの。一端を欠損する。24は六角柱の両端を六角錐に割り、角柱部の隣接する三面に「一」、「五」、「三」と墨書きする。他の面に墨痕は観察できない。他に類例がなく用途は決定しえないが、妻子あるいは算木として用いられたかとも思われる。

SD03出土木製品 (25~27) 25は鑿柄。心持丸木の表皮を丁寧に削り取り、一端に茎孔をあけ、柄頭には敲打の痕跡が残る。茎孔は円形で、断面方形の茎の三側辺にくさびをあて固定しており、くさびが茎孔に残っている。26は簾串、27は人形である。(西崎卓哉)



第151次調査出土木製品 (1 / 2)

5. 平城京左京七条四坊十五坪の調査 第152次

I はじめに

本調査は、奈良市東九条町1422他において実施した大西敏男氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元によると、左京七条四坊十五坪の西半部にあたり、十五坪の西端を限る南北小路を介してすぐ西には大安寺旧境内南苑が想定されているところである。東西に細長い狭い造成地での調査であったために、十分な発掘面積を確保することができなかつたが、十五坪内の宅地の利用状況を把握することに主眼を置き、東西20m、南北4.5m（面積90m²）の発掘区を設定して行った。調査期間は、昭和63年5月13日から同年5月23日までである。

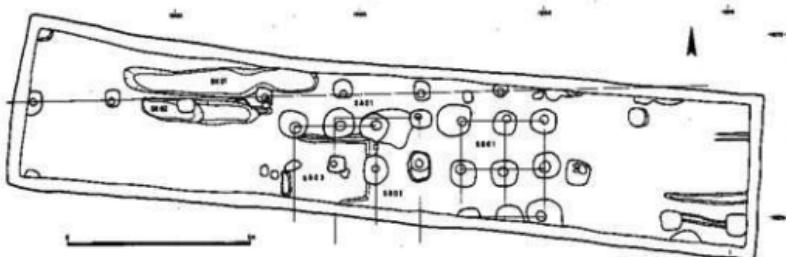
II 検出遺構

発掘区内の土層堆積状態は、耕土の下、淡灰色砂土、淡黄灰色砂土、淡黄灰色粘質土、茶灰色粘質土、暗茶灰色粘質土、淡灰色粗砂、暗灰色粘質土、暗灰色砂質土が約1.3mの厚さで堆積し、さらに奈良時代の遺物を包含する茶褐色砂土、暗茶褐色粘質土が続く。耕土から下へ約1.6mで黄褐色粘土の地山へ至る。遺構は地山直上で検出した。地山上面の標高は東端が61.9m、西端が62.8m前後である。

検出遺構には、掘立柱列1条、掘立柱建物3棟、素掘り溝、土壙がある。

SA01 発掘区北辺部で検出した東西方向の溝。7間分（14.0m）を検出した。柱間は、2.0m等間である。柱掘形は一辺30cm前後と小さい。出土遺物はない。主軸は、国土方眼方位東に対しやや北偏する。

SB01 発掘区中央部で検出した梁間2間（2.1m）、桁行2間（2.6m）以上の総柱建物。柱間は、梁間が東から1.0～1.1m、桁行が1.3m等間と短い。柱掘形は一辺0.8～1mを測



第152次調査検出遺構 (1/160)

る。1柱穴の柱掘形からは9世紀初頭の土師器皿片が出土した。主軸は国土方眼方位と一致する。

SB02 SB01の西側で検出した梁間2間(2.2m)、桁行1間(1.3m)以上の南北棟建物。柱間は梁間が1.1m等間である。柱掘形は一辺50cm前後を測る。出土遺物はない。主軸は国土方眼方位と一致する。

SB03 SB02と重複して検出した梁間2間(2.0m)、桁行1間(1.2m)以上の南北棟建物。柱間は梁間が1.0m等間である。重複関係からSB02よりは新しいことがわかる。出土遺物はない。主軸は国土方眼方位と一致する。

SK01 SB03の北側で検出した土壤。東西5.2m、南北80cmの平面長方形を呈する。検出面からの深さ20cm前後を測る。壇内埋土は茶褐色土で、土師器片、須恵器片を少量包含していた。

SK02 SA01と重複して検出した土壤。東西2.6m、南北60cmの平面長方形を呈する。検出面からの深さ10cmを測る。重複関係からSA01よりは新しいことがわかる。出土遺物がないため時期は不明である。

素掘り溝は3条検出したが、出土遺物がないために詳細な時期は不明である。しかし、いずれも奈良時代の遺物を包含する層の上から掘りこまれているため時期的には新しいものと考えられる。

(三好美穂)

6. 平城京左京二条五坊十五坪の調査 第153次

本調査は、奈良市法蓮町986他において実施した加藤和美氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、佐保川北岸の沖積地で、平城京条坊復元によると左京二条五坊十五坪の南西隅に相当する。調査は、坪内の様相を把握することを目的として東西4.3m、南北9.0m(面積38.7m²)の発掘区を設定しておこなった。調査期間は、昭和63年5月30日から同年6月4日までである。

発掘区内の土層は、約1.5mの造成土の下、旧耕土(約20cm)、黄灰色粗砂(約30cm)、灰色土(約20cm)、灰色粘土(約70cm)、灰色粗砂と続く。地表面から約2.9m下の灰色粗砂層まで掘り下げたものの、発掘区が狭小で危険性が伴い、湧水が著しく掘り下げを断念せざるを得なかった。

耕土より下の層は、おそらく調査地の南側を流れる佐保川の氾濫による堆積層と考えられ、奈良時代の構造面は、佐保川氾濫により削平されたものと考えられる。

遺物は、黄灰色粗砂から瓦器片が、灰色粗砂から土師器片、須恵器片、瓦片が若干量出土した。

(三好美穂)

7. 平城京左京五条四坊十四坪の調査 第154次

本調査は、日宝土地建物株式会社届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は奈良市大安寺町782—3・4で、平城京条坊復元によると左京五条四坊十四坪の北東隅にあたる。調査期間は昭和63年6月6日から6月24日である。

発掘区の土層堆積は、厚さ76cmの造成土の下に旧耕土(20cm)、灰褐色土(14cm)、褐灰色土(10cm)と続き、黄色粘土の地山となる。地山は北へ向かってゆるく下降しており、地山の標高は南側で63.4m、北側で63.2mである。遺構は地山上面で検出した。主な検出遺構について以下に述べる。

S B01 衍行1間(2.1m)以上、梁間2間(3.6m)の掘立柱東西棟建物である。柱穴の深さは検出面から平均約55cm。

S B02 衍行3間(5.4m)以上の掘立柱南北棟建物になるのではないかと思われる。衍行3間分の柱間は1.8m等間。柱穴の深さは検出面から平均55cm。

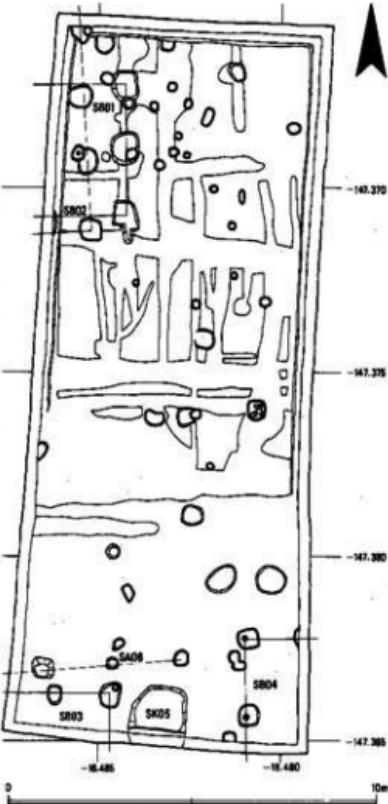
S B03 東西1間(1.8m)以上の掘立柱建物の北東隅部分にあたるかと思われる。

S B04 南北一間(2.1m)以上、東西1間(1.5m)以上の掘立柱建物の北西隅部分にあたる。柱穴の深さは検出面から平均約22cm。

S K05 南北1.6m以上、東西1.56mの土壤である。深さは14cm。埋土は2層で、下に黄褐色土、上に茶灰褐色土が堆積していた。下層にはほとんど土器が含まれていないが、上層からは多量の土器とともに炭、焼土が出土した。土器は奈良時代後半のものである。

S A06 東西2間(3.8m)以上の掘立柱列である。検出した2間分の柱間は1.9m等間である。

(鍵方正樹)



第154次調査検出遺構 (1 / 160)

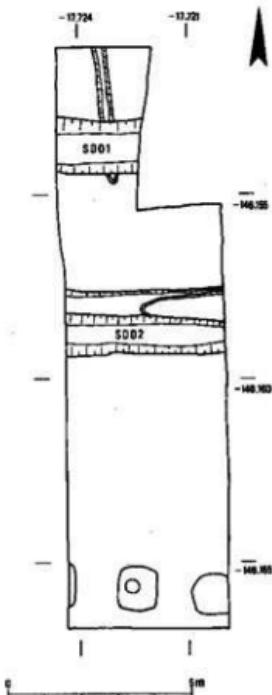
8. 平城京左京三条二坊十坪の調査 第155次

本調査は、奈良市二条大路南1丁目103-1において行った共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、左京三条二坊十坪の北寄りで、九坪との坪境となる三条条間北小路が推定された。発掘区は、南北12m、東西5mに初め設定し、後に幅2.5m、北へ5m拡張した。発掘面積は、72.5m²で、調査期間は、昭和63年6月20日から7月4日までである。

発掘区の層序は、約1.4mの造成土を除去すると、耕土、淡青灰色粘質土、淡茶褐色粘質土、黄茶色粘質土、赤灰色粘質土の順で、発掘区南寄りでは、淡茶褐色粘質土の下層に青灰色砂の堆積がみられる。遺構は、黄茶色粘質土上面で検出した。

検出した遺構は、奈良時代の東西溝2条と掘立柱柱穴3か所である。柱穴は、黄茶色粘質土の上層の淡茶褐色粘質土上面から掘り込まれていることが、確認できた。柱間は、約2.4mで東西に並び、柱穴の掘形の一辺が、1m程度あることから建物の一部と考えられるが、発掘区の制約から全体の規模は、確かめられなかった。溝SD01は、発掘区北端で検出したもので、幅1.6m、深さ35cmの東西溝で、溝SD02はSD01の南約5mで検出した幅1.7m、深さ30cmの東西溝である。昭和62年度に奈良国立文化財研究所が行った左京三条二坊一・二・七・八坪の調査では、三条条間北小路とその南北両側溝が検出されており、その位置関係からSD01は、九坪、十坪の坪境となる三条条間北小路の南側溝とみることができる。また、SD01、SD02とも淡茶褐色粘質土で埋め立てられた後、柱穴が掘られていることは、昭和55年度に行った三条二坊九坪の調査における九坪内部の整地状態と共通する点もあり、九坪、十坪が奈良時代のある時期2町以上の宅地として利用された可能性を考えることもできよう。

(森下恵介)



第155次調査検出遺構 (1 / 160)

9. 平城京左京二条二坊五坪の調査 第156次

I はじめに

この調査は三律不動産株式会社代表取締役中谷順亮氏届出のビル建築に伴う事前発掘調査である。届出地は奈良市法華寺町482-3、481、平城京の条坊では標記の五坪の南辺中央、「奈良県遺跡地図」では東院南方遺跡とされる地域の一部にあたる。約625m²の敷地の南寄り、建物予定位置に東西7.5m、南北20mの発掘区を設け調査を開始、後に一部を南へ3m拡張した。調査面積は158m²、調査期間は昭和63年7月1日から7月23日まである。

発掘区内の層序は20cmほどの水田耕土の下、灰色砂質土、茶灰色砂質土、黄褐色土と続き水田面下40cmほどで遺構面である暗茶褐色砂質土層に達する。暗茶褐色砂質土層は鉄分が多く、疊と奈良時代の遺物を含んでいる。

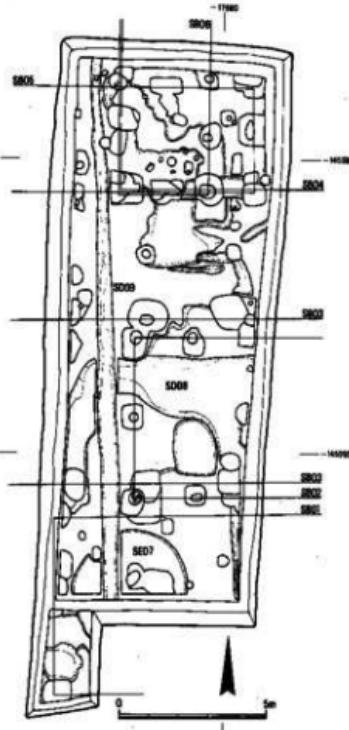
この下には地山である茶灰色砂、黄褐色粘土が堆積している。発掘区南端では、暗茶褐色砂質土の下に黄灰色砂、紫黑色粘土、茶灰色砂、灰白色粘土が厚さ10cmほどづつ層をして堆積している。これらの土層はいずれも遺物を含んでいない。

II 検出遺構

検出した遺構は奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸1基、溝2条、土壤である。以下、遺構ごとに概要を記す。

S B01 発掘区南端で検出した掘立柱建物。桁行2間(6.55m)以上、梁間2間(6.55m)の東西棟建物と考えたが、建物の全部の柱穴を検出していないことと、位置的な問題から建物構造に問題が残る。

S B02 発掘区中央で検出した桁行2間(3.9m)以上、梁間2間(5.4m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が1.95m等間、梁間は2.7m等間。重複関係からS B01・03より新しいことがわかる。



第156次調査検出遺構 (1/200)

SB03 発掘区中央で検出した桁行2間(5.45m)以上、梁間1間以上(5.45m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行、梁間ともに2.7m等間である。

SB04 発掘区北端で検出した東西2間(6.0m)以上、南北2間(5.45m)以上の掘立柱建物。柱間寸法は東西が3m等間、南北が2.7m等間となる。

SB05 発掘区北端で検出した桁行2間(6.0m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が3m等間、梁間は1.8m等間と梁間が狭い。

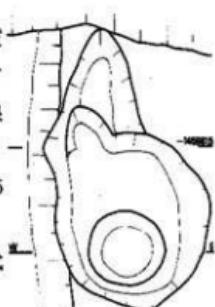
SB06 発掘区北端で検出した桁行2間(3.9m)以上、梁間2間(3.0m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が1.95m等間、梁間は1.5m等間と小規模である。重複関係からSB05より新しいことがわかる。

SE07 発掘区南端で検出した井戸。掘形は径4.0mの円形である。底の状態を確認すべく検出面から約2.0m掘り下げたところ、掘形や発掘区の壁が崩壊し危険な状況になったので、それ以上の掘り下げを断念したが、井戸枠は抜き取られているものと思われた。奈良時代中頃の土器が出土した。

SD08 発掘区中央で検出した流路。蛇行し、東西にのびる。幅1.2~2.2m、深さ約50cm。溝内には上から順に暗茶灰色砂質土、暗灰色砂、灰白色砂、黄色粘土まじりの黒色粘土が堆積している。重複している他のいずれの遺構よりも古い。埋土から奈良時代の土器が出土した。

SD09 発掘区西壁よりを南北にのびる素掘り溝。幅55~65cm、深さ10cm。南北とともに発掘区外へのびるため全長は不明。溝内には暗茶色砂、灰白色砂が堆積していた。埋土には奈良時代の土器片が含まれる。

SX10 東西26cm、南北50cm、深さ6.5cmの不整形な穴に土師器杯Aを正位置に納めている。蓋はなく、とくに内容物も検出していない。土器は奈良時代のものと思われるが、詳細は不明。



III まとめ

以上、各遺構の概要を記した。発掘範囲が狭いので遺構の全体を検出することができないことと、削平のためにか遺物が少なく遺構の時期的な検討が十分できることから、成果が断片的なものになった。そのため、今回の成果のみをもって遺跡の全体像にまで言及するのは無謀であろうが、それでも遺跡の位置や周辺の調査例からみれば、今回検出の遺構が計画的に配置された広範な遺構群の一部に該当していることは十分に予測できる。

なお、調査地南辺の遺存地割は、五坪南辺の築地のラインを示しているのではないかと思われる。

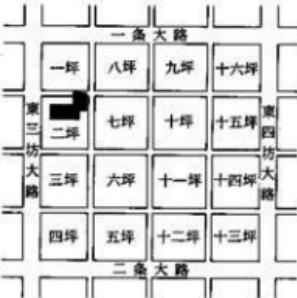
(西崎卓哉)

10. 平城京左京二条四坊二坪の調査 第157次

I はじめに

本調査は、奈良市法蓮町386-1、387、388、389-1、394において、建設省近畿地方建設局届出の仮称奈良第3合同庁舎建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京二条四坊二坪にあたり、西は東三坊大路に、東は二・七坪坪境小路に、北は一・二坪坪境小路に接する坪内北半の4,321m²を占める。

調査期間は昭和63年7月11日から10月29日まで、発掘面積は建築面積2,300m²に対し2,630m²である。



発掘区の位置

II 検出遺構

発掘区内の基本的な堆積土層は、耕作土（黒色腐蝕土）・床土（黄灰色土）の下、灰褐色土、茶灰色土と続き、地表下0.6~1.0mで黄灰色粘土の地山に達する。遺構検出面は地山上面で、これの標高は発掘区東端付近で47.4m前後、西端付近で46.9m前後と、東から西に向かってわずかずつ低くなっている。主要な検出遺構は、道路、溝、堀、建物、井戸、土壤などで、大半は奈良時代から平安時代初期までに構築されたものだが、平安時代後期から鎌倉時代初期にまで下るものもある。

1. 奈良時代～平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、一・二坪坪境小路、掘立柱塀6条、掘立柱建物19棟、井戸9基があり、重複関係や配置および出土遺物などから大きくA～Eの5時期に区分できる。

A 期（奈良時代前半） 一・二坪坪境小路がなく、両方の坪が一体で使用される。二坪内の北東部には長大なし字形の塀S A04・05で囲まれた区画があり、一・二坪の境には建物S B10が建つ。塀の内部には井戸S E31があるが、ほかには顯著な遺構がなく、区画内の中心建物は発掘区外北東部にあるとみられる。すなわち、東西塀S A04はさらに東隣の七坪に、南北塀S A05は、建物S B10のところで途切れるものの、さらに北隣の一坪に続くものと推察でき、一・二・七・八坪の四町域を占める広大な宅地が想定し得る。また、二坪内部には東西塀S A06があり、これの南側に廄付の大きな建物S B12・13が逆L字形に配され、北側には井戸S E30がある。

S A04は東西9間（23m）まで、S A05は南北10間分（27m）を確認したが、柱間寸法は東西と南北とでは異なり、前者2.55m等間、後者2.7m等間である。S A06は東西10間

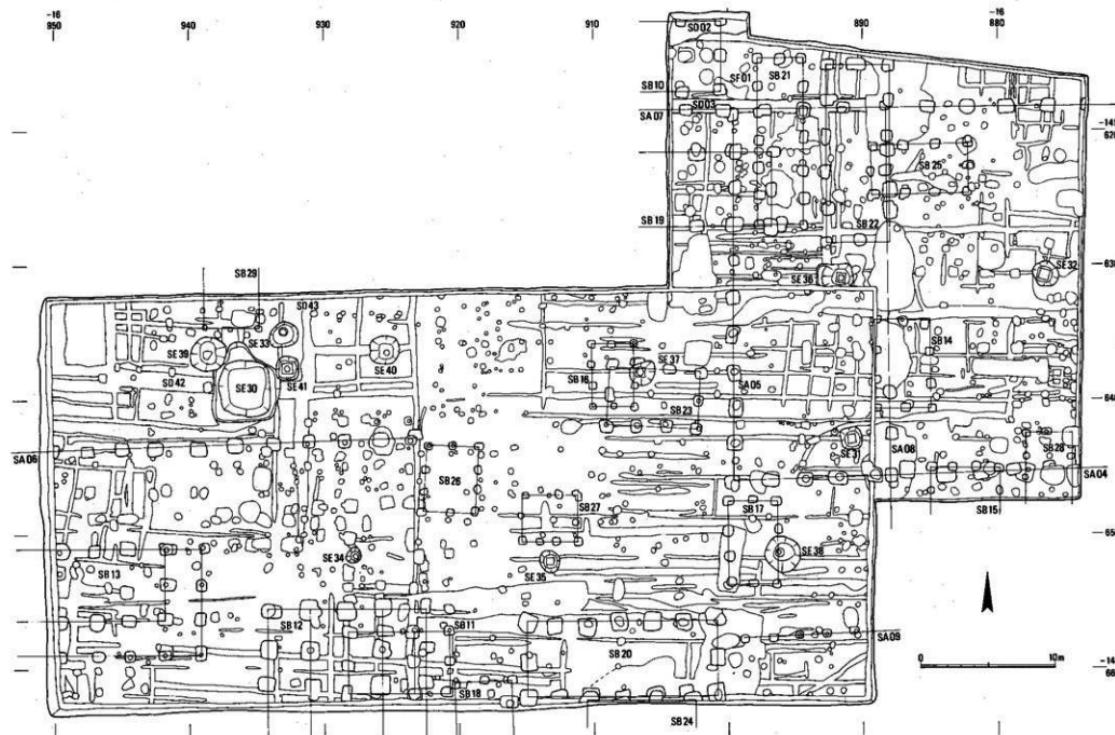
(27m)まで確認した。柱間は2.7m等間である。なお、東西塀のみ、ともに若干方位が振れている。SB10は桁行1間(3.0m)以上、梁間2間(5.4m)の東西棟建物。梁間柱間は2.7m等間である。SB12は桁行2間(5.8m)以上、梁間4間(11.4m)の南北棟建物で、東西二面に廟がつく。柱間は桁行2.9m等間、身合梁間2.7m等間で、廟の出3.0mである。SB13は桁行4間(10.4m)以上、梁間3間(7.8m)の東西棟建物で、東と南の二面に廟がつくが、西廟もつく三面廟の建物であろう。柱間は桁行・梁間・廟の出とともに等しく2.6mである。SE30は東西5.0m、南北4.6mの大きな隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ2.6m。井戸枠は抜取られており、井戸底には木炭が薄く敷かれていた。SE31は東西1.6m、南北1.7mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.7m。井戸枠は堅板組方形(内法一辺65cm)のもので、隅柱と横棧とで縦板を支持する構造である。ところで、SB11はSB12に先行する建物であるが、とりあえずこの時期の造構として一括した。桁行3間(7.5m)、梁間2間(4.8m)の東西棟建物で、東から1間目に間仕切がある。柱間は桁行2.5m等間、梁間2.4m等間である。

B 期 (奈良時代中頃) 一・二坪坪境に東西方向の小路SF01が設けられ、一坪と二坪とが区画される。二坪内部には小規模な建物SB14・15・16・17・18、井戸SE32が散在する。

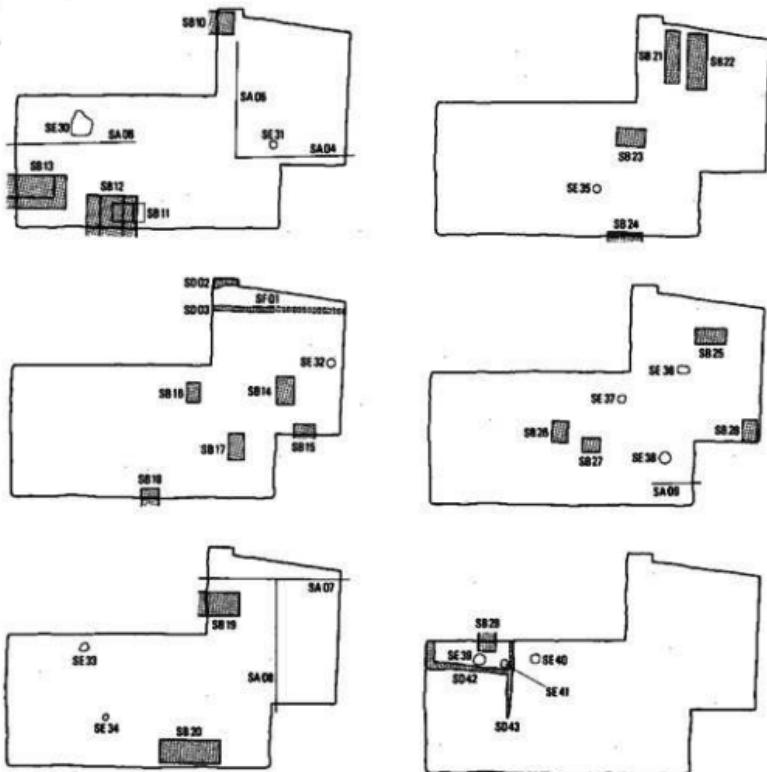
SF01は南北両側溝を有し、路面幅4.0~5.2mである。北側溝SD02は、北岸が未検出で規模不明だが、幅2.0m以上、深さ50cm以上ある。南側溝SD03は幅0.8~1.1m、深さは検出部分西端で30cmあるが、東側ほど残存状態が悪く、東半ではほとんど痕跡をとどめていない。なお、SD03心の国土座標値は、X=-145,618.250 Y=-16,901.000である。SB14は桁行3間(6.6m)、梁間2間(3.9m)の南北棟建物。柱間は桁行・梁間とも不揃いで1.8~2.2mである。SB15は桁行3間(5.1m)、梁間1間(1.8m)以上の東西棟建物。桁行柱間は1.7m等間である。SB16は桁行3間(4.5m)、梁間2間(3.2m)の南北棟建物。柱間は桁行1.5m等間、梁間1.6m等間である。SB17は桁行3間(6.0m)、梁間2間(3.6m)の南北棟建物。柱間は桁行2.0m等間、梁間1.8m等間である。SB18は東西2間(4.2m)の柱列で、南北棟建物の北妻柱列と考える。柱間は2.1m等間である。SE32は径1.8mの円形掘形をもつ井戸で、深さ1.9m。井戸枠は縦板組方形(内法一辺80cm)のもので、隅柱がなく横棧のみで縦板を受ける構造である。

C 期 (奈良時代後半) 一・二坪坪境小路が廃され、南側溝SD03を埋立てたあとに東西塀SA07が構築される。二坪内部はこれに取付く南北塀SA08で東西に区画され、西の区画内には建物SB19・20、井戸SE33・34がある。

SA07は東西10間(30m)まで確認した。柱間は3.0m等間である。SA08も同じく柱間3.0m等間の塀であるが、北2間分と南2間分との間の4柱穴を欠く。後の土壤掘削で失な



第157次調査検出遺構 (1 / 300)



遺構変遷図

われたものと思われるが、この5間分(15m)がもとから開いていた可能性も残る。SB19は桁行2間(5.4m)以上、梁間2間(5.4m)の東西棟建物。柱間は桁行・梁間とも2.7m等間である。SB20は桁行6間(14.4m)、梁間2間(5.4m)の東西棟建物。柱間は桁行2.4m等間、梁間2.7m等間である。SE33は東西2.0m、南北1.8mの不整形掘形をもつ井戸で、深さ1.6m。曲物2段(上段:径61cm・高39cm、下段:径51cm・高33cm)と、上段曲物外周に沿って上部に緩板がわずかに残存したが、上部構造の詳細は不明である。SE34は東西1.0m、南北1.2mの長円形掘形をもつ井戸で、深さ1.0m。曲物3段(上段:径64cm・高8cm、中段:径46cm・高15cm、下段:径41cm・高24cm)が残存した。

D 期(奈良時代後半) C期の崩による区画が廃され、一・二坪坪境に建物SB21・22が前後して建ち、一・二坪とが一体で使用される。二坪内部には建物SB23・24、井戸SE35が散在するが、内部を区画する顕著な施設はみられない。

S B21は桁行6間(12.6m)、梁間2間(3.3m)の南北棟建物。柱間は桁行2.1m等間、梁間1.65m等間である。S B22は桁行5間(13.5m)、梁間2間(4.6m)の南北棟建物。柱間は桁行2.7m等間、梁間2.3m等間である。S B23は桁行3間(6.9m)、梁間2間(4.4m)の東西棟建物。柱間は桁行2.3m等間、梁間2.2m等間である。S B24は東西3間(7.5m)の柱列で、東西棟建物の北側柱列と考える。柱間は2.5m等間である。S E35は東西1.4m、南北1.7mの長円形掘形をもつ井戸で、深さ1.8m。井戸枠は縦板組方形(内法一辺60cm)のもので、隅柱と横桟とで縦板を支持する構造である。

E期(奈良時代末期～平安時代初期) 引続いて坪境の小路は廃されたままであるが、この部分には建物がなくなる。二坪内部には小規模な建物S B25・26・27・28、塀S A09、井戸S E36・37・38が散在する。

S B25は桁行3間(7.2m)、梁間2間(3.6m)の東西棟建物。柱間は桁行2.4m等間、梁間1.8m等間である。S B26は桁行3間(4.8m)、梁間2間(3.8m)の南北棟建物。柱間は桁行が1.5～1.8mと不揃いで、梁間1.9m等間である。S B27は桁行3間(4.0m)、梁間2間(3.4m)の東西棟建物。柱間は桁行1.2～1.4m、梁間1.4～2.0mで、ともに不揃いである。S B28は桁行2間(3.4m)以上、梁間2間(3.2m)の南北棟建物。柱間は桁行1.7m等間、梁間1.6m等間である。S A09は4間(8.4m)まで確認した。柱間は2.1m等間である。S E36は東西2.6m、南北1.7mの隅丸長方形掘形をもつ井戸で、深さ1.9m。井戸枠は縦板組方形のもの2段(上段：内法一辺76cm・高90cm以上、下段：内法一辺40cm・高25cm)を重ねている。ともに横桟のみで縦板を受けている。S E37は東西1.8m、南北1.7mの不整形掘形をもつ井戸で、深さ1.3m。曲物1段(径51cm・高39cm以上)のみが残存した。S E38は東西2.6m、南北2.8mの円形掘形をもつ井戸で、深さ1.6m。曲物2段(上段：径63cm・高32cm、下段：径35cm・高30cm)が残存し、上部には上段曲物外周に沿って縦板数枚がわずかに残るが、構造の詳細は不明である。

2、平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構

発掘区の北西部に、掘立柱建物S B29、井戸S E39・40・41、素掘り溝S D42・43などがある。調査地周辺はその当時は興福寺領佐保田庄に含まれたとみられ、検出遺構はこれに関連したものとも考えられる。

S B29は桁行1間(1.3m)以上、梁間2間(4.0m)の南北棟建物。梁間柱間は2.0m等間である。S E39は東西2.6m、南北2.5mの円形掘形をもつ井戸で、深さ1.1m。井戸枠は抜取されていた。S E40は東西2.2m、南北2.1mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.8m。曲物3段(上段：径43cm・高27cm、中段：径36cm・高15cm、下段：径32cm・高30cm)が残存した。S E41は東西1.7m、南北1.7mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.2m。横桟のみ使用の縦板組方形井戸枠(内法一辺85cm)の下に、曲物(径48cm・高17cm)を据えていた。各

井戸の廃絶時期は、SE39が12世紀前半、SE40が12世紀後半～末頃、SE41が12世紀後半であるとみられる。SD42は幅1.1～1.3m、深さ10～15cmの東西溝、SD43は幅0.6～1.1m、深さ10～20cmの南北溝で、両溝ともに部分的にしがらみが残存した。

III 出土遺物

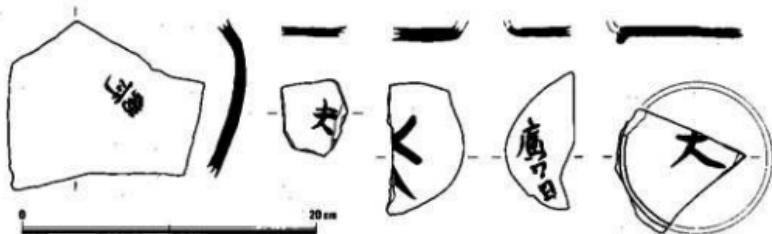
遺物は、造構面を覆う茶灰色土をはじめ、井戸、溝などから多量に出土した。目下整理途中であるが、ほとんどは土器類と瓦塼類で、ほかには木製品、金属製品、木簡が少量あり、サヌカイト片、加工前の琥珀塊なども出土している。

1. 奈良時代～平安時代初期の遺物

土器類 ほとんどが土師器と須恵器で、ほかには施釉陶器、陶靚、土馬、土鍤などがある。造構との関係では井戸から出土したものが最も多く、SE31からは奈良時代前半～中頃の、SE32からは奈良時代中頃の、SE33からは奈良時代後半の、SE38からは奈良時代末頃～平安時代初頭頃の土器が比較的まとまった数量出土している。須恵器には「粥所」(SE32裏込出土)、「口所」、「廣刀自」、「大」、「夫」などの文字が墨書きされたものが含まれる。また陶靚には、蹄脚円面靚、圓脚円面靚、風字靚など形種に富んだ大小種々の製品がみられる。

瓦塼類 軒丸瓦、軒平瓦あわせて100点余が出土した。大半は奈良時代前半のもので、中頃以降のものは少ない。形種別にみると、いわゆる興福寺式の6301B-6671B、6308D-6682Aの組合せが際立って多く、次いで6311A・B-6664D・F、小型瓦の6313A-6685Aの組合せも抽出できるが、前者の二組が主体的に使用されたものと推察される。また、軒瓦には軒丸(型式不明)1点と軒平(6760A)3点の綠釉品が含まれ、綠釉のものはほかにも丸瓦、平瓦、熨斗瓦が数点出土している。

木製品・金属製品 木製品は井戸SE31・32・33・38から、斎串、横櫛、箸、漆器碗などが少量出土したが、良好な状態のものはない。金属製品には鉄製の小型素文鏡、青銅製の帶金具(蛇尾)、鉄釘、鉄鎌などがある。造構との関係で出土したものではないが、いずれも形態などからみてこの時期のものとしてよかろう。



第157次調査出土墨書き器 (1/4)

木簡 井戸SE30の埋土中から付札1点が出土している。訛文などは下記のとおり。

(美)

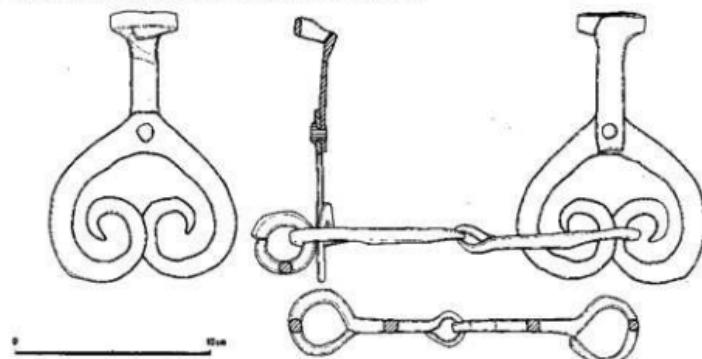
□濃国牟義郡福朽郷□□里

□□□□

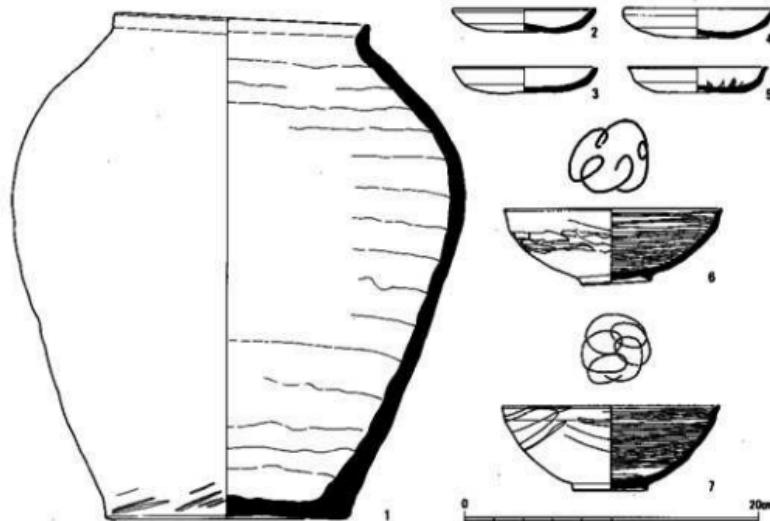
204×(19)×2 031

2、平安時代後期～鎌倉時代初期の遺物

ほとんどが土器類であるが、木製品、金属製品も少量ある。これらのうち井戸SE41からは馬具（轡）が出土しており、注目される。この時期の資料としては稀有な例なので、ともに出土した土器類とあわせて紹介しておきたい。



井戸SE41出土馬具（轡）（1／3）



井戸SE41出土土器（1／4）

井戸SE41出土の土器類と馬具(轡) 土器類には、土師器皿(2~4)、瓦器皿(5)、瓦器椀(6・7)、陶器壺(1)がある。土師器皿は口径10cmほどの小皿のみが出土している。口縁部と内面をなで調整し、底部外面には成形時の凹凸を残す。瓦器皿は見込みにジグザグ状の暗文があるもの。瓦器椀は口縁部外面のへら磨きがかなり省略され、内面のへら磨きも粗い。見込みには4回転の連結輪状の暗文がある。陶器壺は肩の張った胴部に短い口縁がつくもので、外面をなで調整するが、底部付近にわずかに叩き板の痕跡が残る。暗灰色で、やや軟質気味に焼締められており、渥美窯の製品であると考えられる。いずれも12世紀後半のものである。

轡は鉄製の杏葉轡と呼ばれるものであるが、引手と一方の轡の輪を欠いている。鏡板は厚さ0.3cmの鉄板をハート形に切抜き、その尖頭部に立聞を鋸留している。立聞を含めた長さ13.8cm、幅9.6cmである。立聞は長さ7.0cm(うち2.0cmは鏡板と重複)、幅1.4cm、厚さ0.3cmで、先端を打延ばして外方に巻き、面繋を取付ける輪を形づくる。衡は2連式で、連結部の輪は鏡板との連結部の輪に比べて小さい。輪の断面は円形で、棒状部の断面は方形である。全長17.9cmある。轡の輪は径0.7cmの鉄棒を曲げて円環とする。内径1.8cmである。

IV まとめ

今回第157次の発掘調査で得られた知見をまとめると以下のようなになる。

(1) 奈良時代前半には、調査地の二坪を含め、敷地が隣接する一・七・八坪におよぶ四町域規模の役所ないしは邸宅が存在した可能性が高いと判断できる。かつ、次期奈良時代中頃の井戸裏込から出土した「粥所」の墨書き土器は、中頃以前のこの地に部所が細分化された大がかりな厨房関係組織が存在しただろうことを窺わせる。これが全体としてどのような性格の遺跡に組入れられていたかの解明が、周辺地調査の際のひとつの課題である。

(2) 奈良時代中頃には、坪境小路を設けて、二坪と北隣の一坪とが別個に使用された一時期がある。二坪内部の様相は一転して、小規模建物が散在する状態へとかわる。

(3) その後、奈良時代後半には、坪境小路を廃して、再度一・二坪が一体となった二町域規模以上の役所ないしは邸宅の存在を想定することができる。

(4) 上述のごとき条坊造構の存廃を伴う遺構変遷のあり方については、現在調査が進行中の左京三条二坊一・二・七・八坪(推定長屋邸宅跡)での遺構の変遷に似かよったものを見出すことができる。かかる点には注意しておいた方がよいであろう。

(5) 平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての遺構が同時に確認されたことも、特筆してよかろう。先述したが、同地周辺はこの時期興福寺領荘園であったとみられるが、馬具の出土を考慮に入れるならば、在地支配階層との関連を抱合させて考えてみるとあながち無理からぬところではある。いずれにせよ、この時期の奈良を解明していく上での新たな考古学資料が追加されたことになる。

(中井 公、鎌方正樹)

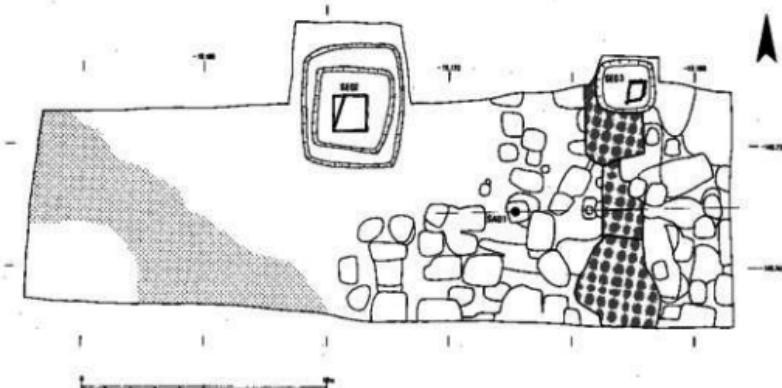
11. 平城京右京四条二坊二坪の調査 第158次

I はじめに

本調査は、奈良市四条大路五丁目6-1において行った市立都跡小学校体育館改築に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、右京四条二坊二坪の東北部に位置する。発掘区は、新体育館建設予定地を中心に東西30m、南北10mの範囲を当初設定し、調査途中において、適宜、発掘区の拡張をおこなった。調査総面積は、322m²である。調査期間は、昭和63年7月7日から8月1日までである。

II 検出遺構

調査地は、これまでの体育館の基礎工事によって、擾乱、破壊されている部分が多い。基本的な層序は、約30cmの造成土を除去すると、灰色細砂、淡褐色砂と約60cm砂層がつづき、その下が、淡黄褐色粘土、灰白色粘土Ⅰ、灰黒色粘土、灰白色粘土Ⅱ、淡灰青色粘土と粘土層がつづく。発掘区西半は、基礎工事の際の擾乱が、淡灰青色粘土層までおよんでおり、淡灰青色粘土層上面に西北から東南に流れる奈良時代以前の流路跡と考えられる灰色粗砂の堆積層を確認できたにすぎない。調査地西側を流れる秋篠川の旧流路のひとつと考えられるが、出土遺物がなく、時期については明らかでない。擾乱部分の少ない発掘区東半では、灰白色粘土Ⅰ層の上面で遺構を検出したが、中世の粘土採取を目的としたらしい土壤が、全面に存在しており、この部分においても土壤群の掘削によって奈良時代の遺構はそのほとんど失われていた。検出された奈良時代の遺構は、掘立柱列1条と井戸2基だけにとどまる。



第158次調査検出遺構 (1/250)

SA01 東西4間分11mを検出。柱間は不揃いで、2.5mから3.0mである。柱穴のひとつに柱根が残存していた。掘立柱建物の可能性も残るが、土壤群の掘削による破壊のため明らかにはできなかった。

SE02 発掘区中央北側で検出した。南北5.0m、東西4.2mの掘形内に南北3.3m東西3.3mの掘形を2段に掘り、1辺1.4mの方形横板井籠組みの井戸枠を据えつける。井戸底には、5~6cm大の礫を敷く。井戸枠は、上部が崩壊し、内部に落込んだ状態で検出されたが、なお下部には、横板5段の井戸枠（深さ1.3m）が残っていた。出土した横板から、もとは、8段程度の井戸枠があったものと思われる。横板は、長さ142cm、幅28cm、厚さ7cmで、組合せの仕口は作らず、木口と側面を交互に組み合わせる。上下は、納穴をつくり、納で固定する。井戸埋土からは、奈良時代後半、平城IVの土器類と軒丸瓦小片、軒平瓦（平城宮6663型式）が出土した。

SE03 発掘区東北で検出した縦板組みの井戸。南北2.1m、東西2.4mの掘形の東南に井戸枠を作る。井戸枠は、崩壊が著しいが、一辺80cm程度のものであり、四隅に隅柱を建て、横棟によって固定し、幅10~20cmの薄い縦板をその外側にあてていたものと見られる。湧水が著しく調査途中で掘形が崩壊したため、掘り下げを断念したが、内部から奈良時代前半、平城IIの土器類が出土した。

（森下恵介）

12. 平城京二条大路の調査 第159次

この調査は本田芳治氏届出の木造住宅建設に関わる事前発掘調査であり、奈良市法華寺町258-1において実施した。当該地は比較的周辺の調査例が豊富で、その成果や遺存地割から平城京の二条大路跡にあたると考えられた。大路跡に直交するように東西5m、南北12mの発掘区を設定し、大路の路面と北側溝の確認を目指した。調査期間は昭和63年8月1日から8月4日までである。

発掘区内の層序は、水田耕作土の下、暗灰色砂質土、黄灰色粘土、灰褐色砂質土、灰褐色粘土、黄褐色粘土と続き奈良時代の遺物を包含する灰色粘土層に達する。灰色粘土層は40cmほどの厚さがあり、これを除くと暗灰色粘土層がある。暗灰色粘土層は遺物を含まず、上面の標高が隣接地の調査時の遺構面の標高と合致することから、この土層上面が奈良時代の遺構面であると考えた。水田面から遺構面までの深さは1.55mほどである。

調査の結果、発掘区内には何らの遺構もなく、発掘区全体が二条大路の路面に位置しているものと思われた。路面はとくに整地をされることもなく、輪轍その他の痕跡もない。以上のことから、今回発掘区を設定した水田の北に隣接する畠地が大路北側溝に相当するものと考えられよう。

（西崎卓哉）

13. 平城京右京一条二坊十二坪の調査 第160次

奈良市西大寺国見町一丁目2137-88において実施した共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、右京一条二坊十二坪の東南部に位置する。発掘区は、東西12m、南北5m（面積60m²）の範囲を設定した。調査期間は、昭和63年8月10日から23日までである。

発掘区は、全体に50~80cmの造成土（現代）があり、その下は、水田耕土（30cm）、淡灰色砂質土（10cm）、黄灰色砂質土（20cm）、緑灰色細砂（30cm）、灰色粗砂（10cm）、黄赤色粘質土と続く。遺構は、黄灰色砂質土上面で数か所の小土壙と南北方向の溝1条を検出したにとどまる。遺物は、遺構の埋土および、緑灰色細砂層から須恵器、土師器、瓦の小片が少量出土した。緑灰色細砂層から出土した土器片には、奈良時代のもの他に布留式に属するものがあり、緑灰色細砂および灰色粗砂は、古墳時代から奈良時代に存在した流路跡と考えられる。調査地の東側を流れる秋篠川の一一流路であろう。上層の黄灰色砂質土上面で検出した遺構は、奈良時代以降と考えられるが、その埋土から出土した遺物からは、確実な年代は、求め難い。なお、最下層の地山と考えられる黄赤色粘質土上面においても遺構検出を試みたが、遺構は検出できなかった。

（森下恵介）

14. 平城京右京三条四坊八坪の調査 第161次

本調査は、奈良市菅原町602-1・2において実施した長谷川永子氏届出の個人住宅建設に伴う事前調査である。当該地は、平城京条坊復元では、右京三条四坊八坪の中央部に相当すると考えられている。調査地は、周辺の住宅建設でとり崩されたため、部分的に残る形となつた南北方向に伸びる丘陵上に位置する。調査地内においても、丘陵の高まりがとり崩された箇所が見られる。この現況から考え、先ず遺構の存否を確認するために、試掘区を設定し、8月12日に調査を開始した。調査区は、丘陵の尾根線方向に幅1.0m、長さ14m、尾根線に直角に幅1.5m、長さ14mの2か所を設定した。

調査区内の土層堆積は、腐触土混じりの表土を除去するとすぐ、地表下約20cmで黄色砂礫の地山となる。この地山面で遺構検出を試みたが、出土遺物、遺構とも全くみられず、丘陵の旧地形を確認するにとどまった。このため、写真撮影、地形測量のうち、同日中に埋め戻し、調査を終了した。周辺での調査例は少ないため、当地周辺での条坊計画の施行については明らかではないが、当地においては、地形の制約等により、条坊計画から除外されていたとも考えられる。

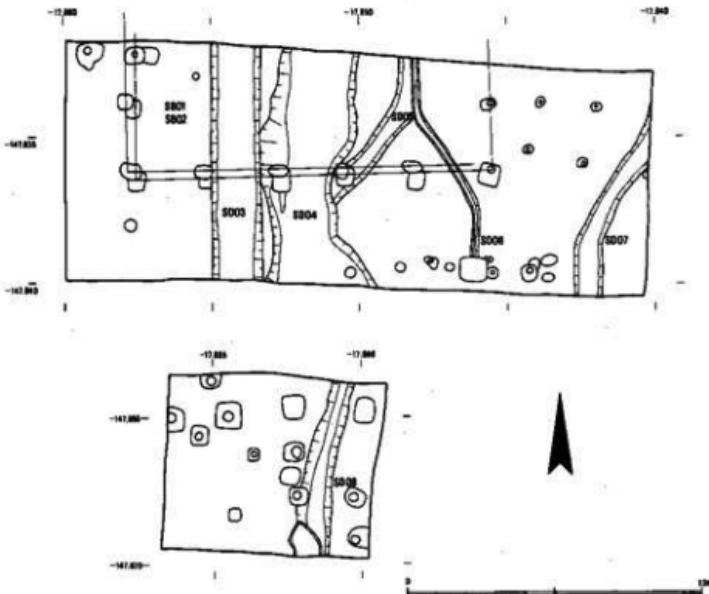
（立石堅志）

15. 平城京左京六条二坊七坪の調査 第162次

本調査は、奈良市八条町356-1、357-1で行った事務所ビルと倉庫建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京六条二坊七坪の西南部に位置する。発掘区は、建物建設位置を中心に南北8m、東西20mの北発掘区と南北7m、東西8mの南発掘区を設定した。調査総面積は、216m²である。調査期間は、昭和63年9月1日から21日までである。

調査地は、全体に約2mの造成土があり、そのため発掘区の設定等に大きな制約を受けた。造成土下の基本的な層序は、旧耕土、暗灰色粘質土、灰色砂質土、茶褐色砂質土、黃灰色粘質土の順で、それより下は、旧流路の堆積と考えられる淡青灰色粗砂層がつづく。遺構は、北発掘区、南発掘区とも茶褐色砂質土上面で検出した。

北発掘区で検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物2棟、溝1条、古墳時代の溝3条である。SB01は、桁行5間(12m)、梁間2間(4.2m)の東西棟。柱間は、桁行が2.4m、梁



第162次調査検出遺構 (1 / 200)



第162次調査出土土器（1／4）

間が2.1mである。重複関係から溝SD01より新しいことがわかる。SB02は、SB01と重複して検出した東西溝。規模は、SB01と同規模でSB01を建て替えたものと考えられるが、検出できなかった柱穴もある。SD03は、幅1.7m、深さ60cmの南北溝。埋土は、青灰色粘質土で、奈良時代の土器類が少量出土した。SD04・05・07はいずれも古墳時代の溝で古墳時代前半、布留式土器が出土した。土器類は、SD04の堆積土のうち上層の灰色細砂層から多く出土し、SD04から出土した土器には、土師器小型丸底壺（1～6）、土師器高杯（7～10）、土師器小型器台（12）、土師器甕（13～16）、土師器二重口縁壺などがある。小型丸底壺、高杯が多いことがめだつ。時期的には、布留式の新しい様相を示すものが多い。須恵器は出土していない。

南発掘区では、奈良時代の掘立柱の柱穴数か所と古墳時代の南北溝SD08を検出したが、柱穴は発掘区が狭く、発掘区内で建物等にまとめることができなかつた。

（森下恵介）

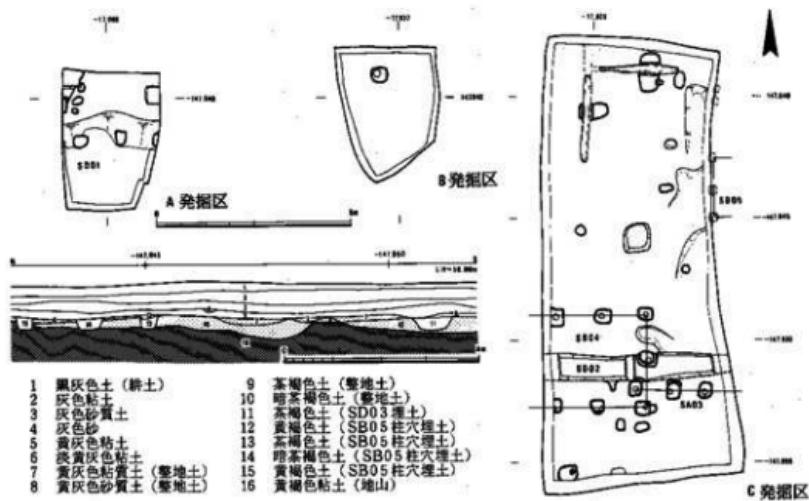
16. 平城京左京六条二坊二坪の調査 第163次

I はじめに

本調査は、奈良市八条町397-1他で実施した店舗建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京六条二坊二坪の南東隅に位置し、南北は六条条間路に面している。調査は、建物基礎工事の先行後、基礎の間に駐車場予定地を調査するといった変則的なものになり、発掘区の設定にも大きな制約を受けた。発掘区は3か所に設定し、その合計面積は140m²である。調査期間は、昭和63年9月7日～9月20日までである。

II 検出遺構

発掘区の基本的な層序は、耕土、灰色砂質土、黄灰色粘土、黄褐色土、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘土であり、暗茶褐色粘土層は、南に向かってゆるやかに低くなり、その上層に黄灰色砂質土や暗茶褐色土がみられる。これらの土層は、奈良時代の整地土と考えられ、土器類を包含する。遺構は、この整地土と暗茶褐色粘土層の上面で検出した。遺構検出面の標高は、概ね55.0mである。検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱列1条、溝1条、古墳時代の流路1条である。



第163次調査検出遺構・C発掘区東壁堆積土層

A発掘区 調査地の西寄りに設定した発掘区で、層序は耕土以下、暗黄灰色粘土、灰色砂質土、黃灰色土、淡茶灰色土、灰色粗砂、灰色砂である。灰色粗砂以下は、流路の堆積土と考えられ、古墳時代前期の布留式土器や自然木が出土した。流路の検出面の標高は、54.8mである。なお灰色粗砂層上面で小土壤を數か所検出したが、その埋土からは遺物が出土せず、時期については明らかでない。

B発掘区 調査地の中央に設定した発掘区で、掘立柱柱穴を1か所検出した。柱穴は、一辺約50cmの掘形をもつもので、径20cmの柱痕跡が確認できる。

C発掘区 調査地の東寄りに設定した発掘区で、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱列1条、溝1条が検出できた。

SD02 発掘区の南寄りで検出した東西溝。幅80cm、深さ30cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、奈良時代中頃の土器類が出土した。

SA03 溝SD02の南側で検出した東西2間(3m)以上の掘立柱列。柱間は、1.5m等間である。

SB04 溝SD02と重複して検出した桁行3間(5.4m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟。柱間は、1.8m等間である。

SB05 発掘区の東辺で検出した。大半が発掘区外のため規模については明らかでないが、梁間2間(2.7m)の東西棟の西妻柱列とみられる。

この他に発掘区北半部で奈良時代のものと考えられる数か所の土壤を検出したが、いずれも深さ20cm前後の浅いもので、埋土から奈良時代の土器片が少量出土した。

III 出土遺物

出土遺物には、奈良時代の土器類、瓦類と古墳時代の土器類がある。奈良時代の遺物は、造構埋土と整地土である黄灰色砂質土、暗茶褐色土から出土した。土師器杯、土師器皿、土師器高杯、土師器壺、須恵器皿、須恵器高杯、須恵器壺などがあるが、小片が多い。古墳時代の土器類は、A発掘区の流路と整地土層から出土している。流路から出土したものは、土師器小型丸底壺、土師器高杯、土師器壺などで、古墳時代前期、布留式土器に属するものである。

IV まとめ

今回の調査は、工事先行後の調査ではあったが、平城京左京六条二坊二坪の造構の一端を明らかにするとともに、古墳時代の流路の存在を確認することができた。古墳時代の流路は、今回の調査地の東側で本年度行った第162次調査でも検出されており、周辺にこの時代の集落遺跡等の存在する可能性を含め、今後の周辺の調査には、期待されるところが大きい。

(藤原豊一)

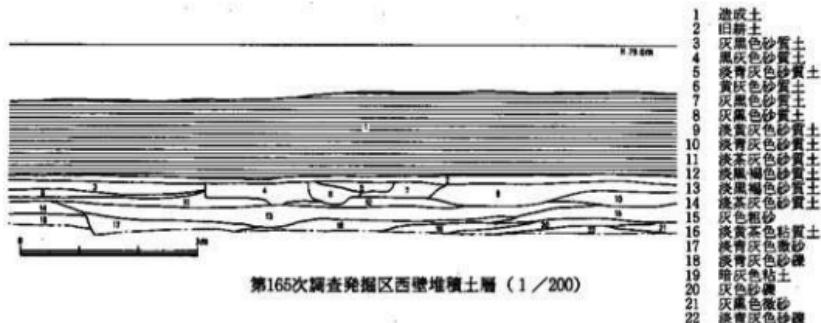
17. 平城京左京二条六坊北郊の調査 第165次

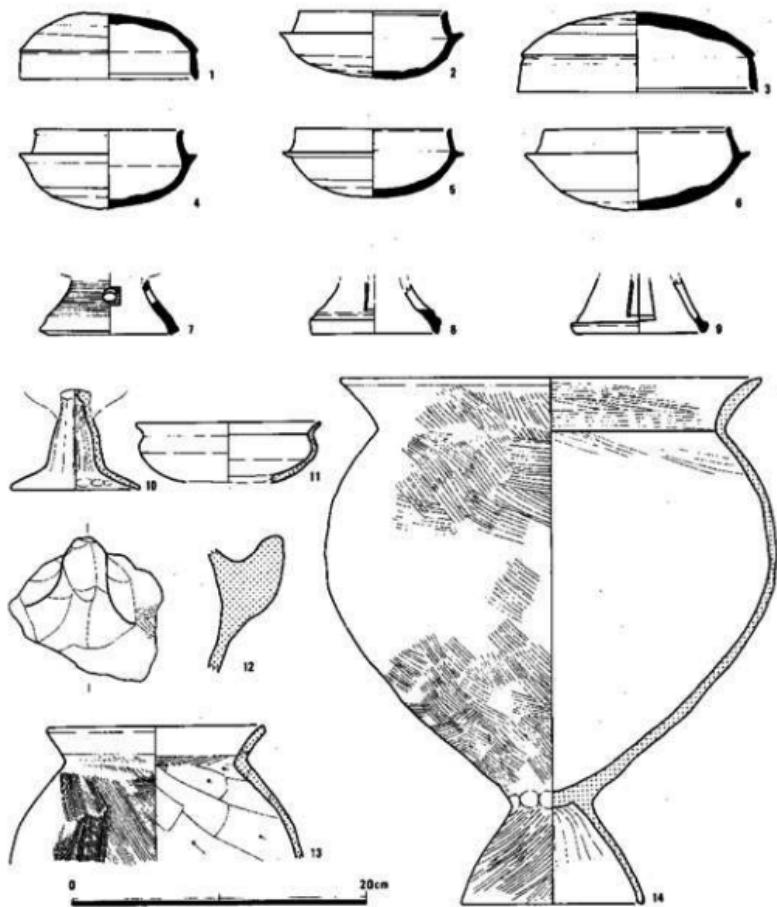
奈良市法蓮町926-4で行った奈良市東消防署仮称佐保出張所建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京二条六坊の北郊で東五坊大路を北へ延長した地点に位置する。この地域は、南一条大路以北、佐保丘陵までの間に条坊設定の有無が問題となっており、今回の調査も条坊の確認に主眼をおき、発掘区は幅5mで、南北25m、東西18mの規模（調査面積190m²）に、L字状に設定した。調査期間は、昭和63年10月3日から24日までである。

調査地は、全体に、1.2m程度の造成土があり、発掘区北寄りでは、その下の層序は、旧耕土、灰黒色砂質土、淡黄灰色砂質土、灰白色微砂、灰色粗砂、灰黒色微砂、淡青灰色砂礫となる。発掘区南寄りでの層序は、旧耕土、淡青灰色砂質土、淡茶灰色砂質土、灰色砂、淡黄茶色粘質土であり、調査の結果、調査地全域が流路跡で、奈良時代の遺構は、存在しないことが判明した。北寄りでは灰白色微砂、南寄りでは、灰色砂以下が、流路内の堆積土とみられる。このうち発掘区北寄りの灰色粗砂層には、弥生時代～古墳時代の土器類が含まれ、この流路の時期の一端を知ることができる。出土土器は、ほとんど壊滅しておらず、周辺にこの時期の遺跡の存在をうかがわせる。

灰色粗砂層出土土器には、須恵器杯（1～6）、須恵器高杯（7～9）、須恵器壺、須恵器壺、土師器高杯（10）、土師器鉢（11）、土師器瓶（12）、土師器壺（13）、土師器台付壺（14）、円筒埴輪片などがある。時期は幅があるが、5世紀末から6世紀初頭のものが中心を占める。

14の土師器台付壺は、尖り底の底部に脚台をとりつける壺で、外反する口縁部をもつ。外面は、口縁部、胴部、脚部とも、はけ目調整。内面は、口縁部、胴部上半をはけ目調整、胴部下半は、ヘラ削りののち、なで調整する。胎土には、長石、石英、螢母の小粒が含まれる。





第165次調査出土土器（1／4）

れ、色調は淡褐色を呈する。時期は、弥生時代末～古墳時代初頭、庄内式土器に含まれるものと考えられる。

以上のように今回の調査では、一条大路以北の条坊の有無については、なんら新しい知見を得ることはできなかった。ただ、今回確認した弥生時代～古墳時代の流路は、調査地西南の左京二条五坊北郊の調査でもその存在が確認されており、その関連性が注目されるとともに、周辺におけるこの時代の集落が存在する可能性が充分予想されるものである。

（森下恵介）

18. 平城京左京九条三坊九・十坪境小路 九条条間路の調査 第166次

本調査は、奈良市西九条町2丁目において実施した、奈良市都市計画街路西九条佐保線の拡幅整備に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京左京九条三坊に位置し、南北に細長いため、想定される2本の道路遺構の検出を目的として北と南に発掘区を設定した。調査期間は、昭和63年11月7日から11月28日である。

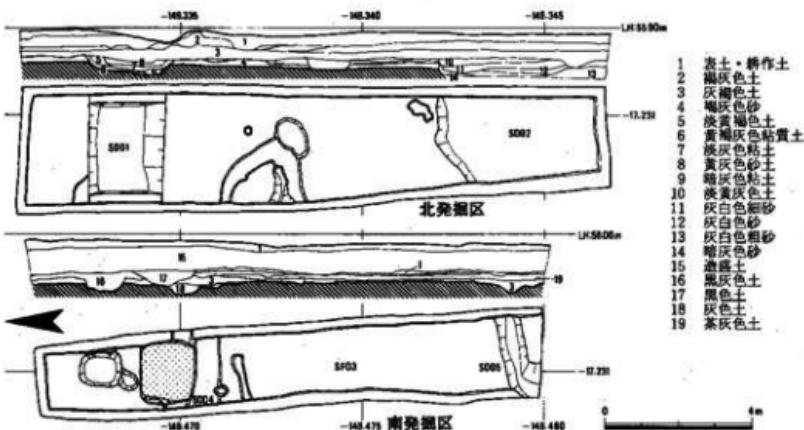
北発掘区 九・十坪境小路の検出を目的として設定した。土層堆積は、耕土、褐灰色土、灰褐色土、褐灰色砂と続き、黒色粘土の地山（標高54.9m）となる。SD01は発掘区北側で検出した幅2.1m、深さ40cmの素掘り溝である。褐灰色砂を掘込んで構築されていた。埋土からは土釜等の15世紀頃の土器が出土しており、条坊に間わる溝として断定はできない。発掘区南側は自然流路SD02により遺構面が削平されている。

南発掘区 九条条間路の検出を目的として設定した。土層堆積は、造成土の下に耕土、茶灰色土、灰褐色土と続き、黄灰色粘土の地山（標高55.2m）となる。近接地における過去の調査成果から、SF03は九条条間路にあたると考えられる。南北両側溝の心々距離は9mで、西へ向かって少し広がる。SD04は北側溝で、幅90cm、深さ25cm。擾乱によりほとんど破壊されている。SD05は南側溝で、幅80cm、深さ20cm。西側で大きく南へ曲がるのは東三坊間路との交差地点に近いためと思われる。

SD01心 X = -149,333.540 Y = -17,231.000

九条条間路心 X = -149,474.565 Y = -17,230.000

(鐘方正樹)



第166次調査検出遺構・発掘区東壁堆積土層 (1/100)

19. 平城京左京九条一坊二・七坪境小路の調査

第167次

I はじめに

本調査は、奈良市西九条町五丁目2-5において、共栄社油脂化学工業株式会社届出の工場事務所建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地が平城京の条坊復元では左京九条一坊二・七坪間の坪境小路にあたるため、これの確認が主目的であった。調査期間は昭和63年11月8日から11月30日まで、発掘面積は建築面積945m²のうちの226m²である。

II 検出遺構

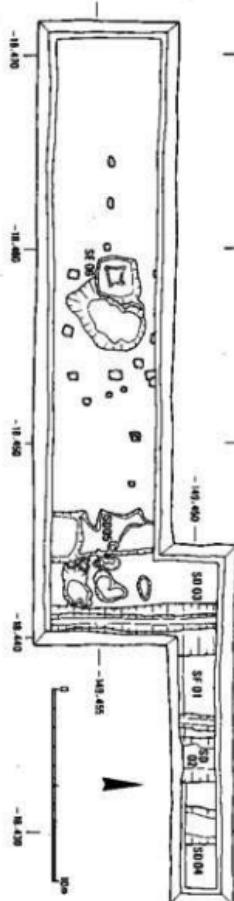
発掘区内の堆積土層は、厚さ1.4~1.5mの造成盛土の下、旧耕土・床土、黃灰色粗砂、灰色粘土2層、灰褐色粘土と統き、地表下約2.2mで茶灰色粘土の地山に達する。遺構を検出したのは地山上面で、主要検出遺構は、坪境小路および両側溝、二坪内の溝1条と井戸1基、七坪内の溝1条である。

SF01 二・七坪坪境小路。後述の東西両側溝を有し、路面幅4.3m、両側溝中心間の幅7.1m(20大尺=24小尺に相当)である。路面に舗装などの痕跡はみられない。

SD02 小路SF01の東側溝。幅2.3m、深さ30cmの素掘り溝で、溝内には灰褐色土が堆積する。

SD03 小路SF01の西側溝。幅2.6m、深さ60~90cmの素掘り溝で、南側に向かって深くなっている。溝内には下層に灰色粘土、上層に灰褐色土が堆積し、奈良時代末~平安時代初頭頃の土器少量が出土した。

SD04 東側溝SD02東側で検出した素掘りの南北溝。両溝間(幅1.3~1.4m)には塀などの存在が想定でき、七坪内部の雨落溝にあたるであろう。幅1.8~1.9m、深さ30cmで、



第167次調査検出遺構 (1/300)

地 点 名	X 軸	Y 軸
二・七坪坪境小路 SF01心	- 149,450.000	- 18,437.310
旧小路東側溝 SD02心	- 149,450.000	- 18,433.760
旧小路西側溝 SD03心	- 149,450.000	- 18,440.860

二・七坪坪境小路計測座標値

溝内には砂混じりの灰色粘土が堆積する。奈良時代末～平安時代初頭頃の土器が出土したが、燈明皿に使用されたとみられる土師器皿Cが2～5枚ずつ重ねて伏された状態で投棄されていた。

SD05 西側溝 SD03西側で検出した素振りの南北溝。両溝間(2.3～2.7m)には同様に壠などが存在したものと思われ、二坪内部の雨落溝であろう。幅1.3～2.5m、深さ20～30cmで、溝内には灰色粘土が堆積する。奈良時代後半～末頃の土器少量が出土した。

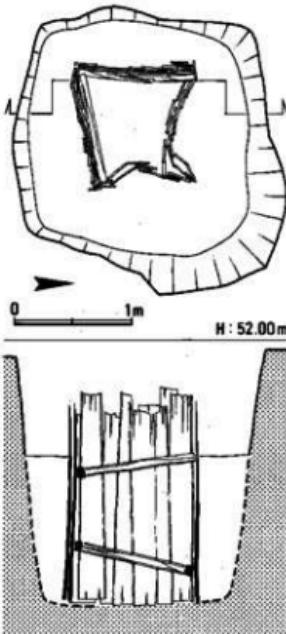
SE06 二坪内で検出した井戸。掘形は東西2.4m、南北2.3mの平面隅丸方形で、深さ2.2m。井戸枠は、内法一边0.99～1.06mの縦板組方形のもので、隅柱がなく目連柄で組んだ横桟のみで縦板を受ける構造である。横桟は下二段分までが、縦板は底からの長さ1.9mまでが残存した。枠内からは奈良時代中頃～平安時代初頭頃の土器少量が、また井戸底から後述の壺形銅製品が出土した。

III 出土遺物

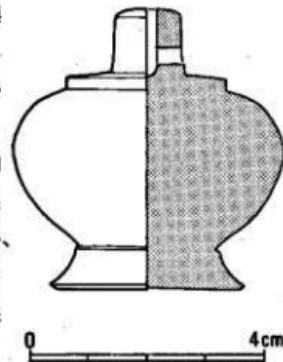
井戸SE06出土の壺形銅製品 土器もしくは金属器有蓋壺の形態を模したとみられる小型の製品で、鋳造のち輪轆で整形して仕上げてある。寸法は径4.6cm、高4.8cmで、重量329.1gである。下部は外反してふんばった高台様にあしらい、底面を平坦につくる。蓋を模したつまみには横方向に径3mmの貫通孔があけられ、さらにこれと逆T字状に交わる径4mmの縦孔が頂部からあけられている。紐通しのためのものであろう。

本品と同様の形態のものは、滋賀県余呉町所在の桜内遺跡から出土しており^(註)(重量91.415gで、さらに小型)、奈良時代の分銅であると考えられている。天秤の分銅なのか、竿秤のおもりなのかといった検討課題は残るもの、ともあれ奈良時代の重さを計る道具とみられる稀有かつ良好な資料が新たにひとつ加わった。

(中井 公)



井戸SE06 (1/50)



(註) 滋賀県埋蔵文化財センター『埋もれた文化財の話3』1982.11 井戸SE06出土壺形銅製品 (1/2)

20. 平城京東四坊大路・左京四条四坊十四坪の調査

第164・168次

I はじめに

この調査は奈良市が進めているJR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査である。土地区画整理事業の対象地域はJR奈良駅を中心に23.6haに及ぶ市街地で、全城が平城京跡に含まれ、さらに周辺の調査例からみて奈良時代以前の遺跡が存在する可能性が高い地域でもある。こうした広範な事業で、かつ全城が遺跡に該当していることが明らかな場合、計画的な調査やその成果の活用が必要であることはいうまでもなく、昭和63年5月31日には奈良市長名で事業地全域にわたる埋蔵文化財発掘調査発掘届出書が提出された。その後、昭和63年7月14日付奈良県教育長名の通知にもとづき数か年にわたりて継続的に発掘調査を進めることとしたが、民家やビルが建て込んだ今回の地域では、現実的にはさまざまな問題をかかえながらの調査となることは十分予測された。

調査はまず、JR奈良駅の西側、区画整理事業対象地域の中央を占める旧国鉄操車場跡地から進めることとし、本年度は下図に示した位置に発掘区を設定した。事業計画では住環境整備事業区域にあたり、モデル住宅、立体駐車場、都市計画道路の建設が予定されて



第164・168次調査発掘区位置と周辺の条坊（枠は区画整理事業の範囲）

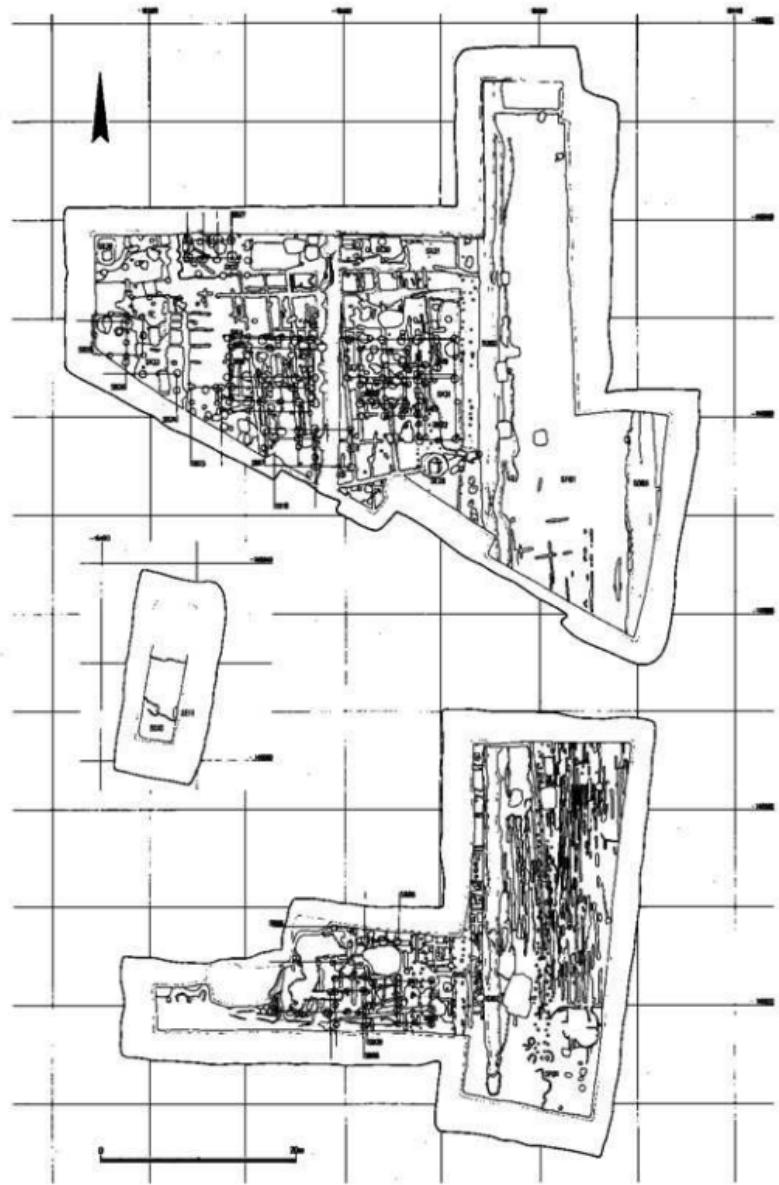
いる地域である。調査は2次にわけて行い、便宜上本市教育委員会が調査開始日によって付している調査番号を第164次と第168次とした。当初164次は約1,500m²、168次は約2,200m²の発掘区を設定したが、後述のように厚い盛土に阻まれ、実際に調査できたのは前者が約900m²、後者は約1,500m²である。164次は昭和63年9月26日から11月30日まで、168次は昭和63年12月5日から平成元年2月28日まで実施した。

II 調査の概要

発掘区の位置 164次調査は奈良市三条本町1他、168次調査は三条町300他で行った。平城京の条坊ではいずれも東四坊大路から左京四条四坊十四坪の東辺にあたると思われ、うち164次は十三・十四坪境小路相当部分も含む。まず、遺跡の遺存状況を把握し、条坊道路を確認しておくことが必要であると考えたので、調査の主要な目的を東西坊大路と十三・十四坪境小路の位置と規模の確認、十四坪東辺の様相の把握をおいた。

層序 旧国鉄操車場敷地は水田に厚さ2.5~3.0mの土砂を盛り造成されている。この盛土を取り除くと黒色粘土（旧水田耕土）がある。以下の堆積土は地区によって異なるが、おおむね旧水田面下40~70cmで地山である黄褐色粘土か黄灰色砂質土に達する。地山面の標高は東端で63.7m、西端で63.0mと全体に西に向って下り勾配である。

第164次調査 第1・2のふたつの発掘区を設定した。第1発掘区では奈良時代の道路、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、土壤を検出した。他に現在第2発掘区との間を西流している菩提川の旧北岸も検出した。道路（S F01）は東西坊大路である。東、西の側溝のうち西侧溝（SD02）のみを検出し、SD02心から12mまでは路面を確認したが、この調査では道路幅員を確認することはできなかった。路面は黄褐色粘土の地山であり、部分的に黄褐色土を入れ整地している。路面部分で多数の南北方向の細い素掘り溝を検出した。溝SD02は幅1.5~2.5m、深さ60cm、南北35m分を検出したが、発掘区の南端ではかつての菩提川に削平され残存していない。溝内の埋土は大きく上下二層に分かれ、上層は黄褐色砂質土、下層は灰色粘土である。十四坪内では後世の擾乱がひどく、菩提川の旧北岸が北へふれてくることから、遺構が検出できたのはわずかの面積である。奈良時代の遺構面が残っている部分では全面を茶褐色土の整地が覆っており、遺構は整地面から掘り込まれている。SX12はSD02の西側で検出した溝状遺構。幅0.9~1.9m、深さ20~30cm。埋土は茶褐色系の土である。SD02とは心々で3.4mほど離れ、SD02西肩とSX12東肩との間は1.1~1.3mある。この間で何個かの柱穴を検出した。十四坪の東辺を画す掘立柱塀となる可能性もあるが、今回の発掘区内ではまとまらない。掘立柱建物5棟（SB05~09）と塀1条（SA04）がある。建物は全部の柱穴を検出したのは1棟で、他は一部を検出した。柱穴の大きさや柱間寸法からみて、比較的小規模な建物である。塀は5間9.0m分を検出した。重複関係から少なくとも3時期の変遷が考えられる。遺物の量は少なく、奈良時代の瓦類、



第164・168次調査検出遺構（1／600）

土器類が整理箱50箱分ほどある。大半が包含層から出土した。

第2発掘区では井戸、自然流路と上記の菩提川の旧南岸を検出した。井戸（SE11）は平面長方形の掘形に上段は縦板組、下段は曲物の井戸枠を据えるもの。自然流路（SD10）は出土遺物がなく時期不明。坪境小路相当部には菩提川が流れ確認できなかった。

第168次調査 この調査では奈良時代の道路、溝、掘立柱建物、塙、井戸、土壌を検出した。道路（SF01）は164次調査区から続く東四坊大路である。東、西の側溝（SD03・02）を検出し、道路幅員を確認することができた。側溝心々の幅員は15.8～16.05m、路面幅は13.1mほどである。路面は灰黄色砂質土の地山で、整地はされていない。西側溝（SD02）は幅1.9～2.5m、深さ41～80cm。東側溝（SD03）は幅2.1～3.3m、深さ24～33cmと浅い。いずれも素掘り溝で護岸施設はない。SX31は西側溝SD02の西1.6mにある土壌。幅3.5m、長さ15.2m以上、深さ30cm。埋土は暗茶褐色で奈良時代の土器、瓦の細片を含む。164次でも同様の位置に溝状遺構（SX12）があり、同様の性格の遺構であろうと思われるが用途は不明である。この他に発掘区北辺でSX32、西辺でSX33を検出した。どちらも埋土は暗茶灰色土で土器、瓦の細片を含み、柱穴、井戸などは埋土に掘り込まれている。形が長方形で条坊の方向にそっていること、重複関係のある他の遺構より古いことから掘込み地業痕跡かとも考えたが、版築状の堆積土がなく、地業に見合う建物も検出していない。掘立柱建物を13棟（SB15～27）、塙2条（SA15・16）を検出した。重複関係や配置から4時期の変遷を考えられる。SB15はこの地区の中心建物でSB16に建て替えられている。SB19はSB15と柱筋をそろえており同時期の建物であろう。SB27は総柱建物である。井戸が3基ある。SE28は方形横板組。SE29は上段は方形縦板、下段が方形横板組。SE30は径80cmの円形縦板組で、長さ243cm以上、幅10～19cm、厚さ6cmほどの厚板16枚を縦に組み、棒の下端を上下に連続する2段の木製籠で固定する。SE28からは8世紀末、SE29からは8世紀中～末の土器が出土した。

遺物は比較的少なく、発掘区全体で奈良時代の土器類、瓦類が整理箱88箱分ある。うち31箱が瓦類で、通常の瓦とともに三彩平瓦2点と綠釉熨斗瓦1点が出土した。

III まとめ

当初目的とした東四坊大路を検出することができた。位置を確認できたことで今後の条坊復元に有効な資料を追加できたと同時に、側溝心々幅15.8～16.05mが45大尺に換算できることから大路幅員の規格に新たな知見が得られた。但し、これについては今回検出の大路東側溝のさらに東で再度確認する必要があると考える。十四坪内については、発掘区が不整形なこともありまとまった成果とするまでには到らなかった。とくに、坪東辺の区画施設が判然としない点や、坪内の宅地割、時期的な変遷など今後の継続的な調査によって解明せねばならぬ課題が多い。

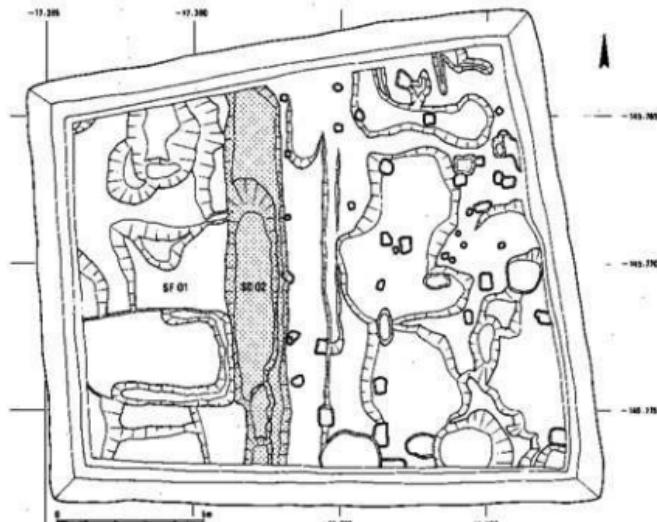
（西崎卓哉・三好美穂・篠原豊一）

21. 平城京左京二条三坊三・六坪境小路の調査
第170次

本調査は、奈良市法華寺町202-1において、岡林博恭・筒井正俊両氏届出の住宅建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地が平城京の条坊復元では左京二条三坊三・六坪の坪境小路にあたるため、これの確認が目的であった。調査期間は平成元年1月12日から2月4日までで、発掘面積は敷地986m²のうちの230m²である。

発掘区内の堆積土層は、耕作土・床土の下、灰褐色砂、灰色粘土と続き、地表下1.0～1.3mで黄灰色粘土の地山（この上面で遺構を検出）に達する。地山直上の灰色粘土は厚さ30～50cmの堆積で、奈良時代の瓦、土器を多量に包含していた。

調査の結果、発掘区の中央やや西寄りで素掘りの南北溝1条（SD02）を検出したが、本溝の東側にのみ小穴が散在する状態からみて、小路東側溝にあたると判断できる。検出規模は幅1.4～2.1m、深さ10～40cmであるが、北側ほど上部の削平が著しく残存状態が悪い。溝内埋土は灰色粘土で、奈良時代中頃～後半の土器、6304N型式軒丸瓦が出土した。小路面（SF01）は、西側溝が未検出であるが、幅5.1mまでを確認した。路面上には後の粘土採取のためのものとみられる土壤が全面に及んでいた。なお、東側溝SD02心の国土座標値は、 $X = -145,770.000$ $Y = -17,387.850$ である。（中井 公）



第170次調查檢出遺體 (1 / 200)

22. 平城京左京二条五坊北郊の調査 第171次

I はじめに

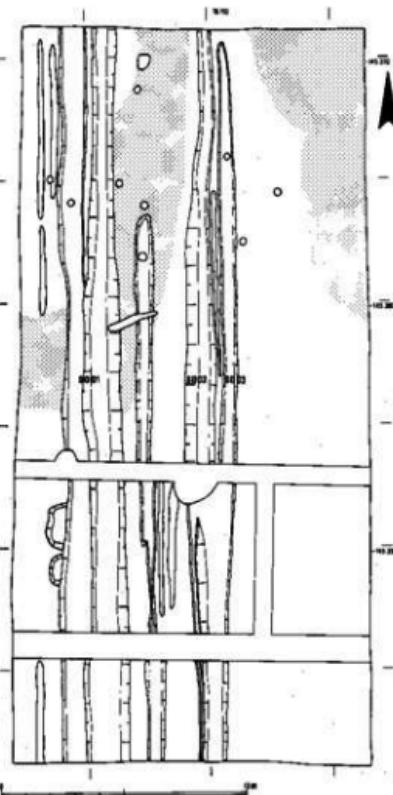
本調査は、奈良市法蓮町字ヤイ757-3において実施した宗教道場建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京南一条大路を跨る一条通りの北側に位置し、昭和29(1954)年に奈良高等学校校庭拡張によって奈良時代の掘立柱建物跡が発見されて以来、周辺では、5回の発掘調査が行われており、東四坊大路以東の一条大路以北においても条坊が存在し、京内とする可能性が考えられている地域である。発掘区は、昭和58年の調査地(平城京第46次調査)の南側で、46次の調査では、奈良時代の南北にのびる掘立柱柱列とその西側に並行する溝を検出しており、これにつながる遺構の検出が期待された。発掘区は、建物建設位置を中心南北30m、東西14mの規模(発掘面積420m²)を設定した。調査期間は、平成元年1月13日から2月7日までである。

II 検出遺構

調査地は、全体に奈良中学校、奈良高等学校当時の約50cmの造成土があり、これを取り除くと、旧耕土、茶灰色砂質土、淡黄茶色粘質土となる。遺構は淡黄茶色粘質土上面で検出したが、発掘区南半部は、学校校舎基礎が淡黄茶色粘質土まで及んでおり、大半が削平、攪乱をうけている。また、北半部の西北と東北には、流路跡とみられる砂層があり、この砂層からは、古墳時代の土師器が少量出土した。

検出した遺構は、流路跡を除くと奈良時代の南北溝3条と耕作溝数条である。

SD01 発掘区の西寄りで検出した



第171次調査検出遺構 (1/250)

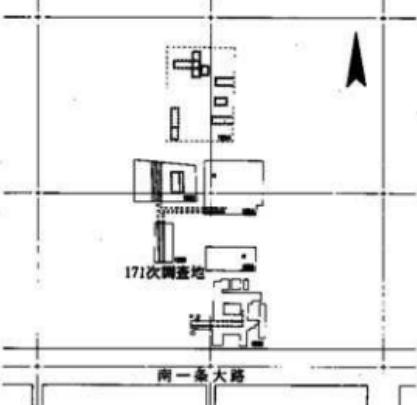
南北溝。幅20cm、深さ40cmで位置的にみて、46次調査で検出した溝SD03につながるものとみられる。埋土から奈良時代の土器片と瓦片が少量出土した。出土した土器は、細片が多いが、三彩施釉陶器の獸脚片が1点ある。

SD02 SD01の東側約4mの間隔をおいて並行する南北溝。幅1.2m～0.7m、深さ30cm。埋土からは、奈良時代の土器が少量出土した。南半部は、学校建設の際に削平され、遺存状況は良くない。

SD03 SD02の東側に沿った幅80cm、深さ20cmの南北溝。奈良時代の土器が少量出土したが、南半部は削平されている。

III まとめ

今回の調査で検出した遺構と、これまでの周辺の調査で検出した遺構との位置関係は、おおよそ図示したようになる。今回検出した溝SD01は、46次調査の溝SD03につづく同じ溝であろうことは、先に述べたが、同調査で検出した南北柱列SA01は、今回検出されず、SA01は、1984年調査で検出された東西柱列SA02と今回の調査地の北側でつながるであろうことが、ほぼ確実になった。一条大路以北に条坊を復元した場合、これらの柱列と溝は、敷地内を区画するもので4坪（町）をひとつの敷地として利用していた可能性があるが、遺跡の性格とともに佐保丘陵周辺に条里制等、条坊とは別の区画の存在についても今後検討する必要性があるものと思われる。（森下恵介）



第171次調査地周辺の調査

(1) 鈴木嘉吉「奈良高等学校校庭における掘立柱建物遺跡」（『大和文化研究』2-5）1954

奈良国立文化財研究所「平城京左京二条五坊北郊の調査」1970

奈良市教育委員会「平城京左京二条五坊北郊の調査」（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度）1984

奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京二条五坊北郊 昭和59・60年度発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1985年度）1986

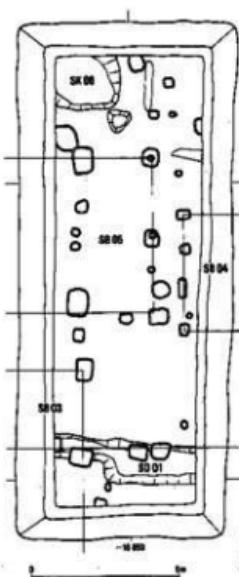
(2) 昭和29年の調査地については、その正確な位置関係が求められず、49次調査の報告では、その調査地の東側に位置するものとしたが、1984年の調査でより北側に位置することが判明したため、図のように訂正する。

23. 平城京左京二条四坊七坪の調査 第172次

本調査は、奈良市法蓮町380-3において、酒井キミ氏届出の共同住宅建設工事に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では左京二条四坊七坪の西辺部ほぼ中央にあたり、本年度調査（第157次）した二坪の発掘区とは水田一筆を隔てて東南へ30mほどのところになる。調査期間は平成元年3月6日から3月16日までで、発掘面積は敷地471m²のうちの90m²である。

調査地は既造成地で、厚さ60~70cmの盛土がなされている。これ以下の堆積土層は、黒灰色腐蝕土（旧耕土）、灰褐色砂土（床土）、灰色粘土2層と続き、地表下約1.5mで灰色砂土もしくは黄褐色砂土の地山に達する。遺構を検出したのは地山上面においてで、検出遺構には、溝1条、塀1条、建物3棟、土壤1がある。

SD01 東西方向の素掘り溝で、東半部は幅1.5m内外あるが、西半部では80cmほどに幅狭くなっている。深さ約15cmで、溝内には暗灰色粘土が堆積し、奈良時代の土器がごく少量出土した。柱穴との重複関係があり、後述のSB03よりも古く、SA02よりも新しいことがわかる。



SA02 東西1間（2.7m）の掘立柱列で、塀か建物かの区別がつかないが、とりあえずは塀としておきたい。重複関係からSD01よりも古いことがわかる。

SB03 南北1間（2.9m）の掘立柱列で、同様に塀か建物か識別できないが、とりあえずは建物の東側の柱列にあるものとしておきたい。重複関係からSD01よりは新しいことがわかる。

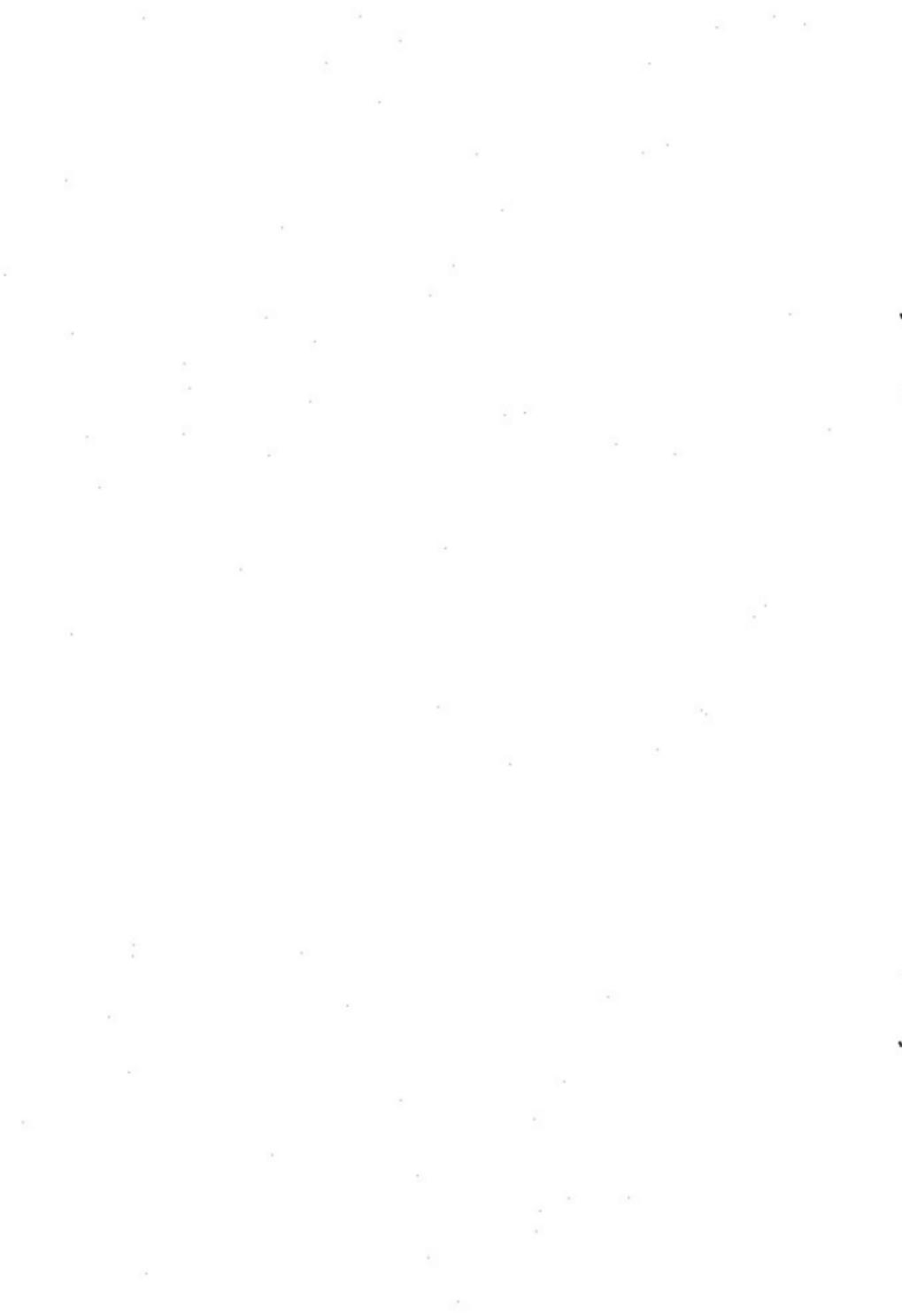
SB04 南北3間（3.9m）の掘立柱列で、小規模な南北棟建物の西側柱列と考える。柱間寸法は不揃いで、北から1.2、1.3、1.4mである。

SB05 衍行1間（2.4m）以上、梁間2間（5.2m）の東西棟掘立柱建物。梁間柱間は2.6m等間である。2柱穴で柱痕跡を確認した。

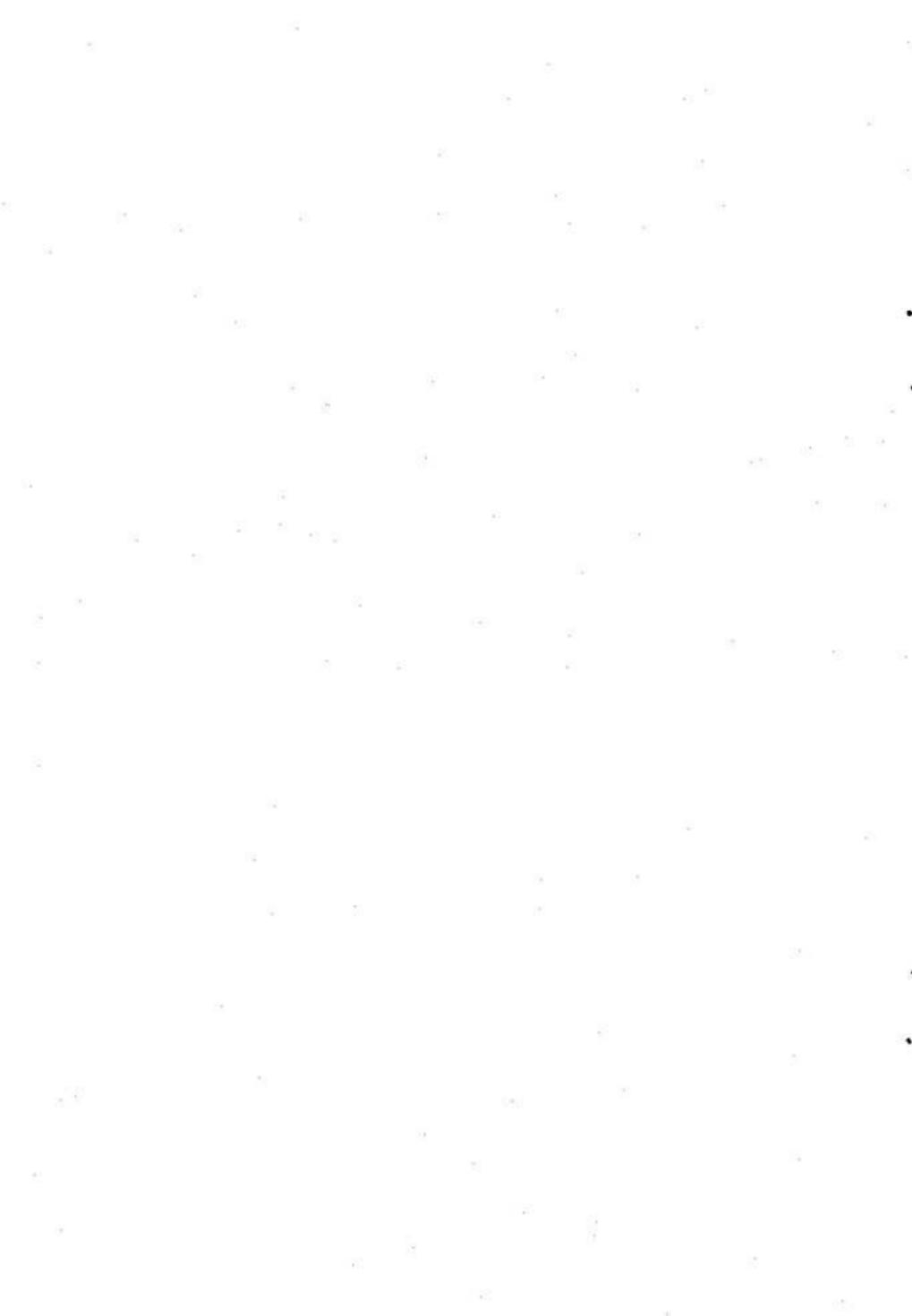
SK06 東西2.1m以上、南北1.8m以上で、平面隅丸方形かとみられる土壤。深さ10cmと浅く、境内には暗灰色砂土が堆積し、奈良時代の土器ごく少量が出土した。

第172次調査検出遺構（1/200）

（中井 公）



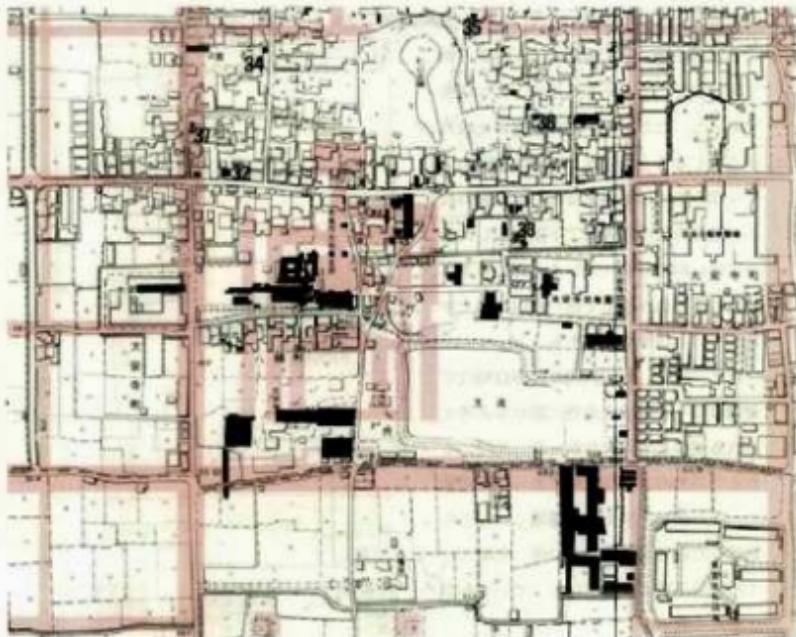
II. 寺院の調査



1. 大安寺旧境内の調査 第32～37次

本年度、大安寺旧境内の調査として行った調査は、下記の6件で、いずれも史跡大安寺旧境内における現状変更許可申請に伴う事前発掘調査である。住宅の増改築等にかかるものが多く、そのいずれもが小規模な調査である。

次 数	調 査 地	面 積	調 査 期 間	申 請 者	申 請 内 容	担 当 者
32	奈良市大安寺町 1135	52 ㎡	63. 4. 4～4. 9	武野光雄	住宅改築	西崎卓哉
33	奈良市大安寺町 1263	12.3 ㎡	63. 9. 7～9. 8	大西 尚	住宅増築	西崎卓哉
34	奈良市大安寺町 1043	3.0 ㎡	63. 9. 9	奈良市長	便所改修	西崎卓哉
35	奈良市大安寺町 1084	15 ㎡	63. 11. 9～11. 10	熊木大典	住宅改築	森下憲介
36	奈良市大安寺町 1104	9 ㎡	63. 11. 25～11. 30	楠木梅彦	倉庫建設	羅原豊一
37	奈良市大安寺町 1048	16.9 ㎡	元. 3. 9～3. 14	大西敏男 大西鉢子	住宅改築	西崎卓哉



大安寺旧境内発掘調査位置

第32次の調査

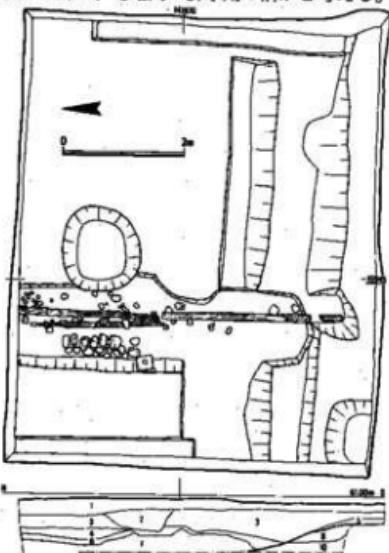
この調査は奈良市大安寺町1135—2において行った、同地在住の武野光雄氏提出の住宅改築に伴う現状変更許可申請に関する発掘調査である。調査地は推定大安寺食堂跡の西、史跡大安寺旧境内の西辺にほど近いところである。申請地の中央に東西8m、南北6.5mの発掘区を設定し、昭和63年4月4日から4月9日まで実施した。

発掘区内の層序は以下のようであった。まず、瓦礫まじりの暗茶褐色の表土がある。これを除くと奈良時代以降の遺物が混在する茶褐色土が続き、この下に黄灰色砂質土がある。この層は江戸期の遺物を含み、この時期の整地土層かと考えられる。以下、これも江戸期の遺物がまじる軟弱な灰色粘土、灰白色粘土層と続き、礫がまじる灰色砂の地山に達する。

江戸期の整地土かと考えた黄灰色砂質土層上面で土壤と南北溝を検出した。土壤の性格は不明。南北溝は幅1.5m、深さ15cmほどの浅い掘形の中央に、西岸は人頭大の石を南北に置き並べ、東岸は丸太材を南北に据え、幅20cmほどの溝をつくっている。丸太材の際には杭を打ち補強している。この溝は、発掘区南端、後述の地山の高まり部で終わっている。地表面には何も痕跡はないが、江戸期の敷地境界の溝か、宅地内の排水用の溝かと考える。この整地土層の下に堆積する灰色系の粘土は軟弱で、あたかも湿田のような状態であった。ただ、江戸期の遺物が比較的多くまじることからみて、池か湿地のような窪みの中の堆積ではないかと思われる。地山の灰白色砂は、下図に示したように南へ向い高まっている。逆にいえば、地山の落ち込み部に上述の軟弱な粘土が溜っている状態なのである。

以上の結果、発掘区内には奈良時代の遺構はなく、直接大安寺に関わると考えられる成果はえられなかった。ただ、それまで湿地のような状態であった当該地へ、江戸期に土砂を入れ整地し、住宅を建築したのである。その後、宅地としての利用は続き、現在に至っているものと考えられる。

(西崎卓哉)



1 暗茶褐色土 4 咲茶褐色土 8 黄褐色砂質土
2 灰白色粘土混入 5 茶褐色粘土 9 灰白色粘土
3 茶褐色土 6 黄灰色砂質土 10 灰白色粘土
7 灰色粘土

大安寺第32次調査検出遺構・発掘区東壁堆積土層
(1/100)

第33次の調査

この調査は大西尚氏提出の住宅増築に伴う現状変更許可申請に関わる発掘調査である。調査地は奈良市大安寺町1263、大安寺の伽藍復元では麁院の推定地にあたる。この地は上述の大西氏宅の裏庭であり、木造家屋があった。この建物の取り壊し後、昭和63年9月7・8日に調査を実施し、同12日に基準点測量を行った。発掘区は東西3.5m、南北3.5m、面積約12.3m²である。

発掘区内の層序は以下のようであった。現地表面から50cmは近年の造成土。それを取り除くと旧水田面である。以下は水田耕土、灰色粘土、茶灰色粘質土の順で、地山である灰色砂礫層に達する。この面までの深さは85cmである。茶灰色粘質土層は奈良時代の遺物を包含していた。遺物の大半は瓦片である。灰色砂礫層は非常によくしまっており、奈良時代以前の自然流路内の堆積土だと思われるが、遺物が全く混ざっていないので、堆積の時期は不明である。

周辺の調査例や、発掘区内の遺物包含層の状態からみて灰色砂礫層上面が奈良時代の遺構面であると考え、精査したが、発掘区中央が溝状に浅く窪むのみで、他に遺構はなかった。溝状の窪みも、とくに意味のあるものとは考えられず、この調査では大安寺に関わる遺構の検出には至らなかった。

(西崎卓哉)

第34次の調査

この調査は大安寺公民館の便所改修に伴う現状変更許可申請に関わる発掘調査である。当該地は奈良市大安寺町1043、推定大安寺主要伽藍地域の北辺にあたる。現状変更の内容が既設の便所に新たな給排水管を敷設するというものだったので、そのルートに沿って幅40cm、長さ7.5mの発掘区を設定した。調査は昭和63年9月9日に行った。

給排水管の敷設に要する掘削が、幅40cm、深さ50cm程度ということから、発掘区内の掘り下げもその範囲に留めた。近年の擾乱が多く、発掘区内の層序は一律ではないが、基本層序は以下のようであった。現地表面から15cmまでは茶色土、以下、10cmほどの焼土層があり、青灰色土、暗黄灰色土、茶灰色土と続き地山である黄褐色粘土層がある。地山は部分的にしか確認できなかつたが、地表面から40~50cmで達した。

地山が確認できた部分では、東西40cm以上、南北2.75m以上の土壤状の窪みを検出した。一部を掘り下げるところ、深さは25cmほどであることがわかつたが、遺物は全く出土せず詳細は不明である。以上のような状況であったが、何分発掘区が狭小であるので遺構の性格を究明するまでに至らなかつた。なお、先に記した掘削の範囲内であれば、地山に穿れた遺構には影響ないものと思われる。

(西崎卓哉)

第35次の調査

奈良市大安寺町1084で行った熊木大典氏申請の住宅改築の現状変更許可申請に伴う発掘調査である。調査地は、大安寺旧境内の北端に位置し、杉山古墳後円部東北の周濠が推定された。発掘区は、南北3m、東西5m（発掘面積15m²）の規模で設定した。調査期間は、昭和63年11月9日と10日である。

調査地には、全体に約80cmの造成土があり、その下は、青灰色粘土、黒灰色粘土、暗灰褐色粘土の堆積が見られ、現地表から1.8mで地山である淡青灰色砂礫層となる。青灰色粘土層以下は、杉山古墳周濠内の堆積土と考えられ、黒灰色粘土層、暗灰褐色粘土層からは、近世の土器類、奈良時代の瓦類とともに埴輪片が出土した。出土した近世の土器類には、16世紀末～17世紀初頭の土師器羽釜、瓦器鉢、唐津碗があり、この時期までに周濠が埋ったことがわかる。埴輪は、少量ではあるが円筒埴輪とともに形象埴輪が出土した。形象埴輪は、椅子人物像の下腿部と考えられるもので、足首に竹管列点文を飾る。円筒埴輪は、末端が重複しない連続したヨコハケで外面を調整するもので、時期は、5世紀後半に位置づけられる。いずれも杉山古墳所用ものと考えられる。

（森下恵介）

第36次の調査

本調査は、奈良市大安寺町1104で実施した倉庫建設の現状変更許可申請に伴う事前発掘調査である。調査地は、大安寺旧境内の北東部分で、大安寺の伽藍復元によれば、毘院の存在が推定される。調査は、宅地内の倉庫建設予定地に東西3m、南北3mの発掘区を設定して行った。調査期間は、昭和63年11月25日から11月30日までである。

発掘区の層序は、暗茶褐色土、黄灰色土、暗茶褐色土、黄灰色粘土であり、地山である黄灰色粘土層上面で遺構を検出した。遺構の検出面の標高は、概ね63.3mである。

検出した遺構は、土壤4か所である。土壤はいずれも発掘区外に広がるためその規模はあきらかでない。発掘区西側では、3か所の土壤が重複しており、深さは80cm前後で、埋土からは18～19世紀の陶磁器片とともに多量の瓦片が出土した。瓦の廃棄壙と考えられる。南側で検出したものは、西側の土壤との重複関係からこれより古いことがわかり、埋土からは、16世紀後半の土師器皿、土師器羽釜、瓦器鉢などが出土した。土壤の埋土からは、奈良時代の瓦類、土器類も出土しているが二次的混入と考えられ、奈良時代の大安寺にかかる遺構は、まったく検出されなかった。

（篠原豊一）

第37次の調査

この調査は、大西敏男、鈴子氏申請の住宅改築に伴う現状変更にかかる発掘調査である。申請地は奈良市大安寺町1048、史跡大安寺旧境内の西端、東三坊大路にかかるかとする地点である。東西2m、南北6mの第1発掘区と、東西1.5m、南北3.3mの第2発掘区を設定し、平成元年3月9日から3月14日まで調査を行った。

発掘区内の層序は単純で、表土である黒灰色粘土と茶色粘質土を取り除くと、現地表下40~50cmで地山である黄灰色粘質土が露出した。遺構は地山面で検出した。

検出した遺構は溝と土壤内に掘られた構である。溝SD01は幅2.7m以上、深さ85cmの素掘りの南北溝。第1発掘区で東肩のみを検出し、西肩を検出すべく第2発掘区を設定したが、西肩は申請地外にあり溝の全幅を確認することはできなかった。検出した範囲では護岸施設はない。溝内の堆積土は灰色系の軟弱な粘土と砂である。溝の規模と位置からみて、東三坊大路の東側溝にあたるとと思われる。

SX02は径68cm、検出面からの深さ12cmの平面円形掘形に構を掘ったもの。側板はすぐなく、径42cm、厚さ2cmの底板のみが残る。出土遺物がなく時期は不明。

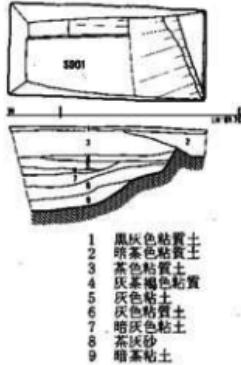
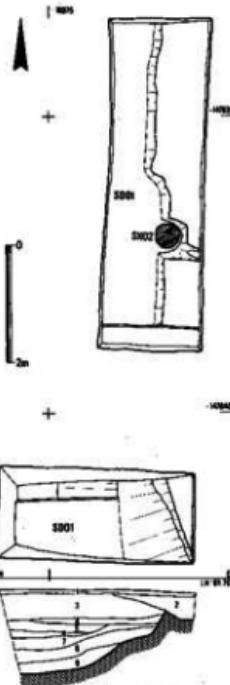
遺物は少なく発掘区全体で整理箱10箱ほどである。大半が瓦で、土器は整理箱1箱に満たない。平城宮6138C型式の軒丸瓦と6661A、6716C型式の軒平瓦が出土した。

周辺の東三坊大路検出例は六条三坊十三坪の調査にある。
ここでは大路西側溝のみを検出しておらず、この成果に今回の結果をあわせて大路の側溝心々幅を算出すると、15.9mほどになる。これは54尺(45大尺)に換算できる。但し、今回のSD01は幅員が確認できておらず最深部を溝心と仮定した。左京一条三坊十五・十六坪での調査例でも路面幅員50尺もしくは75尺の可能性が述べられており、今回の成果とあわせて大路の幅員は側溝心々54尺(45大尺)であった可能性が考えられる。

(西崎卓哉)

(1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』1974 大安寺第37次調査検出遺構 (1/100)



2. 元興寺旧境内の調査 第14~17次

本年度、元興寺旧境内で行った調査は、以下の4件である。元興寺は、京内の大寺院のなかでも、早く衰退し、市街化したことから、奈良時代の造構の遺存状況も良好でない部分が多い。本年度の調査でも、奈良時代の元興寺にかかる遺構は、検出できなかったが、伽藍の衰亡の時期を推定できるいくつかの資料と寺域の市街化についての資料を得ることができた。

次 数	調 査 地	面 積	調査期間	届 出 者	届出内容	相 当 者
14	奈良市高畠町1112	540 m ²	63.7.11~8.22	奈良市長	駐車場建設	森原豊一
15	奈良市勝南院町26 北室町24、26	63 m ²	63.8.11~11.26	松石長次	住宅改築	西崎卓哉
16	奈良市元興寺町30	22 m ²	63.12.5~12.16	稻葉重一	住宅改築	鍛方正樹
17	奈良市北室町14	24 m ²	元.3.1~3.10	奈良市長	街路建設	鍛方正樹



元興寺旧境内発掘調査位置

第14次の調査

I はじめに

本調査は、奈良市高畠町1112他で行った市営駐車場建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、元興寺旧境内地の東北部で昭和61年度の元興寺旧境内第7次調査の調査地の東側に位置する。この周辺は平安時代以降、元興寺の衰退によって興福寺の寺地となり、調査地の東南に興福寺大乘院が営まれ、江戸時代には、調査地には成身院や蓮成院といった興福寺の塔頭があったことが文献資料によって知られる。地形は南に尾花谷川が西流し、東側は奈良ホテルのある鬼籠山の丘陵が迫っており、地表面は緩やかに西へ傾斜し、丘陵端部を削平した痕跡を残している。

調査は、調査地の南寄りに東西55m、南北10mの発掘区（面積550m²）を設定して行った。調査期間は、昭和63年7月11日から8月22日までである。

II 検出遺構

発掘区には、黒灰色土、黄褐色土の表土が厚さ10~20cmあるだけで、これを取り除くとすぐに黄褐色砂礫あるいは灰色砂礫の地山となる。遺構はこの地山面の上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね84mである。検出した遺構は、平安時代から江戸時代のもので室町時代の遺構が多い。

S K01 発掘区西寄りで検出した円形の土壙。径1.2m、深さ1mで埋土から11世紀の土師器皿、瓦器碗など土器類が少量出土した。

S D02 発掘区の南寄り中央の流路。北へ湾曲しており、発掘区南に位置する尾花谷川の旧流路と考えられる。深さは約1.2mで灰色砂礫、灰色砂が堆積し、上層は黄褐色土、茶褐色土で埋立てられ、整地されている。整地層からは、土師器皿、瓦器碗、須恵器鉢、輸入磁器など13世紀から14世紀の土器類が多量に出土した。

S E03 発掘区東寄りで検出した井戸。上部は近世の溝S D15によって破壊されている。掘形は一辺1.2~1.8m、深さは1.4mを測る。底から1.2mまでは素掘りで、上部に瓦積みの円形の井戸枠をつくる。井戸枠は、西側だけしか残存していなかったが、径20cm大的自然石を一段並べ基底部とし、その上に瓦を積み上したもので、瓦は二段分が遺存していた。積み上げられた瓦のなかには、鎌倉時代のものとみられる軒平瓦2点がある。井戸内埋土からは、13世紀の土器類が少量出土した。

S K04 発掘区東寄りで検出した径80cm、深さ20cmの土壙。埋土からは、13世紀の土器類が少量出土した。

S K05 発掘区西端で検出した東西に長い土壙。西側は、発掘区外に延びる。東西8m、南北幅4.2m、深さ40cmを測る。底部は西側へ傾斜しており、埋土下層に砂礫が堆積するこ

となどから溝になる可能性もある。埋土からは、15世紀前半の土師器皿、土師器羽釜などの土器類が多く出土した。

SK06 発掘区の中央、流路SD02の整地土上面に掘られた土壤。平面は梢円形で東西4.5m、南北3m、深さ1.2mを測る。埋土からは、15世紀前半の土師器皿、土師器羽釜などの土器類が出土した。

SK07 SK06とおなじく流路SD02の上面に掘られた土壤。南側は発掘区外に延びる。埋土から15世紀前半の土師器皿などの土器類が出土した。

SE08 発掘区東北隅で検出した井戸。掘形の規模は径3.5m、深さ3m以上で、掘形中央に一辺1.2mの縦板組横桟どめの井戸枠が遺存していた。井戸枠は土圧で崩壊しており、内部は掘り下げられなかった。掘形埋土からは土師器皿など15世紀前半の土器類が出土した。

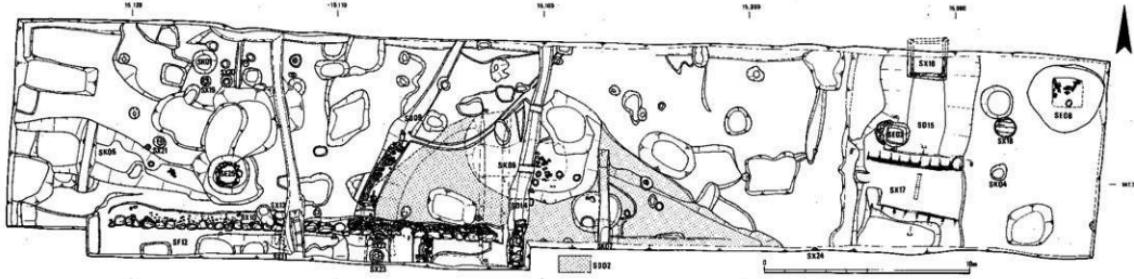
SD09 発掘区中央で検出した斜行する幅1m、深さ40cmの南北溝。南半部5.1mは、瓦質土管18本をつなぎ暗渠としている。使用された土管は北端から3.5m分の12本が長さ30cm、径18cmのもので、南部分の土管6本は、これよりもやや細長い長さ35cm、径15cmのものである。南部分は石列SX10をつくる際に継ぎ足したものと考えられる。北部分の溝掘形と土管の間には、30cm大の自然石を並べ土管を固定し、暗渠両端部は土管の開口部に合わせて溝をふさぐよう石を据えつけている。土管の継ぎ目には赤褐色の粘土を巻き漏水を防ぐ。溝埋土からは、16世紀の土器類が少量出土している。暗渠北部分の上面は、SX10の築造以前の道路であった可能性も考えられる。

SX10 発掘区南辺で検出した東西方向の石列。幅90cm、深さ20cmの掘形内に40~80cmの方形の自然石を一、二段南側に面を揃えて積み上げる。長さは19m分検出したが、調査区東方へは続かず、溝SD14付近で終わっている可能性が高い。石は上面を水平になるよう積まれており、敷地の南辺を区画する築地塀の基礎あるいは石垣と考えられる。

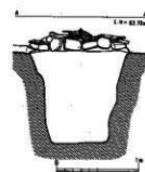
SX11 SX10と直交する石組施設。幅30cmで長さ1.5m分検出した。近現代の下水道管が同位置にあり、破壊されている部分が多いが、底に平瓦と自然石を並べ、側石を置いた石組暗渠と考えられる。

SF12 SX10の南側においては、SD09、SD14など溝は暗渠のまま続き、この部分が古地図にみられる尾花谷川の北にある道路と考えられる。検出幅は1.2mであるが、現在の尾花谷川の北岸までは、幅約3mを測ることができる。土層の堆積状態からSX10以南は、川の北岸を埋立て道路としていることがわかる。

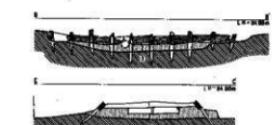
SX13 石列SX10のほぼ中央で検出した東西にならぶ2か所の柱穴。柱穴は径50cm、深さ50cmで東側の柱穴には径20cmの柱痕跡が認められる。この部分は石列SX10がとぎれおり、道路への出入り口と考えると門になる可能性もかんがえられよう。



元興寺第14次調査検出遺構（1／200）

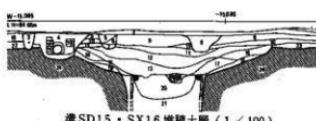


井戸 SE03 (1 / 50)



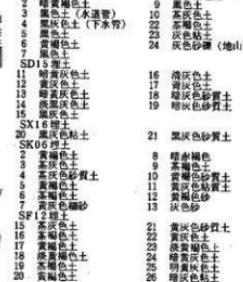
土橋 SX17 (1/100)

- | | | | |
|---|-----------|----|-----------|
| 1 | 黄灰色土 | 8 | 暗褐色土 |
| 2 | 暗紫褐色土 | 9 | 褐色土 |
| 3 | 黑色土(水道带) | 10 | 灰褐色土 |
| 4 | 黑灰色土(下水沟) | 22 | 茶褐色土 |
| 5 | 黑色土 | 23 | 灰色砂砾土 |
| 6 | 黄褐色土 | 24 | 灰色砂砾土(地山) |
| 7 | 黑角土 | | |

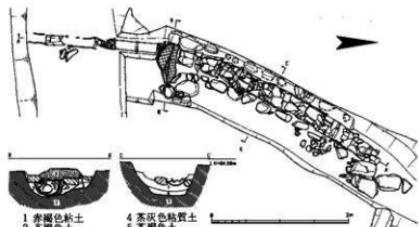


溝SD15・SX16堆積土層(1/100)

- | | | |
|--------------|-----------|----------|
| 1 黑褐色土 | SD02 墓土 | SX10 墓土 |
| 27 黑灰色土 | 30 黑灰色砂质土 | 33 灰色砂壤 |
| 28 黑灰色土 | 31 黑灰色砂壤 | 34 暗灰色粘土 |
| 31 黑褐色土 | 32 黑褐色沙 | |
| 35 黑灰色土沙(山地) | | |



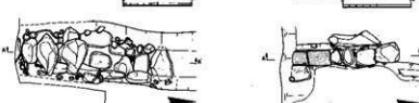
流路 SD02 · 土壤 SK06 · 石砾 SX10 · 道路 SF12 堆積土層 (1 / 100)



清 SD09 (1/60)



溝SD14 暗渠部分 (1 / 60)



石組 SX11 (1/60)

SD14 発掘区中央で検出した幅60cm、深さ20cmの南北溝。石列SX10より南では、石組の暗渠になる。暗渠部分の底は約30cm深くなる。溝埋土から17世紀の土器類が少量出土しているが、遺構の重複関係から石列SX10、道路SF12と同時期に造られた排水施設と考えられる。

SD15 発掘区東寄りで検出した幅5m、深さ60cmの南北溝。溝内に方形の木組SX16と土橋SX17がある。溝埋土から17世紀頃の土器類が出土した。

SX16 SD15の北端の底部で検出した方形の木組施設。掘形は一辺1.9m、深さ1.4mで、一辺1.4mの丸太材でつくった隅柱横棟どめの枠をつくり、周囲に竹材をあてる。隅柱、横棟とも径10cmの丸太材を使い、竹材は径3cm前後の竹をそのまま使う。埋土からは遺物が出土せず、性格については不明な点が多いが、地表面の排水のため溝内に造られた澁水施設と考えられる。

SX17 溝SD15にかけられた土橋。基底幅3m、上面幅2mの断面台形のもので高さは溝底から60cmを測る。土橋の両側は、北側に10本、南側に8本の杭を等間隔に打ちこみ、その内側に径3cmの竹材を横に6段積み上げ護岸する。中央部には瓦質土管を埋めこんだ暗渠がある。土管は長さ64cm、径16cmのもので、2本遺存していた。土橋築造時に暗渠もつくられたらしく、土管設置のための掘形は検出されなかった。

SX18 発掘区東寄りで検出した樽あるいは桶を埋めこんだ径90cm、深さ20cmの土壤。底部に幅約23cm、厚さ2cmの板材4枚からなる径90cmの円形底板が残存していた。出土遺物はなく、性格不明。

SX19~24 いずれも径50cm程度の土壤内に陶器甕を埋めこんだもの。甕内部には尿素と考えられる白色物質が付着しており便所とかんがえられる。

SE25 最近まで使用されていた円形石組の井戸。掘形は径2m、内径1.2mの自然石積みの井戸側をつくる。築造年代は不明。

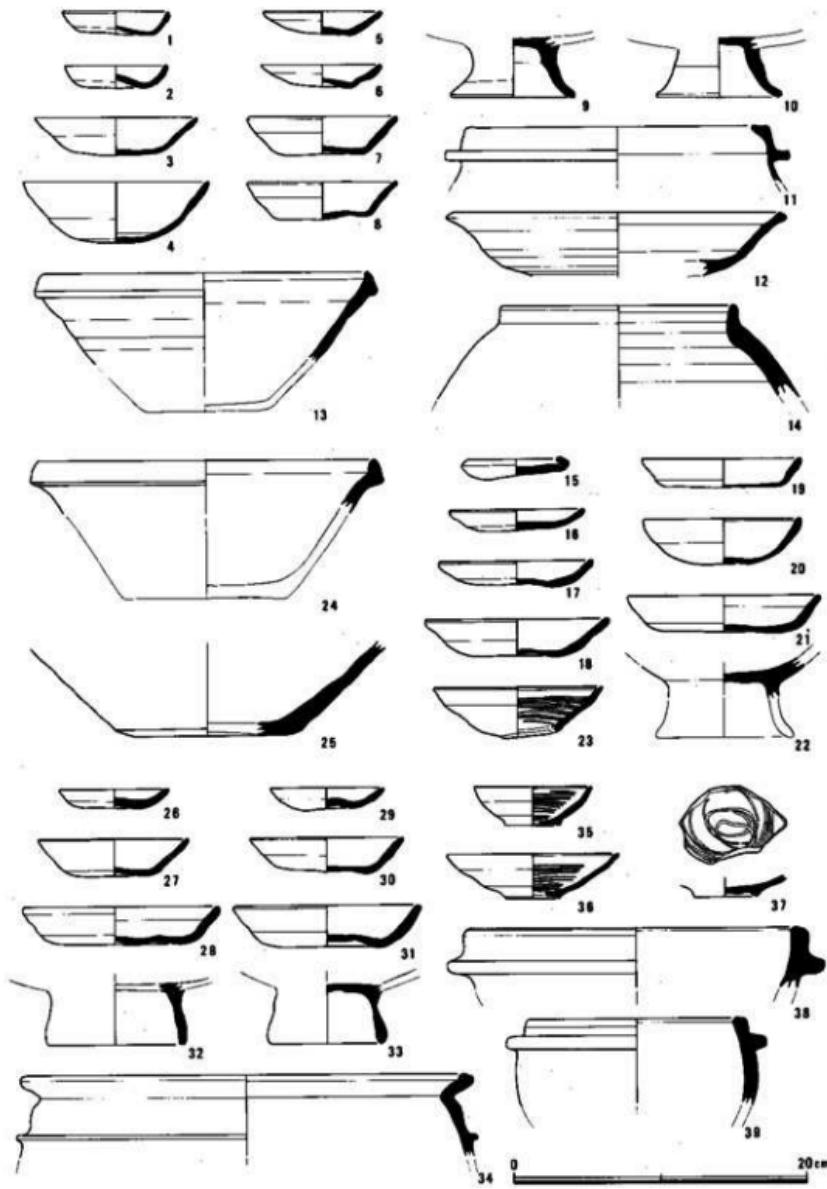
このほか検出した遺構に溝数条と土壤数か所があるが、すべて18世紀以降のもので遺物もほとんど出土しなかった。

III 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は、中世以降の土器類と瓦類である。瓦類には奈良時代のものもあるが、その量は少ない。全体の整理作業が終了していないため、比較的まとまって土器類が出土した流路SD02と、土壤SK05出土の土器類について報告する。

流路SD02出土土器

出土土器には、土師器皿(15~21)、土師器高台付皿(22)、瓦器椀(23)、須恵器鉢(24・25)等がある。土師器皿には、胎土により淡褐色を呈するもの(15~18)と、赤褐色を呈するもの(19~21)の2種類のものがみられる。淡褐色を呈するものには、口径



元興寺第14次調査出土土器 (1/4)

7.8~8.8cm程度の小皿（16・17）と、口径10.8cm程度の大皿（18）があり、他に口径5cm前後の口縁部を内へ折込む「コースター」型を称するもの（15）がある。また、赤褐色を呈するものには、口径9cm程度の小皿（19）と、口径11cm前後の大皿（21）がある。他に少量ではあるが20のように、器高2.7cmと深手の椀に近い形態のものもみられる。高台付皿は、器壁が厚手でやや大型のものである。瓦器椀は、口径10cm前後となり、器形のゆがみが大きく底部に紐状の不安定な高台を貼付けるものである。内面、口縁部外面をよこなで調整し、見込みから内面にかけて一連の渦巻状の磨きを施すのみである。川越氏編年のIII-C~D型式に相当するものであろう。須恵器鉢は東播系窯の製品である。いずれも13世紀末~14世紀初め頃のものと考えられる。

土壤SK05出土土器

出土土器には、土師器皿（1~8）、高台付皿（9・10）、釜（11）、須恵器鉢（13）、盤（12）、壺（14）がある。土師器皿には白色系のもの（1~4）と赤色系のもの（5~8）がある。白色系のものには、口径6cm前後の小皿（1・2）と口径9.6cm前後の大皿（3）がみられ、他に4のように口径11cm、器高3.6cmの深皿も若干量みられる。赤色系のものには口径7cm前後の小皿（5・6）と口径9cm程度の大皿（7・8）がある。土師器釜は口径17cmに復元される菅原氏分類の「大和H2」型式に相当するものである。須恵器鉢は東播系窯の製品である。12・14は産地不詳。いずれも14世紀末から15世紀初頭にかけての時期に把えられるものである。

これらの他に図示した土器類が遺物包含層等から出土している。26~28は白色系、29~31は赤色系の土師器皿。35~37は瓦器椀。うち35は口径7cmの小椀である。34は土師器釜。38~39は瓦器釜である。時期的には13世紀末頃の遺物が多く出土している。

IV まとめ

今回の調査では、奈良時代の元興寺に関連する遺構は検出されず、検出した遺構の大半は中世以降の興福寺塔頭に関連するものと考えられる。調査地には室町時代に慈母院、江戸時代に蓮成院と成身院といった塔頭があったことは、古絵図によってわかるが、江戸時代の蓮成院の南側には尾花谷川の北に袋小路が描かれており、この袋小路が今回の調査で検出した道路SF12に相当するものと考えられる。また、石列SX10は蓮成院の南側築地塀の基礎であるならば、古絵図のなかに蓮成院の南側築地塀に開く門を描いたものがあり、2か所の柱穴SX13はこの門になる可能性も考えられる。石列SX10は東側が溝SD14付近で終わっている可能性が高いが、この部分が東端であるならば、溝SD14は蓮成院と成身院を区画する溝になるものと考えられよう。

（纂原豊一・立石堅志）

(1) 「奈良絵図」(天理図書館保井文庫・赤丸本) 宝永~享保年間

(2) 「興福寺春日社境内絵図」(興福寺)

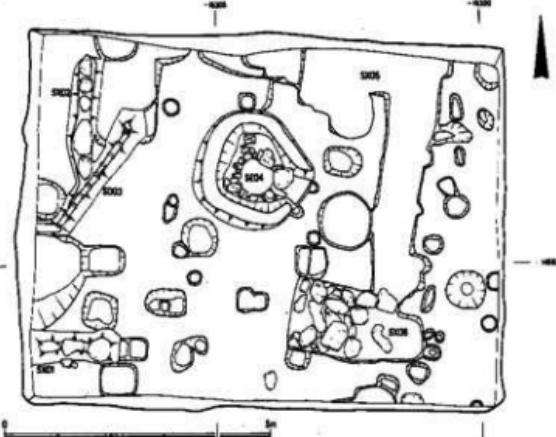
第15次の調査

この調査は松石長次氏届出の住宅改築に関する発掘調査である。調査地は奈良市勝南院町26及び北室町24・26、元興寺旧境内のうち食堂推定地の西辺にあたる。この住宅改築は都市計画街路杉ヶ町・高畠線の建設に伴うものであり、敷地の南辺は道路予定地となっていた。そのため道路予定地を除き、建物位置に東西9m、南北7mの発掘区を設定し、昭和63年8月11日から8月26日まで調査を実施した。

発掘区内の層序は、つい最近までのさまざまな掘削のため一様ではないが、基本的には表土である黒灰色砂質土以下、暗茶褐色土、焼土が多量にまざる暗茶褐色土、灰茶色土、暗灰茶色土と続き地表面下0.85~1.1mで地山である礫まじりの黄褐色砂質土層に達する。まず、焼土まじりの暗茶褐色土層上面で、ついで地山面で遺構検出を行った。

上層では石列2条(SX01・02)、土管を埋設した暗渠(SD03)、石組み井戸(SE04)などを検出した。SX01・02はともに人頭大から40cm程度の自然石を一段一列に並べたもの。重複関係からSX01より古いことがわかる柱穴から18~19世紀の土器が出土しており、それ以降のものであることがわかる。SD03は瓦質の土管を9本以上接続している。切り合い関係からSX02より新しいことがわかるが、両端を近年の土壤で破壊されており、どこに接続していたかは不明。SE04は拳大から人頭大の石を積んだ、平面円形、内法65cmほどの井戸。枠内から17世紀頃の土器が出土した。

地山面では柱穴、土壤を検出した。柱穴からは12世紀後半から19世紀までの土器が出土したが、埋土に混入したものと考えられ、時期毎に区分することや、建物としてまとめる



元興寺第15次調査検出遺構 (1/100)

ことはできない。土壤はとくに北壁際に集中しており、土層断面を検討すると上層から掘り込まれていることがわかるが、重複関係が識別できず地山面で検出した。性格は不明。

他に太平洋戦争中に掘られた防空濠がある。SX05は東西3.9m、南北50cm以上、SX06は東西2.6m、南北1.4m。両者は幅40cmの地下通路で結ばれている。SX06と地下通路のSX06への取り付け部は、一部を板壁、他を土壁にしている。

以上の結果、当初推定していた食堂の遺構を検出することはできなかった。遺物の大半が中世以降のものであり、奈良時代のものはごくわずかであったこととも考え合わせ、今回の発掘位置は食堂跡には相当していないものと思われた。
(西崎卓哉)

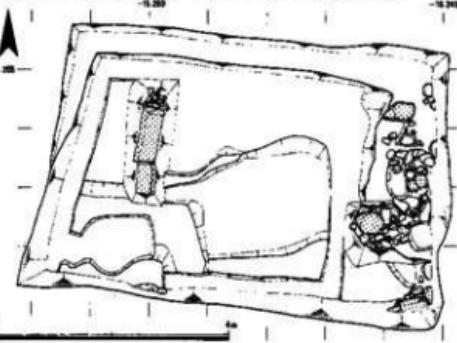
第16次の調査

本調査地は、南大門推定地に近接した位置にある。発掘面積は当初30m²であったが、排土量が多く、途中で約22m²に縮小した。

発掘区内の基本層序は、表土の下に黄灰色土、赤灰色土（焼土・炭を含む）、暗黃灰色土、黄灰褐色礫土、灰褐色礫土、黄褐色粘質土、灰褐色粘質土と続き、黄褐色礫の地山となる。地山の標高は、概ね87.4~87.5mで、現地表面からの深さは約1.2mをはかる。黄灰褐色礫土上面（16世紀）、黄褐色粘質土上面（12世紀後半）および地山上面（9~10世紀）が遺構面となるが顕著な遺構は検出していない。発掘区西寄りで検出した南北に並ぶ凝灰岩および発掘区東側の凝灰石（図中アミ表示）を含む石の集積は、前者が江戸時代、後者が16世紀以降のものとみられる。黄灰褐色礫土上面は堅くしまっており、元興寺室町時代境内図にみられる南大門前の路面ではないかと考えられる。

出土遺物はその大半が瓦類で、軒丸瓦29点（6201A 5点、複弁蓮華文3点、「興福寺」文字瓦1点、巴文20点）、軒平瓦34点（6661D b 61点、6732U 2点、6732型種不明1点、6733H 1点、均正唐草文26点、連珠文1点、不明2点）、丸瓦、平瓦、文字瓦、鬼瓦、埠がある。文字瓦は、丸瓦端部内面に「廿二乙卯 一二二乙卯」、凸面に判読不明のへう書きがみられるもの。

今回、黄灰褐色礫土より上層から室町時代の軒瓦が多く出土した。軒平瓦の中には凸面に朱の付着するものがあり、これらが位置的に近接した南大門の瓦とすれば、16世紀の後半には南大門が存在しなかった可能性が高いものと考えられる。
(鎌方正樹)



元興寺第16次調査検出遺構 (1/100)

第17次の調査

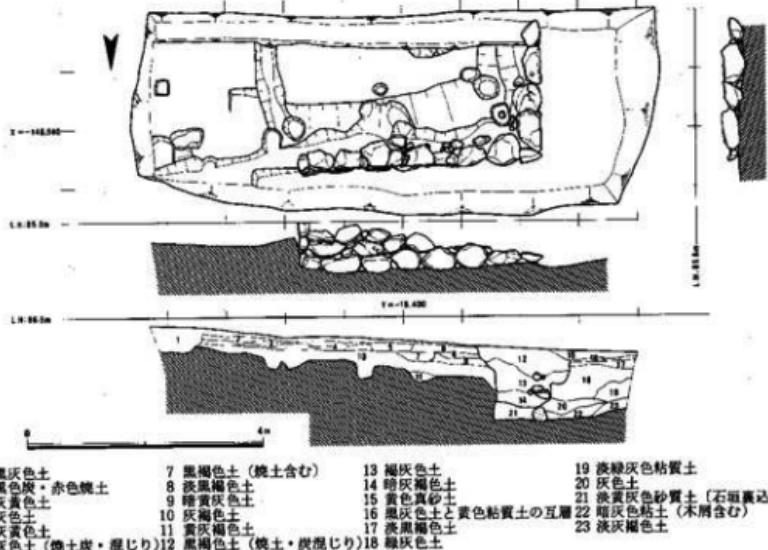
本調査地は、西面中大門推定地にある。発掘面積は約24m²である。

発掘区の基本層序は、東側で表土の下に灰色土、灰褐色土と続き地山となる。西側では、表土下に淡黒褐色土、緑灰色土、淡緑灰色粘質土、淡灰褐色土と続き地山となっている。東から西へと地山が下降しており、地山の標高は東側を概ね86.0m、西側を84.9mである。

主要な検出遺構は、東からL字形に曲がって南へ続く石垣である。北面全長4.16m、西面長2.4m以上。北面は残りのよい所で3段分の石積みが遺存するが、西面では最下段の基石が残存するにすぎない。石垣は、東から西へ傾斜する地形を削り出し、その側面に石を積み上げて構築されている。そのため、地形的に高い東側では石垣が途切れる。また、石垣西面にそって地山がゆるく凹んでおり、そこに木屑等を包含する暗灰色粘土の堆積がみられた。漏水を伴う溝状を呈していたと考えられる。さらに、石垣北西隅の内側に柱穴を一か所検出した。南北40cm、東西30cm、深さ40cmの掘形内に12~14cm四方の角柱をたてており、石垣裏込めを切り込んでいる。その性格は、今のところ不明である。

石垣の構築時期は、裏込め出土土器から14世紀頃と考えられる。これが西面中大門の基壇を踏襲したものか、あるいは元興寺室町時代境内図にみられるように境内の北西隅を限るようなものなのかは今のところ判断し難い。

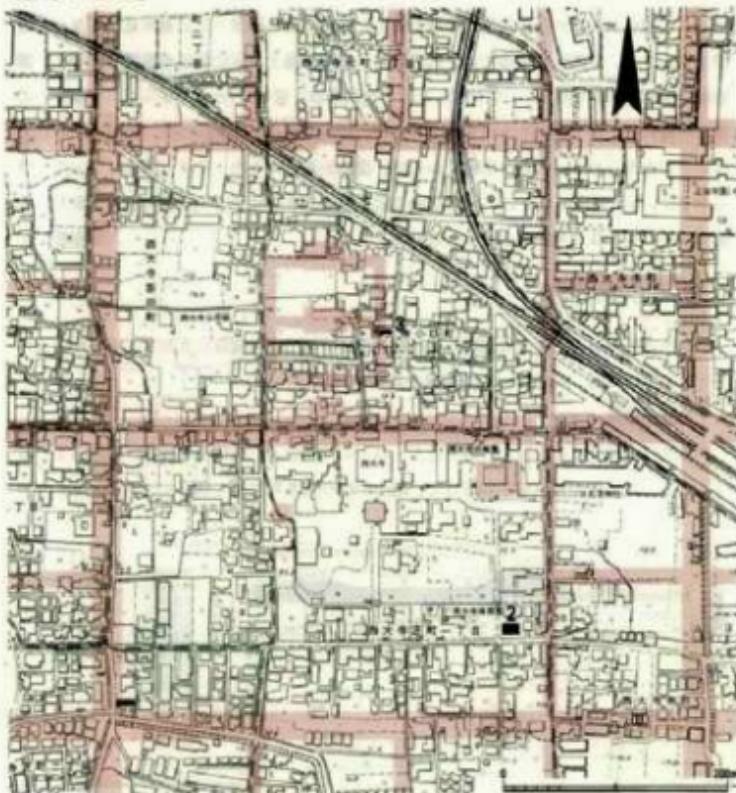
(鍾方正樹)



元興寺第17次調査検出遺構・発掘区南壁堆積土層 (1/100)

3. 西大寺旧境内の調査 第2～3次

今年度、奈良市教育委員会では西大寺旧境内で2か所の発掘調査を実施した。調査地点は下の位置図に示している。第2次の調査は奈良市西大寺芝町一丁目2463、2464において実施した、奈良市伏見連絡所建設に伴う事前の発掘調査である。調査の期間は、昭和63年6月9日から6月17日までである。第3次の調査は、奈良市西大寺小坊町330-3において実施した、武市真喜夫氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、西大寺東回廊が想定されている位置にある。調査の期間は、昭和63年10月24日から10月28日までである。



西大寺旧境内発掘調査位置

第2次の調査

本調査は、奈良市伏見連絡所建設にともなう事前発掘調査としておこなった。

調査地は、現在の西大寺の南参道と薬師堂との間に位置し、奈良時代の西大寺伽藍復元によれば、四王院と東南隅院の間に相当する。調査は、東西8m、南北5mの発掘区を設定しておこなった。

調査地は約60cmの厚さで造成されており、この造成土とその下の旧耕土を取り除くと淡青灰色の砂層と粘土層が互層となって堆積する。また、発掘区東半部では、灰色微砂、植物腐蝕土、灰色粗砂が堆積しており、調査地全域が流路跡であることが判明した。この状態は、深さ1.7mまで変らず、下層からの湧水が激しく、以下の掘り下げを断念したが、この流路により奈良時代の遺構は、存在しないものとみられる。流路の堆積土からは、遺物がまったく出土せず、時期については明らかでないが、発掘区東辺では、径80cmの広葉樹の大木が南北方向に倒れ込んでおり、規模についてもかなり大きいものとみられる。

西大寺第2次調査発掘区

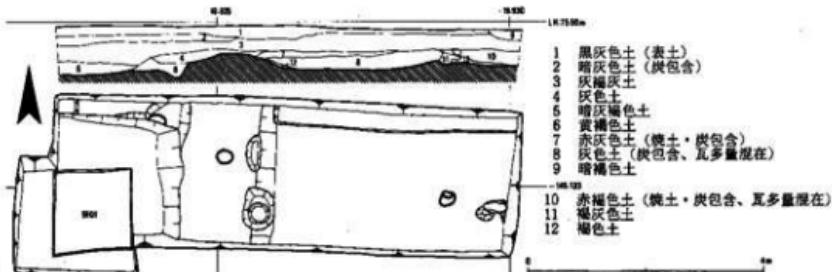
(篠原豊一)

第3次の調査

第3次の調査地は、西大寺旧境内東回廊に想定されている位置にあたり、その検出を目的として東西8m、南北2.5mの発掘区を設定した。

I 検出遺構

発掘区の土層堆積は、表土（黒灰色土）の下に灰褐色土、灰色土と続き、黄色粘土の地山となる。発掘区中央西寄りの部分で、地山が削り残されて高く残存しており、そこで



西大寺第3次調査検出遺構・発掘区北壁堆積土層（1/100）

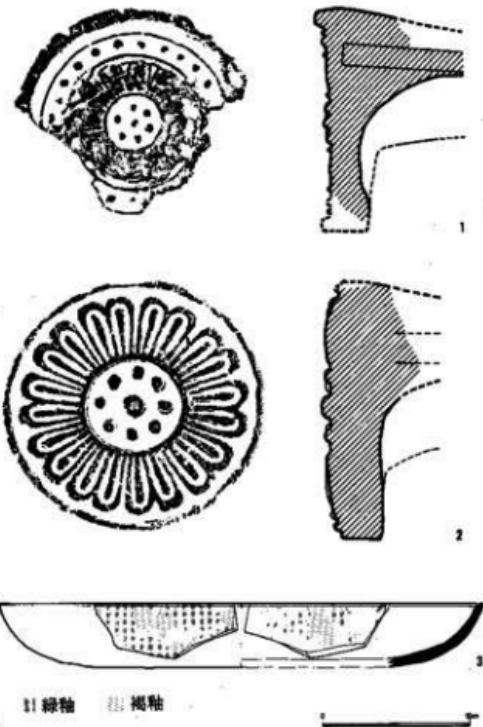
地山の標高は概ね75.0mである。その東側ではゆるい地山のくぼみがみられ、瓦類が炭とともに多量に堆積していた。また、発掘区南西隅で井戸（SE01）の一部を検出したため、若干拡張して井戸枠の規模の確認にとった。SE01は一辺2.0m以上の平面方形掘形内に、幅24cm、厚さ3~4cmの横板を2段以上に井籠組したもので、井戸枠の内法は一辺1.3mである。井戸枠内埋土上層から10世紀後半の土器が出土したが、遺感ながらも、土地所有者の同意が得られず、内部の掘り下げを断念せざるを得なかった。

II 出土遺物

出土遺物は整理箱で90箱分があり、そのほとんどを瓦類が占める。瓦類には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、埠がある。丸瓦の中には「西」と押印したもの8点が含まれ、軒丸瓦、埠の中には施釉したものがそれぞれ1点ずつある。軒丸瓦19点の内訳は6236A型式5点、単弁12弁蓮華文のもの（1）4点、複弁10弁蓮華文のもの（2）4点、三巴文のもの1点、型式不明のもの（施釉品を含む）5点である。また軒平瓦9点の内訳は、6654A型式1点、6681E型式1点、6682A型式1点、6732K型式3点、6732Q型式1点、奈良時代以降の均整唐草文のもの1点、型式不明1点である。

土器類には、土師器、須恵器、三彩施釉陶器、陶磁器がある。このうち三彩施釉陶器は、灰色土（8）から多量の瓦片とともに2個体以上が出土している。図示したもの（3）は皿で、内外面ともに綠釉と白釉の2色を施釉している。調整は、口縁部を内面は横なで、外面はヘラ削りを施し、底部外面はなでている。胎土は乳白黄色を呈し、石英・靈母等を含み精良ではない。

（鍾方正樹）



西大寺第3次調査出土軒丸瓦・三彩施釉陶器皿（1/4）

4. 薬師寺旧境内の調査 第4次



薬師寺旧境内発掘調査位置

本調査は、奈良市西ノ京町205-1において実施した、山本善作氏届出の個人住宅建築に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京右京六条二坊九坪にあたる薬師寺の旧境内であり、「薬師寺縁起」等によって、菟院に推定されている。調査地の南側では、昭和58年度に奈良国立文化財研究所によって、発掘調査が実施されており、奈良時代～近世の遺構が検出されている。しかし、そのほとんどが平安時代～近世のものであり、奈良時代のものはわずかである。調査は、南北8m、東西13m（面積104m²）の発掘区を設けて行った。調査期間は昭和63年4月4日～同年4月14日である。

発掘区内の堆積土層は、上から造成土、黒色土と続き、表土下約20cmで黄褐色土の地山

に至る。しかし、発掘区内のほとんどが近世以降の幾度もの攪乱により、との状態を保っていない。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土壙3基、南北溝2条である。掘立柱建物は、東西2間（4.3m）、南北1間以上の南北棟建物である。柱間は東西2.15m等間、南北2.3mである。主軸は国土方眼方位北に対してやや東に振れる。柱穴は小さく、いずれも直径約40cmの円形掘形である。発掘区西端で検出した南北溝は、長さ4.2m以上、幅30cmをはかる。溝内には竹筒が設置されており、井戸から竹筒を用いて水を引いた上水道の施設かと思われる。発掘区東端で検出した南北溝は幅2.7m以上、深さ1.1mをはかる。溝内から瓦器檜鉢、土師器羽釜等が出土しており、これらの遺物から16世紀後半の溝であることがわかる。

今回の調査では、前述の奈良国立文化財研究所の調査結果から予測はしていたが、奈良時代の遺構・遺物は発見できなかった。今後、中世以降の資料を積み重ねることは、奈良時代以降の薬師寺旧境内の変遷を知る上で重要であり、またわずかに見られる奈良時代の資料から薬師寺旧境内の様相を解明していくことも重要と思われる。

（森下浩行）

5. 新薬師寺旧境内の調査 第2次

I はじめに

今回の調査は、奈良市高畠町1338-1において行った住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、現在の新薬師寺本堂の北東130mに位置し、旧柳生街道に面して、中世以来春日大社の社家、称宜屋敷が建ち並んでいた所である。春日丘陵斜面に立地し、斜面を段状に削平して宅地としているため、調査地の東辺と南辺には約1mの段差があり、隣地は高くなっている。

発掘区は、調査地の南寄りに東西17m、南北4mの規模で設定した。調査期間は、昭和63年7月11日から7月22日までである。

II 検出遺構

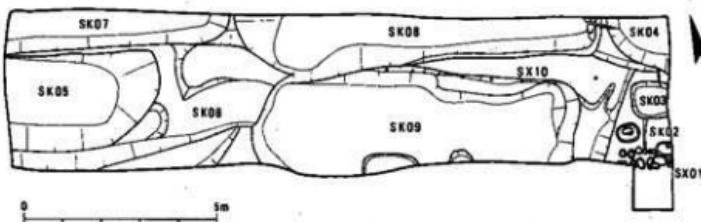
発掘区の層序は、黒灰色土（下層は瓦、礫混じり）、茶灰色土、暗茶褐色土で、地表下約60cmで黄褐色土の地山になる。遺構はすべてこの地山の黄褐色土上面で検出した。遺構検出面の標高は、概ね121.4mである。検出した遺構はすべて中世以降のもので、大形の廃棄土壠が多く、奈良時代の新薬師寺にかかわるものはない。

SX01 発掘区南辺で検出した東西方向の石列2条である。径20cm大の自然石を北列は一段、南列に二段積む。石の一部は抜取られており、時期についても明らかでないが、隣地との段差下部の土留め施設とも考えられる。

SK02 SX01の北側で検出した土壠。径50cm、深さ20cmを測る。内部には、人頭大の自然石があり、これに埋された状態で13世紀中頃の土器器皿と瓦器碗が出土した。



新薬師寺旧境内第2次調査位置



新薬師寺旧境内第2次調査検出遺構

SK03 SK02の南側で検出した土壤。発掘区外へ広がりその一部を検出できただけである。深さは30cmで、埋土からは、15世紀前半の土師器皿、土師器羽釜が少量出土した。

SK04 発掘区東北隅で検出した土壤。発掘区外に広がるため、その規模は、不明。深さは50cmで、埋土からは、15世紀後半の土師器皿、土師器羽釜、瓦器擂鉢が出土した。

SK05・06 発掘区西寄りで検出した土壤。同一の土壤の可能性がある。深さは最も深い所で60cmを測り、人頭大の自然石とともに16世紀の土師器皿、土師器羽釜、瓦器擂鉢、瓦器火舎、中国竜泉窯系の青磁碗などが出土した。

SK07・08 発掘区北辺で検出した土壤。発掘区外へ広がるため大きさは不明。深さは、ともに70cmで埋土や出土遺物にも違いはない。同時期に隣接して掘削されたものとみられる。遺物は、SK07に多く、16世紀後半の土器類がまとまって出土した。

SK09 発掘区南寄りで検出した東西約8m、南北2.5m以上の土壤。深さは約1.5mある。内部からは、19世紀の陶磁器片とともに瓦、木片が出土した。

SX10 SX09の北側に沿った東西方向の木杭列。長さは、5.4mで8本の木杭が遺存していた。杭の間隔は60~80cmである。

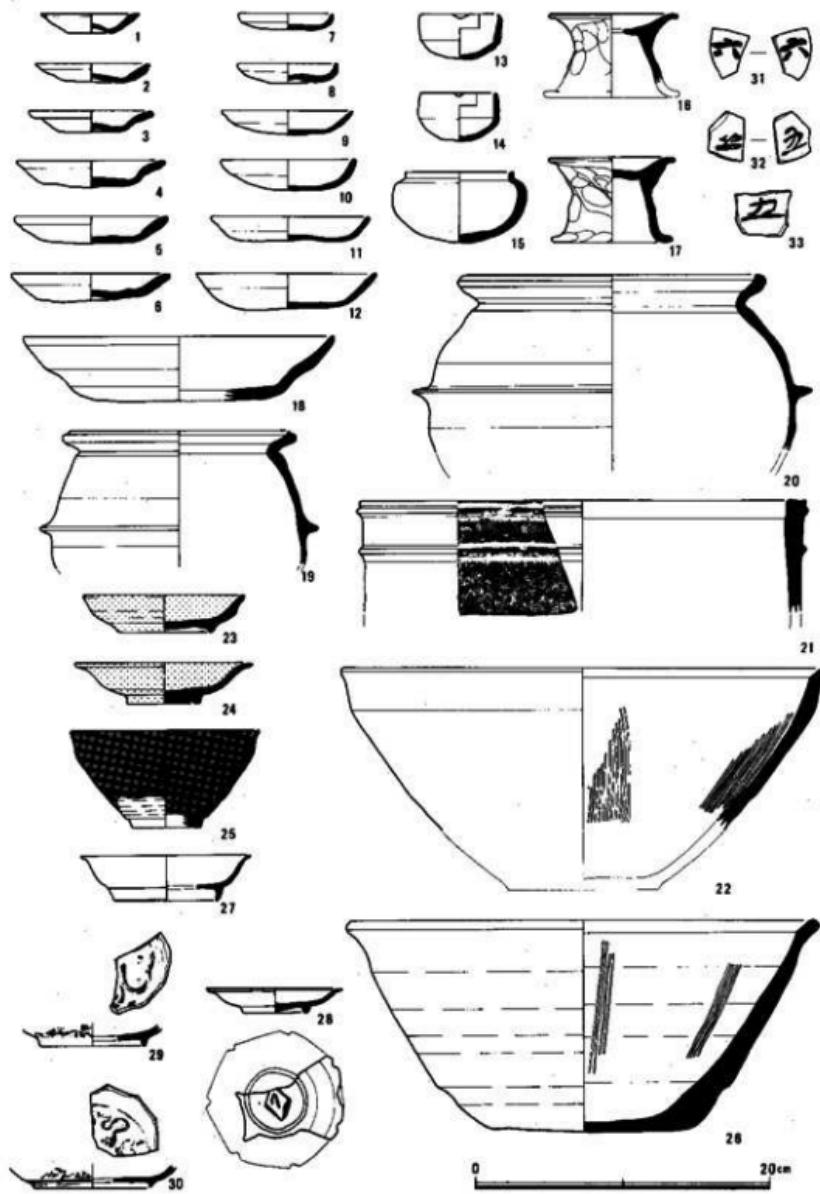
III 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は土壤から出土した中世以降の土器類である。

これらのうち、土壤SK07埋土からは、16世紀後半代の土器類がまとまって大量に出土しており、以下にこのSK07出土土器について記述する。

土壤SK07出土土器

土師器皿には、大・中・小の口径の異なるものがある。また、器形に(a)底部を上げ底状とするもの(1~6)と(b)器壁が若干薄く、底部を平底状とするもの(7~12)がみられる。(a)についてみれば、小皿は口径5cm以下、中皿で5.5~6cm程度、大皿では口径7~7.5cm程度のものがみられる。形態的に底部を上げ底状とすることなど、前段階のいわゆる「へそ皿」の系統を残すものである。またこの他に18のように口径15cmを超えるものも数点みられる。これに対し、(b)は、小皿で口径4.5~5cm、中皿で6.5cm程度、大皿では口径8.5cm程度と、これまでの(a)に対し口径、器高とも大型化しており、器壁を薄く、底部を平底にし、口縁部を斜め上方へ引きあげることなど、後の近世段階の土師器皿の特徴を持ち始めている。土師器高台付皿(16・17)は皿部に粘土の繋ぎ足しがみられ、脚部に指頭圧痕が残るなど、作りが粗雑である。また、16には皿部に径0.7cmの穿孔がなされている。片口椀(13・14)はともに口径3.8cm程度で、器高2.2cm程度のものと、口径14cm程度の2種類のものがみられる。ともに「く」の字に外反する口縁部を呈し、端部を肥厚させ、上端を内側へひきだす。矧は、脚部や下方に巡らされる。16世紀後半代のものと考えられる。瓦器擂鉢(22)は、信楽窯製品を模倣するもので、口



新薬師寺第2次調査土壌SK07出土土器(1/4)

縁端部がやや外傾する。内面に櫛描きによる櫛目（単位11本）を放射状に施す。櫛目及び体部下部に使用磨滅痕が見られる。瓦器火鉢は体部上半に2条の突帯を巡らせ、この突帯間に文様を押印し施す。陶器皿・碗（23～25）はいずれも瀬戸・美濃窯の製品である。23・24は灰釉を施し、25の天目碗は柿釉を施す。瀬戸大窯II期頃の時期のものと考えられる。陶器擂鉢（26）は、信楽窯系の製品である。肉厚の器壁をもち、口縁部を外反させ端部を方形におさめる。内面に櫛描きによる櫛目（単位4本）を放射状に施す。体部下半と底部にかけてかなりの使用磨滅痕がみられる。磁器皿のうち、27・28は白磁、29・30は青花染付である。27は景德鎮民窯系の製品であろう。28はやや肉厚で高台部分を露胎とする。口縁部外周の数箇所に切り込みを入れ輪花皿とする。釉全体に細かい貫入が入る。高台内に記号を墨書きしている。29は高台墨付と内面を露胎とし、外面に唐草文、見込みは二重円囲に「玉取獅子」文を配す。唐草文は比較的整っている。30は墨付部のみを露胎とする。外面に唐草文、見込みは二重円囲に「結帶宝杵」文を配している。唐草文はかなりくずれている。また、他に土師器小皿の細片の表裏に数字を墨書きしたもの（31～33）がある。

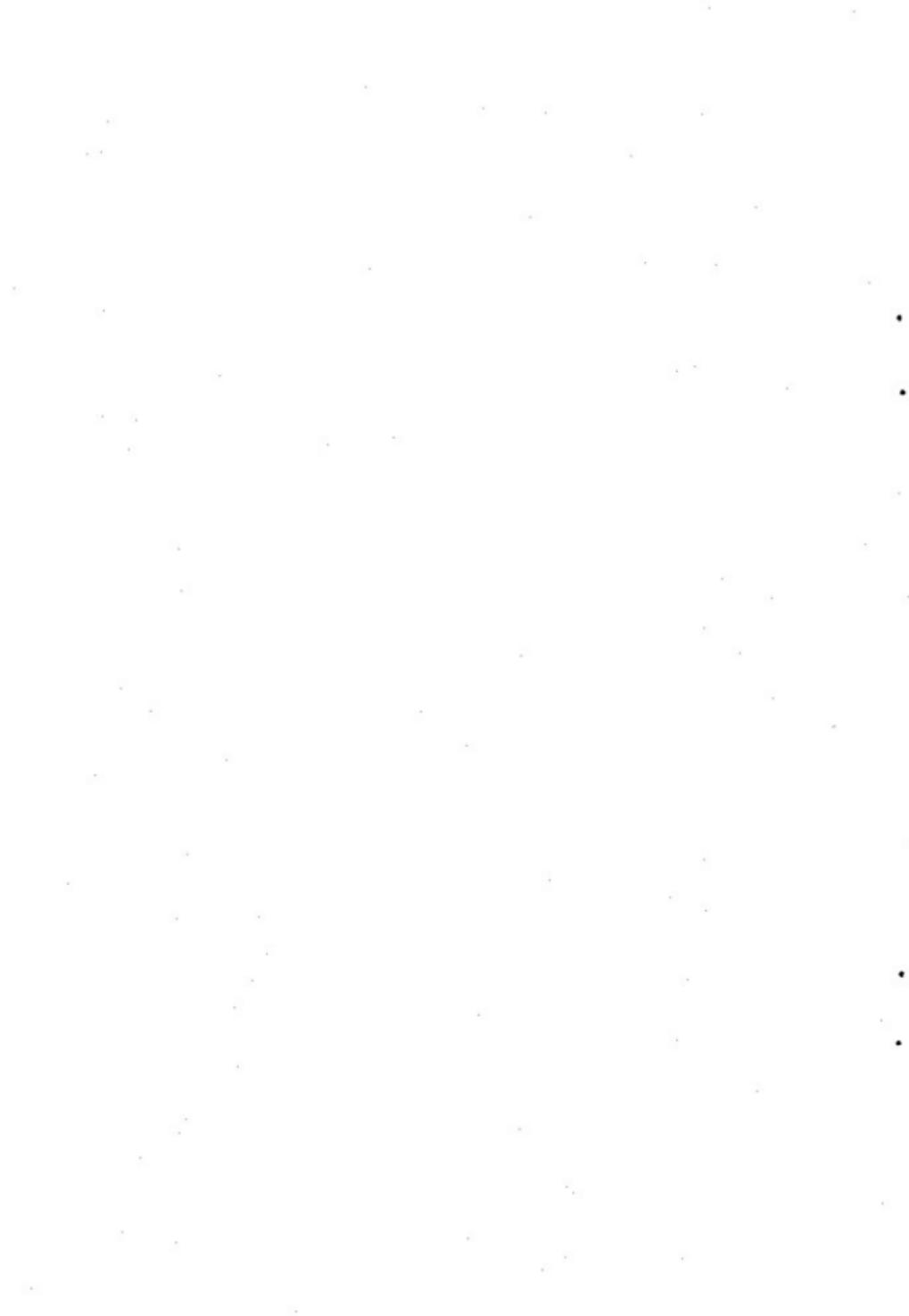
IVまとめ

ここでは、前項で記述した土壤SK07出土土器が、中世土器様式編年を試みる上で貴重な資料であると考えられるため、この編年観について検討することとする。

この土壤SK07出土土器で編年上興味深い事点として、まず土師器皿に、中世的な「へそ皿」の形態を示すものと、近世的な平底のものが共存して出土していることが挙げられる。この「へそ皿」の形態のものは、古市廃城跡や、多聞廃城跡から出土しているものと類似し、16世紀後半代のものと考えられる。このことから、16世紀後半代の土師器皿の形態に既に近世的なものが現われていたことが知られる。これは、従来あまり明らかではなかった中世的なものから近世的なものへの転換期を知る上で貴重な資料となると言えよう。またこの時期の土師器釜についても、今回大量に出土した資料の検討から、鋤をやや下に付す「大和I型」の変遷過程を考えることができよう。土師器釜の編年観からすれば、⁽¹⁾今回のものは、古市城山遺跡における墓地域出土の「大永2年」銘の土師器釜より後出するもので、奈良町脇戸町SX10出土の釜とほぼ同形態のものと考えられ、これらのことから16世紀第3四半期頃の時期を考えることができる。そして、17世紀代に入り奈良町北室町⁽²⁾SX06出土の体部下半に鋤を付すものへと続くと考える。以上二点について概述したが、これから出土資料の増加によりさらに詳解できるものと期待する。（藤原豊一・立石堅志）

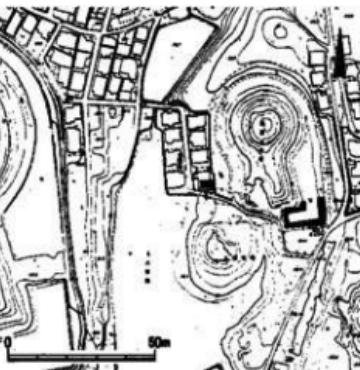
- (1) 藤原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 1983に掲載した。
(2) 奈良市教育委員会「古市城跡発掘調査報告」「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和55年度」1980
(3) 奈良市教育委員会「平城京左京四条六坊十四坪発掘調査概要報告」「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度」1981
(4) 奈良市教育委員会「元興寺食堂跡推定地の調査」「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和57年度」1982

III. 平城京及びその周辺その他の調査



1. 史跡瓢箪山古墳隣接地の調査

史跡瓢箪山古墳の隣接地で2件の発掘調査を行った。1件は住野進二氏届出の住宅改築に関わるもので、調査地は奈良市佐紀新町3241-1、調査期間は昭和63年4月25日から4月28日までである。他の1件は今井靖雄、道子氏届出の住宅改築に関わる調査で、佐紀新町3241-10において、平成元年2月10日に実施した。両調査地とも瓢箪山古墳前方部西側に近接し、前者(1)は復元想定されている(註)墳丘西側の外堤にあたり、後者(2)はその外側に隣接していた。



発掘調査位置

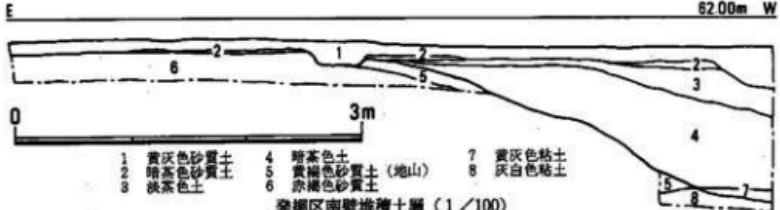
住野氏届出地の調査は東西5.5m、南北6.5mの発掘区を設定して行った。木造家屋を取り壊した後の整地土を除くと、旧表土である暗茶色砂質土のうすい層が部分的に残ってはいるが、すぐに地山である黄褐色砂質土、赤褐色砂質土層があらわれた。地山は西へ向って下り勾配になっている。堆積状態は下図に示した。遺物はまったく出土しなかった。

今井氏届出地の調査は東西2.5m、南北2.0mの発掘区を設定して行った。表土下数cmで黄褐色砂質土、赤褐色砂質土層があらわれた。遺物・遺構はみられなかった。

両調査ともごく狭い範囲での発掘であったので即断はさけねばならないが、発掘区内には外堤に相当すると思われる遺構は見られない。瓢箪山古墳の西、日葉酢媛陵古墳がある尾根との間の浅い谷には、現在、上下ふたつの吉堂池があるが、発掘区内の地山の傾斜をここに向ってなだらかに下る尾根斜面と見ることもできよう。とすれば、少なくとも瓢箪山古墳前方部西側には、外堤はなかったとも考えられる。 (森下浩行・西崎卓哉)

(註) 奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第30集

1978. 3



2. 平城京城・周辺のその他の調査

周知の遺跡内での土木工事等に先立ち、その規模の小さいもの、周辺の調査例からみて造構の存在する可能性が低いもの、工事が軽易で遺跡に及ぼす影響がほとんどないと考えられるものについて、試掘調査の意味を含めて、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所と合同で、緊急の発掘調査を実施した。本年度の実施件数は31件である。以下の表によってそれらの概略を記す。

次 数	遺 跡 名	届 出 地	工 事 内 容	調 査 日	調 査 細 要	届 出 者
88-1	左京三条三坊三坪	大宮町七丁目 534-1	パチンコ店舗	4月14日	奈良時代柱穴検出	奈良興業舗
88-2	北辺坊	西大寺赤田町二丁目1491	倉庫	4月15日	遺構なし	奥田興産㈱
88-3	西大寺旧境内	西大寺界神町二丁目1803地	宅地造成	4月19日	東掘溝検出	三和住宅㈱
88-4	興福寺旧境内	東向北町1-1, 1-3	事務所建築	5月23日	土壤検出	住友信託銀行
88-5	左京五条六坊一坪	大森町 278-2 他	共同住宅	6月10日	土壤検出、埴輪出土	岡田憲義
88-6	一条大路	法蓮町 634-1	共同住宅	6月29日 7月1日	土壤・溝検出	辻中正夫
88-7	左京五条六坊八坪	南新町30-1	共同住宅	7月8日	土壤検出	上根茂則
88-8	左京九条一坊十五坪	西九条町3丁目13	店舗増築	7月12日	遺構なし	大和ハウス工業㈱
88-9	元興寺旧境内	西寺林町30	店舗付住宅	7月15日	東掘溝検出	垣内利幸
88-10	紀寺旧境内	紀寺町 669-2	共同住宅	8月1.2日	柱穴・土壤検出	柳朝日住建 澤田建設㈱
88-11	右京四条二坊十・十一坪 (辨恩院)	尼辻中町 393	共同住宅	8月29日	遺構なし	澤田欣次
88-12	左京五条六坊十一坪 (佐伯院)	西木辻綿町 250	共同住宅	9月20日	溝・土壤検出	合同建設㈱
88-13	左京五条六坊十一坪 (佐伯院)	西木辻町 119-4 他	店舗付住宅	9月20日	遺構なし	柳ロンドン倶工房 柳朝日住建
88-14	左京一條七坊十四坪	今在家町54-4 他 川上町字八反田 588	共同住宅	9月17日	土壤検出	合同建設㈱
88-15	右京一条二坊三坪	二条町二丁目65-8	共同住宅	10月17日	柱穴・溝検出	杉本喜久藏
88-16	五条大路	京終地方東側町20	公衆浴場	11月2日	溝検出	山崎政義
88-17	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町57-1	社宅	12月6日	遺構なし(自然流路)	NTT㈱
88-18	遺物散布地	南紀寺町三丁目 320-1	共同住宅	12月15日	遺構なし(自然流路)	田村修
88-19	北辺坊	西大寺新町二丁目101-2	共同住宅	12月20日	遺構なし(自然流路)	加藤敬治
88-20	東六坊大路	鏡屋町 2-1, -5	共同住宅	12月22日	遺構なし	山村孝雄
88-21	東二坊訪問路	西九条町三丁目3-13地	倉庫	1月13日	古墳時代土壤検出	奥村忠雄
88-22	左京二条四坊八・九坪	法蓮町 403-1, -4	共同住宅	1月18日	土壤・柱穴検出	合同建設㈱
88-23	左京四条三坊十・十五坪	三条町字源川 193, 194	共同住宅	1月27日 28日	坪場・小路・孤立柱跡検出	田中晴子
88-24	左京二条六坊七坪	法蓮町 1000	学校建設	2月3日	遺構なし(自然流路)	奈良育英学園
88-25	元興寺旧境内	高畠町吉提1116-6	事務所ビル	2月14日	遺構なし(谷地形)	県土地開発事業部
88-26	左京四条五坊十三・十四坪	杉ヶ町 7-3, -4, 4	商業ビル	3月2日	古墳時代流路検出	公文代農業
88-27	左京四条六坊四坪	角振町 2	共同住宅	3月3日	遺構なし	福井嘉治
88-28	左京二条六坊八・九坪	法蓮町字セト095-2	事務所付住宅	3月7日	奈良時代以降の自然流路	村田武司
88-29	左京二条四坊七坪	法蓮町 380-1	共同住宅	3月8日	奈良時代遺構面の確認	柳大和・ワグナーパ
88-30	左京六条三坊十一坪 (東堀町)	大安寺町68-10	店舗付住宅	3月10日	東堀河検出	貝阿弥末広
88-31	北辺坊(坪場・小路)	西大寺北一丁目8-10	共同住宅	3月28日	坪場・小路西側溝検出	辻中正雄

図 版



1. 調査地遠景（南から）



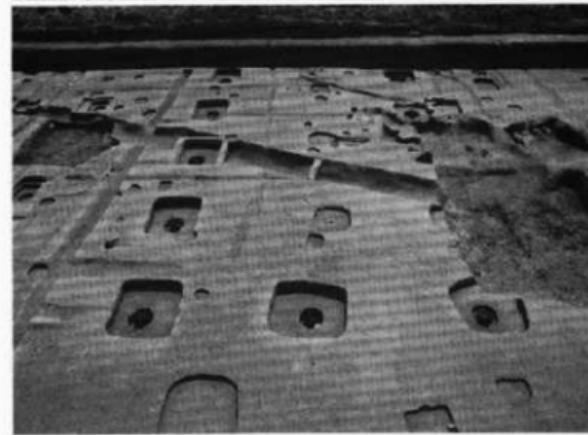
2. 発掘区全景（北から）



3. 潟 S D 18 (南から)



4. 潟 S A 16 (北から)



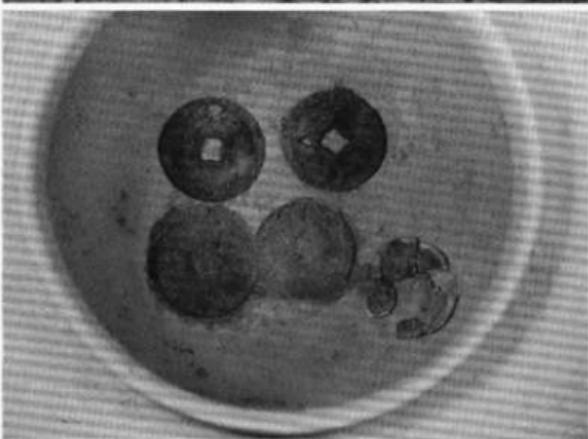
5. 建物 S B 09 (西から)



6. 土器埋納塚 S X 17 (南から)



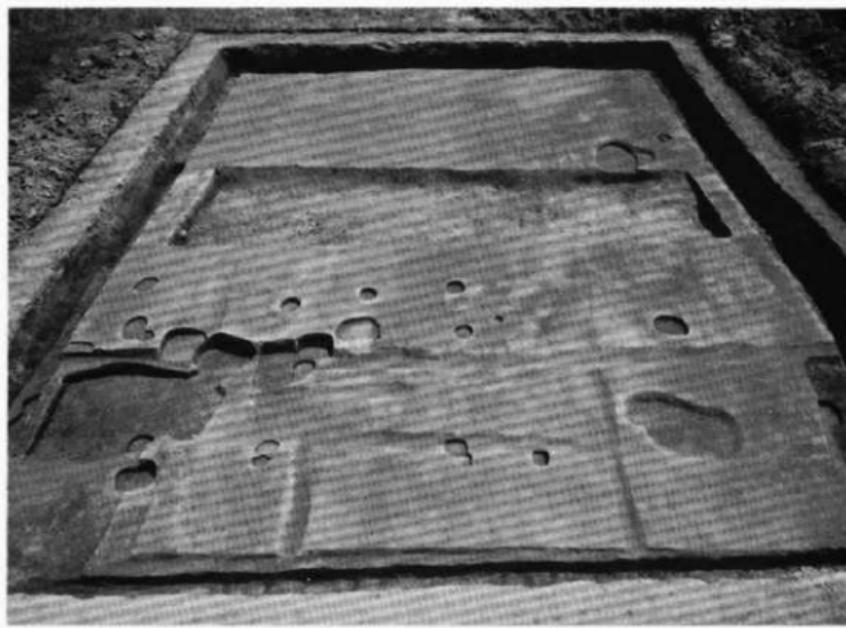
7. 土器埋納塚 S X 17 (北から)



8. S X 17 出土土器内部



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（東から）



1. 発掘区全景（南から）



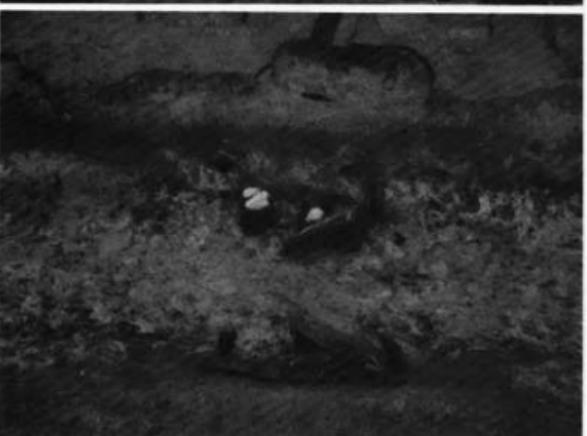
2. 発掘区全景（北から）



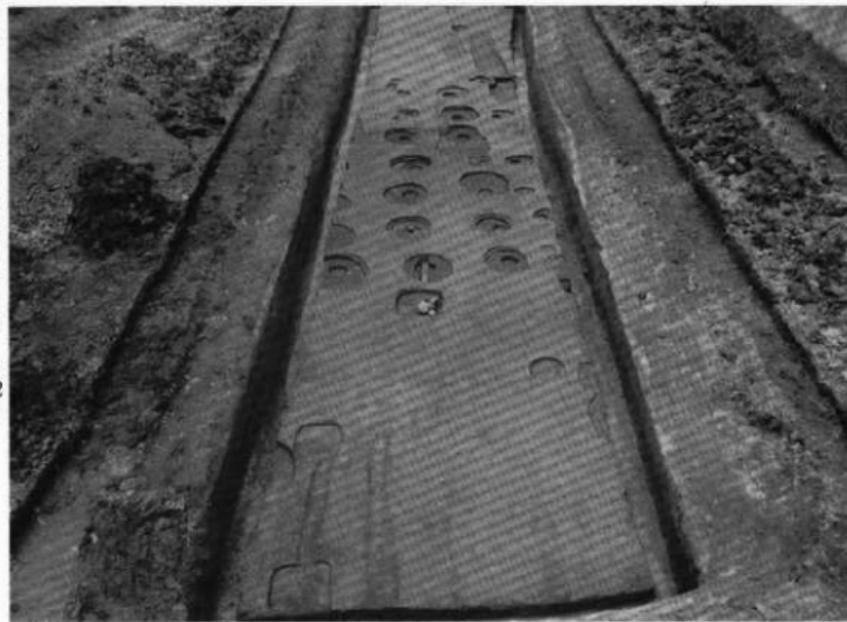
1. 溝 S D 03 (南から)



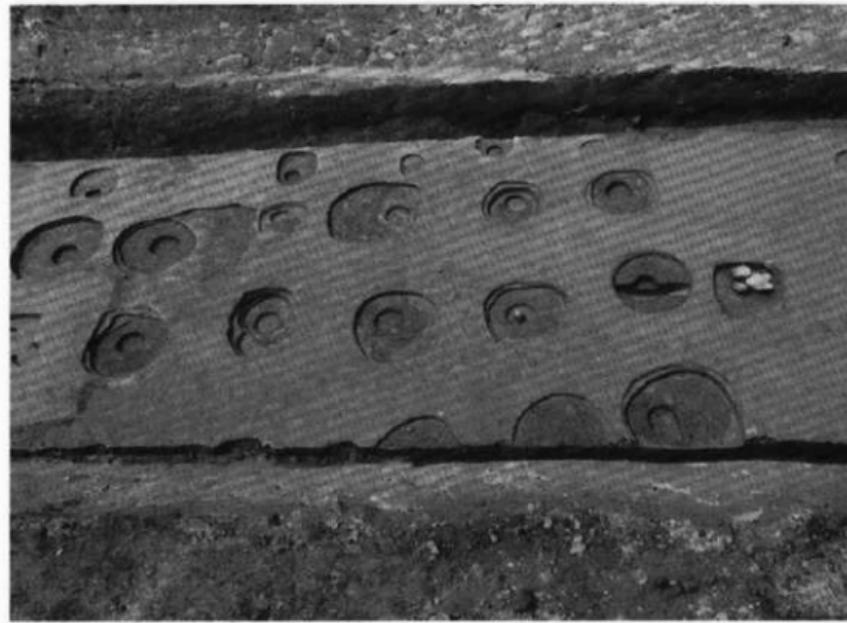
2. 溝 S D 02 (南から)



3. 橋 S X 11 (西から)



1. 発掘区全景（西から）



2. 建物SB 01、SB 02（南から）



1. 第153次 発掘区全景（南から）



2. 第159次 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（南から）



2. 拡張区全景（南から）



3. 土器埋納壙 SX10（西から）



3. 奄掘区全景（西から）



4. 奄掘区西半部（東から）



5. 発掘区東半部（西から）



6. 坪塙小路 S F 01（西から）



7. 構SA 04・05 (西南から)



8. 構SA 05 (南から)



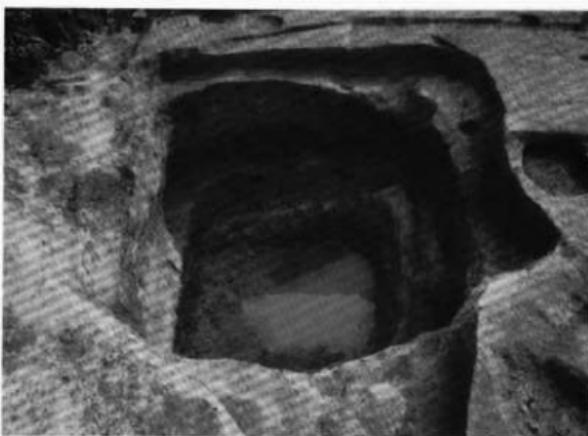
9. 建物 SB 12 (北から)



10. 建物 SB 20 (東から)



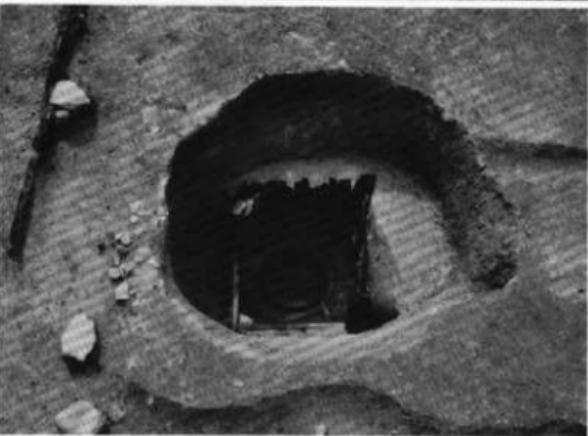
11. 建物 SB 21 (南から)



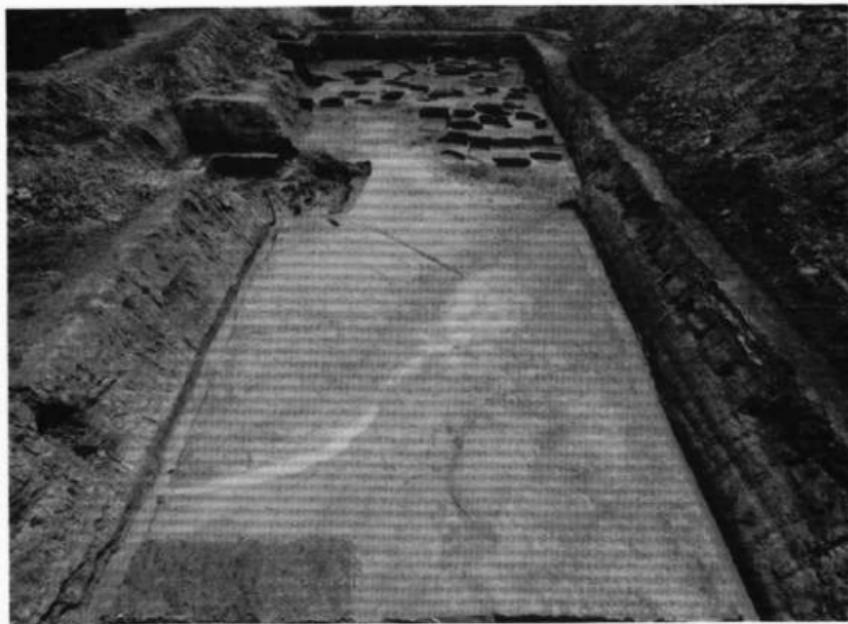
12. 井戸SE 30 (北から)



13. 井戸SE 36 (北から)



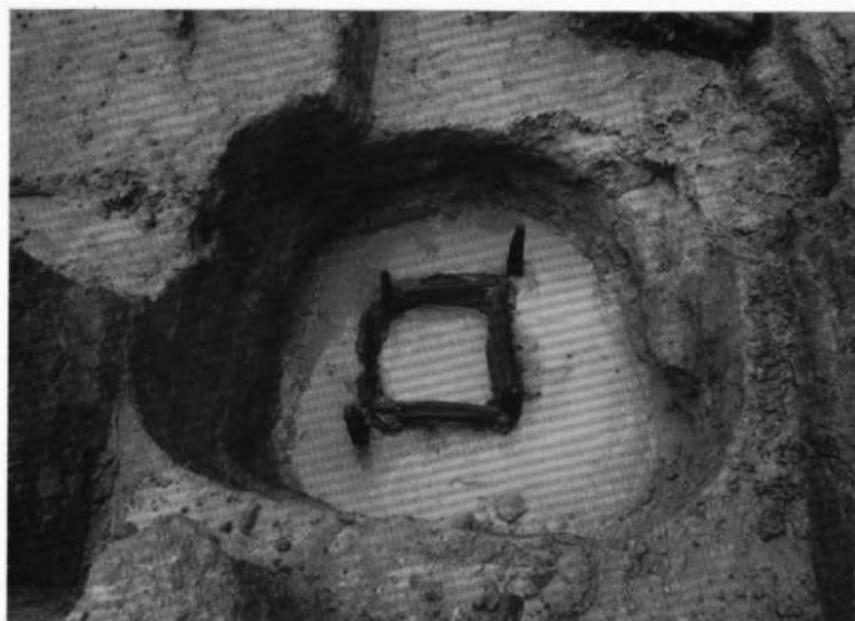
14. 井戸SE 41 (東から)



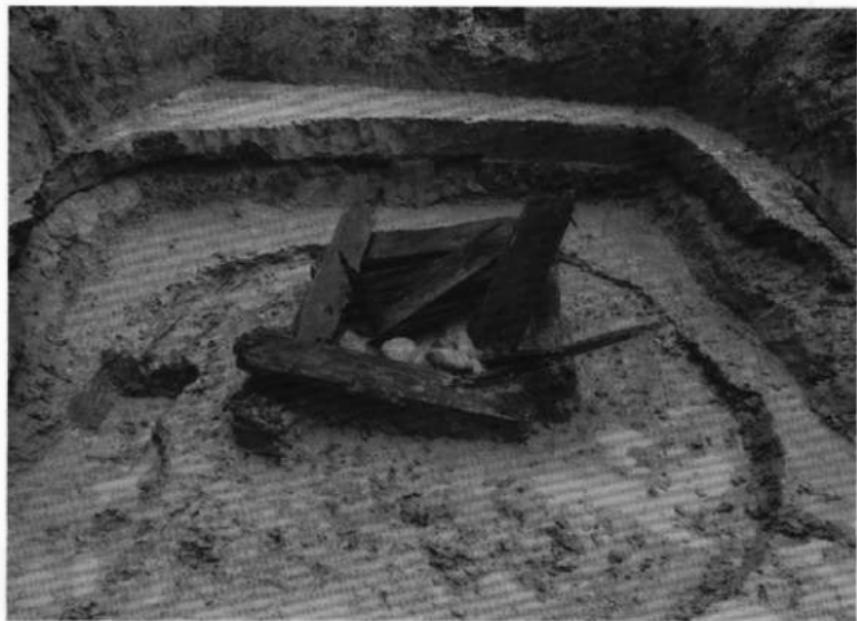
1. 発掘区全景（西から）



2. 発掘区全景（東から）



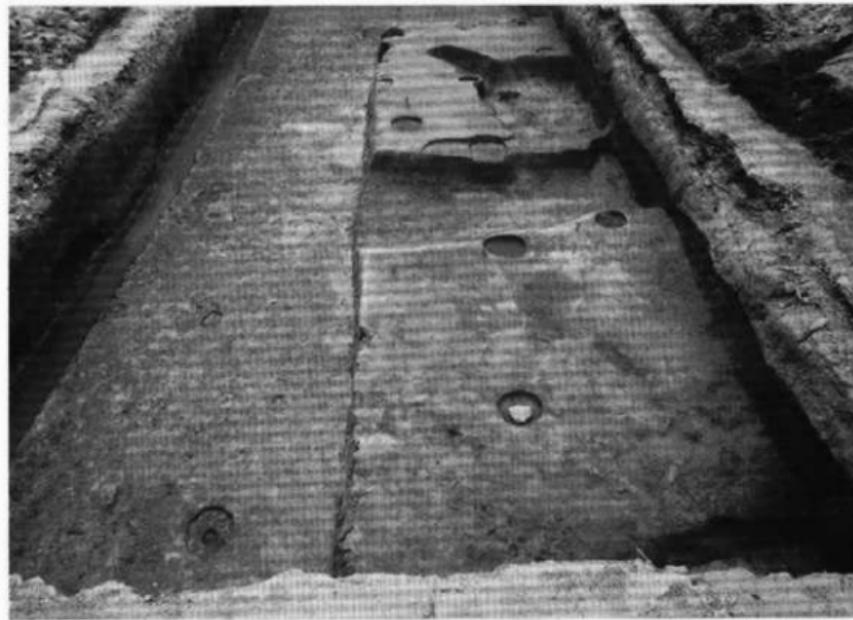
3. 井戸 S E 03 (北から)



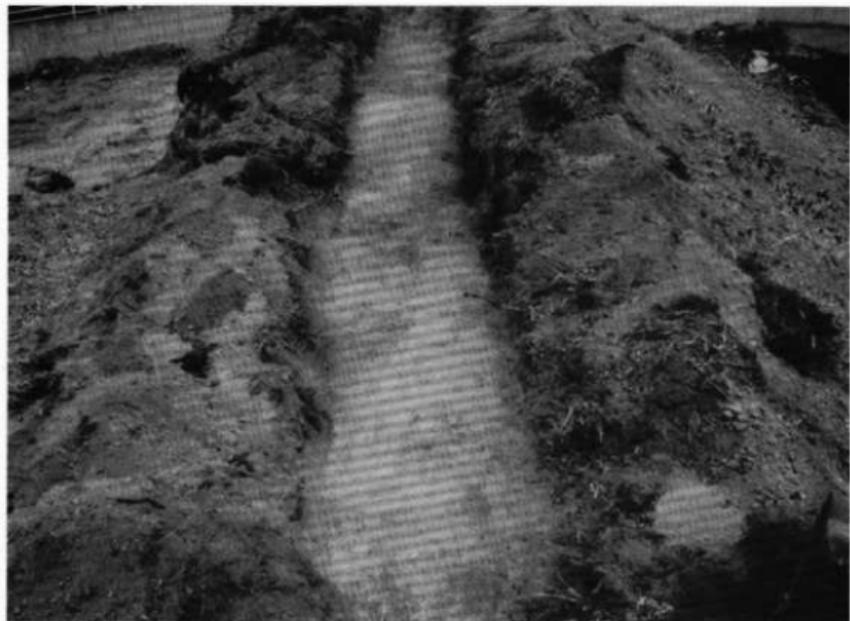
4. 井戸 S E 02 棚出状況 (南から)



1. 発掘区全景（西から）



2. 発掘区全景（東から）



1. 南北発掘区全景（南から）



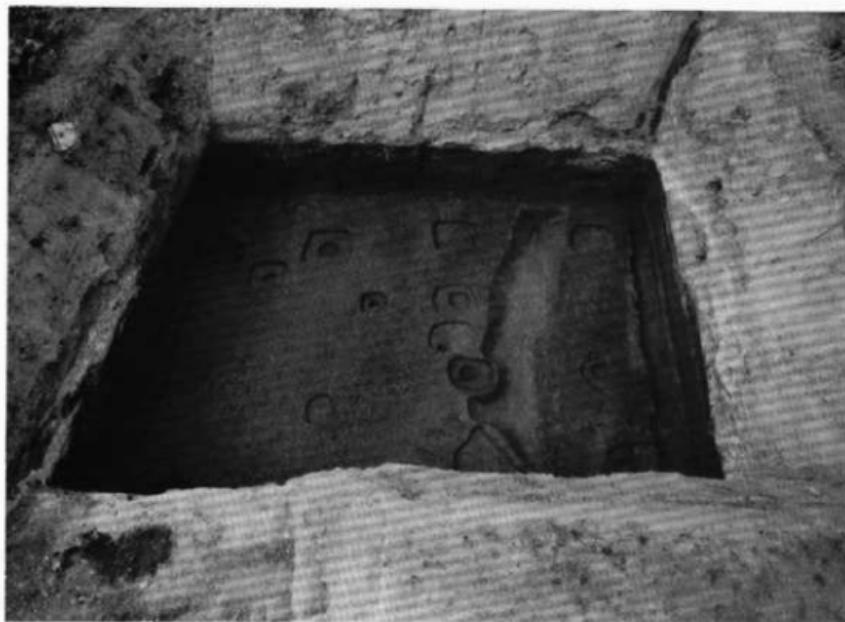
2. 東西発掘区全景（東から）



1. 北堀掘区全景（西から）



2. 北堀掘区全景（東から）



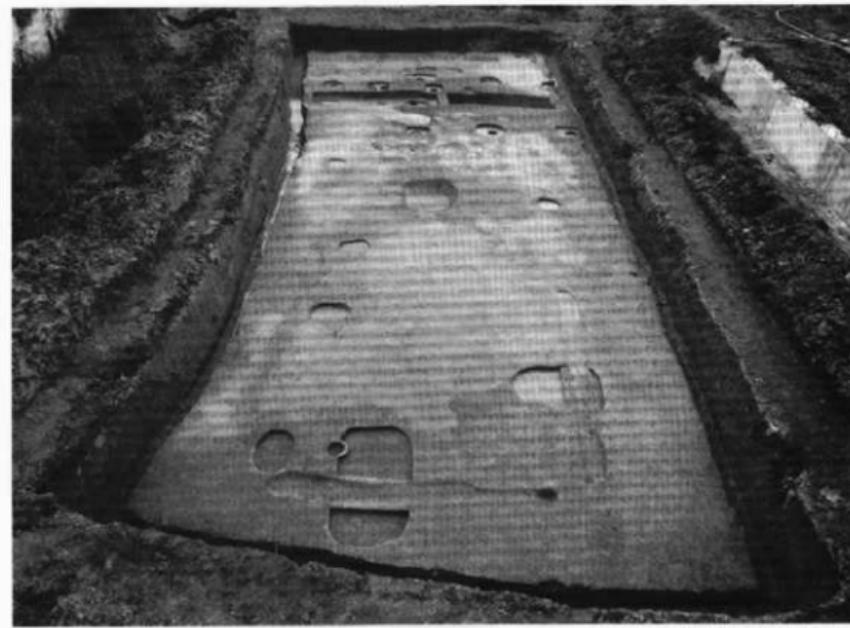
3. 南発掘区全景（南から）



4. 南発掘区全景（北から）



1. C発掘区全景（南から）



2. C発掘区全景（北から）

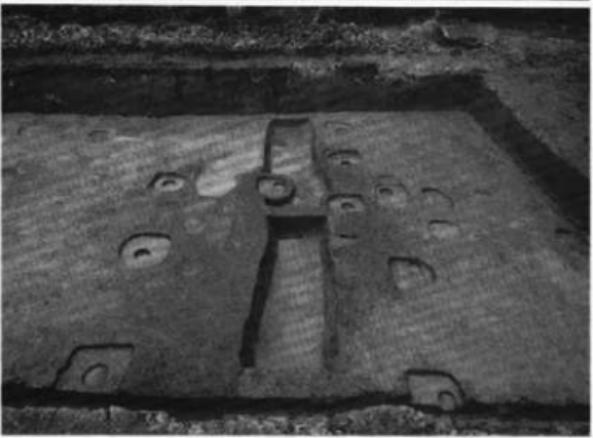
3. B発掘区全景（北から）



4. A発掘区全景（西から）



5. 满SD 02・建物SB 04
(西から)





1. 南北発掘区全景（北から）



2. 南北発掘区全景（南から）



3. 東西発掘区全景（西から）



4. 東西発掘区全景（東から）



1. 北発掘区全景（北から）



2. 南発掘区全景（南から）



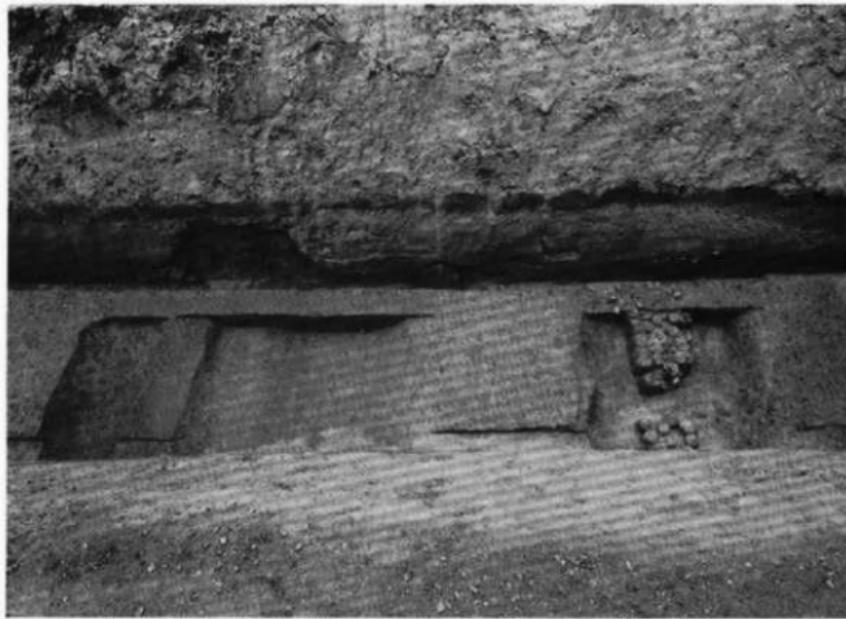
1. 発掘区全景（東から）



2. 井戸 S E 06（東から）



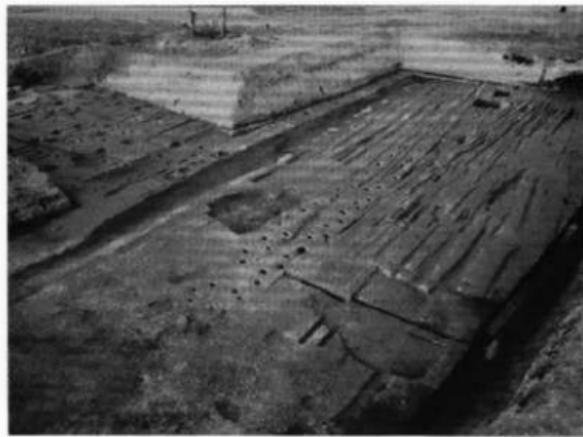
3. 溝SD 05・SD 03（南から）



4. 溝SD 02・SD 04（南から）



菟堀区全景（航空写真）



1. 発掘区全景（南西から）



2. 十四坪内建物群（東から）



3. 第2発掘区全景（南から）